HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『全体新論訳解』二種の研究
Author(s)	許, 春艶
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12071号
Issue Date	2016-03-24
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k12071
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61569
Type	doctoral thesis
File Information	Xu_Chunyan.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成廿七年度
博士学位論文

『全体新論訳解』二種の研究

北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻

許　春艶

凡例

一　本論文に現れた書物の略称について、次のように統一する。

（一）　『全体新論訳解』を『訳解』と略す。

（二）　石黒厚訳『全体新論訳解』を石黒『訳解』と略す。

（三）　高木熊三郎訳『全体新論訳解』を高木『訳解』と略す。

（四）　国立国会図書館に所蔵される高木『訳解』を国会本高木『訳解』、国立国会図書館に所蔵される石黒『訳解』を国会本石黒『訳解』、北海道大学附属図書館に所蔵される石黒『訳解』を北大本石黒『訳解』のように略す。

（五）　『日本国語大辞典』（第二版）を『日国』と略す。

（六）　八耳俊文（一九九九）「19世紀漢訳洋書及び和刻本所在目録」を八耳「目録」と略すことがある。

二　本論文で『全体新論』と『訳解』の本文内容を引用する際に、表記は次のように改める。

（一）　和刻本の訓点は原文による。

（二）　漢字の旧字体は原文に即することとして、入力できない場合は近い字体に直す。

（三）　仮名の異体字・合字は現行の字体に直す。

（四）　適宜、句読点を補う。

（五）　本文中の傍点は基本的に省略する。

三　本論文では『全体新論』、『訳解』およびほかの書物について、書名を引用する際に、新字体にするが、論述の内容を引用する際のみ、可能な限り原文どおりの字体にする。

四　紀年法について、日本で著された資料には、「年号（西暦）」のようにする。中国側の紀年を表す際は、西暦表記を基本とするが、いくつかの場合に中国年号（西暦）を表記する。

目次

凡例……i

第一章　序論……1

第一節　研究背景と意義……1

第二節　論文構成……2

第二章　『全体新論』と『全体新論訳解』二種……4

第一節　『全体新論』と『全体新論訳解』に関する先行研究……4

一　著者ホブソンおよび『全体新論』に関する先行研究……4

二　『全体新論訳解』二種に関する先行研究……5

第二節　『全体新論』と『全体新論訳解』……6

一　『全体新論』の著者ホブソン……6

二　『全体新論』に対する中日両国での反響……7

三　『全体新論』の和刻本と和訳本……8

第三節　研究対象資料……9

一　和刻本『全体新論』……9

二　『全体新論訳解』二種の内容構成……10

第四節　『全体新論訳解』二種の著者……10

一　石黒厚……10

二　高木熊三郎……11

第五節　『全体新論訳解』二種と和刻本『全体新論』の関係……13

第六節　『全体新論訳解』二種の言語学的資料価値……14

一　表記に関する研究価値……14

二　字音に関する研究価値……16

三　近代語彙に関する研究価値……17

第七節　まとめ……18

第三章　『全体新論』と『全体新論訳解』二種の現存本調査……19

第一節　調査目的……19

第二節　現存本の所在……19

第三節　現存本の現地調査……23

一　中国書『全体新論』……23

二　越智蔵版『全体新論』……24

三　二書堂発兌『全体新論』……25

四　分類不明『全体新論』……26

五　石黒『全体新論訳解』……26

六　高木『全体新論訳解』……27

第四節　現存本の使用形跡……28

一　漢字に関する書き入れ……28

二　漢語に関する書き入れ……34

三　医学用語に関する書き入れ……35
四　使用形跡から見る『全体新論』と高木『全体新論訳解』の関係……38
第五節　『全体新論』の読解と『全体新論訳解』二種……40
一　現存本の漢字注釈と『全体新論訳解』二種……40
二　高木『全体新論訳解』の注釈……41
第六節　石黒『全体新論訳解』の版元……43
第七節　まとめ……45
第四章　『全体新論訳解』二種の振り仮名……47
第一節　振り仮名に関する先行研究……47
第二節　振り仮名の取得方法……48
一　テキスト入力の方針……48
二　データベース構築の手順……51
第三節　データベースの構築による振り仮名の分析……57
一　データベースの項目……57
二　振り仮名の統計……58
三　右側振り仮名の音・訓読みの統計……60
四　右側振り仮名の品詞統計……61
五　左右両側振り仮名と左側振り仮名……63
第四節　訳述方法の差異による振り仮名の特徴差……66
第五節　まとめ……67
第五章　『全体新論訳解』二種の漢字音……69
第一節　明治初期の漢字音に関する先行研究……69
第二節　『全体新論訳解』二種の異なる漢字音の収集……71
一　収集の方法……71
二　収集の結果……71
第三節　『全体新論訳解』各書の同一漢語の異なる漢字音……78
第四節　『全体新論訳解』二種の同一漢語の異なる漢字音……83
第五節　漢音と呉音の揺れの分類……86
第六節　まとめ……88
第六章　幕末明治期における漢訳洋書の受容……89
第一節　はじめに……89
第二節　漢訳洋書について……89
一　初期漢訳洋書……90
二　後期漢訳洋書……90
第三節　漢訳洋書の受容に関する先行研究……93
第四節　『全体新論』における医学用語の受容……94
一　医学用語の抽出……95

二　『全体新論訳解』二種における医学用語の受容様相……96
三　『全体新論』の医学用語の日本での受容……98
第五節　『全体新論』から見る漢訳洋書の受容過程……100
第七章　結論……105
参考文献……109
調査資料……112
使用コーパス・データベース……114
謝辞……115

第一章　序論

第一節　研究背景と意義

明治維新の前に、日本は開国を迫られ、世界を知り西洋文化を学ぼうとする意欲が高まった。その重要な情報源の一つは漢訳洋書であった。漢訳洋書は中国において、宣教師によって書かれた西洋文明を紹介する書物である。これらの書物は当時の漢文の教養を持っていた日本の知識人にとって西洋知識を学ぶ近道となった。

明治以後、欧米の文物が大量に押し寄せてきたが、日本語にはない語彙については新しい日本語を作らなければならなかった。その際に知識人は最初に中国の英華辞典と漢訳洋書から借用語（注一）を取り入れ、訳語を創案した。つまり、漢訳洋書は西洋科学や文化を吸収するための情報源となっただけではなく、新しい日本語を産出する一つのルートとなったのである。

近年、日中近代語交渉に関する研究は日中両国の近代語研究に欠かせない重要な一分野となっている。そのうち、学術用語の交渉史に関する研究は、両国の研究者によって成果が蓄積されてきた。自然科学から人文科学まで各分野にわたる学術用語に関する研究成果が著しい。たとえば、沈国威（一九九六、一九九七）における医学用語と沈国威（二〇〇〇a）における植物用語、荒川清秀（一九九七）における地理用語、朱京偉（二〇〇三）における植物用語と哲学用語などの一連の論述が挙げられる。これらは漢訳洋書を研究資料とするものが多い。つまり、日中語彙交流の研究から見ると、漢訳洋書は近代語彙の成立に役割が大きいと考えられているのである。

これまで、漢訳洋書については語彙交流の視点で優れた研究がなされている。また、漢訳洋書の日本受容という視点からの研究は陳力衛氏の一連の研究（注二）が挙げられるが、まだ数多くの課題が残っている。さらに、漢訳洋書に関する研究は原本のみに注目しているが、その和訳書などの研究はまだ少ない。漢訳洋書は関係する分野が幅広いため、筆者は医学分野の代表である『全体新論』およびその和訳書を対象にその日本での受容について考察する。

『全体新論』はイギリスのロンドン会所属の宣教医ホブソン（Benjamin Hobson、漢名合信または霍浦孫）により漢文で著され（注三）、咸豊元年（一八五一）、中国広州の恵愛医館から出版された。これは近代中国においてはじめての西洋医学を紹介する生理学入門書であった。出版された後、中国知識人や中国在住の欧米人に、さらに中国の医学界、官界にも高く評価された（注四）。

中国で大きな反響があったこの書籍は、嘉永末年（一八五四）頃に伝

わり、安政四年（一八五七）に伏見の医者である越智氏によって翻刻が行われ、多くの知識人に読まれた。明治期に入ると、漢訳洋書は和訳されるようになり、『全体新論』を「訳解」した同名二種の『全体新論訳解』が出版された[注五]。それは、明治六年（一八七三）から明治七年（一八七四）にかけて大阪で出版された高木熊三郎によるものと明治七年（一八七四）に名古屋で出版された石黒厚によるものの二種である。

従来、『全体新論』に関する研究は医学史研究にとどまらず、言語資料として医学用語研究も行われてきた。『訳解』に関して、管見の限り、飛田（一九七三）で高木『訳解』を言及する以外はほとんど取り上げられていない。二種の『訳解』はほぼ同時に出版され、訳述方法に共通点と相違点が存在している。また、両書には振り仮名が豊富に付されているため、明治初期の日本語を考察する際に有益な資料であると言える。二種の『訳解』を通して明治初期の日本語の実態を分析するとともに、『全体新論』をめぐる受容の一端を考察することが本論文の目的である。つまり、本論文は、和訳書をめぐる研究を通して、漢訳洋書の日本受容を検討し、和訳書と近代語との関連性そして和訳書の研究価値を見出そうとするものである。

第二節　論文構成

本論文は「序論」と「結論」を入れて七章からなる。第二章と第三章は『全体新論』と『訳解』二種との関係を書誌学的・文献学的な視点から論じる。第四章と第五章は二種の『訳解』における近代日本語の表記と漢字音を中心に国語学的研究を展開する。第六章は漢訳洋書の日本における受容に重点を置く。各章の内容構成は次のとおりである。

第一章は序論として研究の背景と意義および各章の内容構成について述べる。

第二章は『全体新論』と二種の『訳解』に関する書誌学的情報を述べる。それぞれの著者、構成および『全体新論』と二種の『訳解』の関係、さらに、二種の『訳解』の資料的価値を検討する。

第三章は現存する『全体新論』と二種の『訳解』の諸本を実地調査し、そこに見られる使用形跡をまとめ、漢字、漢語、医学用語を分類し、使用字典類と使用者を分析する。また、現存本の漢字に関する書き入れを二種の『訳解』と比べ、二種の『訳解』の訳述方法を考察する。

第四章は二種の『訳解』における訳述方法の差異による振り仮名の特徴差を中心に分析する。先に、二種の『訳解』をデータベース化する手順と振り仮名の取得方法と統計方法を説明する。

第五章は二種の『訳解』に振り仮名が反映する漢語の漢字音に着目し、同一漢語に異なる漢字音が併存するものを抽出し、漢字音の揺れと両書

に存在する相違を分析する。

第六章は漢訳洋書とは何かについて述べた上で、二種の『訳解』における『全体新論』の受容を中心に漢訳洋書の受容問題の一端を探求する。方法としては、医学用語「～骨」を例としてその受容について分析を試みる。さらに、諸本の調査結果に基づき、日本における『全体新論』の受容過程を検討する。

第七章は本論文をまとめ、本論文の意義と今後の課題を述べる。

【注】

（注一）　借用語についての詳細は飛田（二〇〇二）を参照。

（注二）　陳（一九九五）、陳（二〇〇〇）、陳（二〇〇五）、陳（二〇一三）が挙げられる。

（注三）　『全体新論』の本文冒頭には、「西国医師合信氏著　南海陳修堂同撰」と記し、ホブソンがこの書を訳述する際に、中国人陳修堂の協力を得たことがわかる。

（注四）　『全体新論』への評価についての詳細は吉田（一九九六）を参照。

（注五）　『全体新論』と『訳解』二種に関する出版情報は吉田（一九九六）と八耳「目録」による。

第二章　『全体新論』と『全体新論訳解』二種

第一節　『全体新論』と『全体新論訳解』に関する先行研究

これまでに『全体新論』に関する研究は、医学史においても、語彙史および語彙交流においても研究成果が挙げられるが、日本に伝わった後の和刻本『全体新論』と和訳本の二種の『訳解』についての研究はまだ少ない。以下では『全体新論』と二種の『訳解』に関する研究成果を挙げる。

一　著者ホブソンおよび『全体新論』に関する先行研究

日本における『全体新論』の書誌や医学史上の価値、著者ホブソンについての研究は、吉田（一九八九）、吉田（一九九六）、八耳（一九九九）が挙げられる。

吉田（一九八九）によると、幕末期、キリスト教の流入と発展に危機感を抱いた仏僧が著した『閑邪存誠』が出版されたが、そこでは西洋の科学知識の紹介とキリスト教入信の勧めを兼ねた『全体新論』をはじめとする中国語医学書を批判しているという。また、『全体新論』を中心に論駁するのは当時日本の医学界およびキリスト教の布教に貢献した『全体新論』の歴史的位置を象徴しているとも述べている。

また、吉田（一九九六）は中国キリスト教初期医療伝道史におけるホブソンの著作とその影響をめぐって、ホブソンの生涯やホブソン五書の構成と内容および特色、さらに中国と日本における反響について詳しく述べている。

一九世紀において数多くの漢訳洋書が日本に舶載された。その中で、『全体新論』は西洋医学書の代表として伝わってきた。その後、和刻本と和訳本が刊行され、広く流布した。八耳（一九九九）の「19世紀漢訳洋書及び和刻本所在目録」は漢訳洋書の調査に関して詳しい。この「目録」には一九世紀における漢訳洋書および和刻本の書名、巻数、著訳者名、出版年などの出版情報と所在情報が記載されている。これによって、『全体新論』の諸版元や和刻本と和訳本に関わる情報を詳細に知ることができる。

従来、『全体新論』に関しては、医学史研究だけでなく、これを言語資料として扱う医学用語研究も行われてきた。

沈（二〇〇〇ｂ）は中国における西洋医学用語の発生と中日借用語の視点から、西洋医学の出発点である『泰西人身説概』（一六二三）と『全体新論』の用語を考察している。同書では宣教師らが中国語の医学用語を訳す際に直面した難しさを述べている。また、ホブソンの造語「脳炎、肺炎、肝炎」など、語構成要素「炎」を含む一部のものは日本の医学用語に影響を及ぼしたと指摘している。

舒（二〇〇一）は『全体新論』の語彙を『解体新書』と比較し、語彙伝承の面から考察している。両書の語彙に見られる一致は、多くは在来の漢語、同じ漢字表記に由来するものの、中国早期の洋学書からの影響によるものもあると指摘している。「眼球」「採聴」のような両書に伝承不明のものは、日本側の医学書からの影響である可能性もあると言及している。

松本（二〇〇六、二〇〇七）はホブソンの医学用語の由来や特色を考察する。松本（二〇〇六）は『全体新論』を『医学英華字釈』と比較し、両書で示された中国語による解剖学的語彙は、あまりにも一貫性、統一性を欠いたものとなっていて、中国に西洋学問を浸透させるだけの説得力に欠けるものであると指摘している。

以上のように、『全体新論』をめぐっては、主に近代日中両国の医学史および中国語学の観点からの研究が行われており、また日中借用語の研究にも及んでいる。八耳「目録」の収録による各図書館の所蔵状況からみると、『全体新論』が日本で多大な影響を与えたことが推察できる。これまでの研究は『全体新論』において、医学用語の特徴や日本語との関連性を論じたものである。しかし、『全体新論』の医学用語が日本の医学にどんな影響を与えたのか、日本にどのように受容されたのかについての考察はまだ十分ではない。

二　『全体新論訳解』二種に関する先行研究

『全体新論訳解』に関する研究については飛田（一九七三）が挙げられる。飛田（一九七三）は近代語研究の資料を取り扱い、翻訳資料の一つとして『全体新論訳解』を挙げている。詳しくは次のように述べている。

> 中国に渡った欧米の宣教師が漢訳した医学書「全體新論」の翻訳に「全體新論譯解」（明治七年）があるが、これは
>
> 男骨ハ堅クシテ稍ク長シ（巻一　4ウ）
> ナンコツ　ヲトコノホネ
>
> 男女渾身ノ骨其ノ数タル相埒ク似タリ（同前）
> ナンニョコンシン　スウ　アヒヒトシ　ニ　カラダウチ
>
> のように、難解かと思われる漢語にふりがながあり、右側は読み方、左側は意味（訳語）を示している。

飛田（一九七三）ではいずれの『訳解』を見たものかについての言及がないが、二種の『訳解』と対照すると、左側の振り仮名「カラダウチ」と高木『訳解』にある「カラダチウ」の違いと「堅」「稍」「長」の右側に振り仮名が付されるかいなかの違いを除き、文のみと引用箇所の頁数が高木『訳解』と一致している。飛田（一九七三）が記述したのは高木『訳解』であると考えられる。飛田（一九七三）は高木『訳解』を翻訳資料として扱い、現れた振り仮名の特徴を指摘している。

これまで、二種の『訳解』に関する先行研究は飛田（一九七三）が高木『訳解』を扱う以外、ほとんど管見に入らなかった。つまり、二種の『訳解』を言語学的な資料とする研究はまだ十分になされていないという現状である。飛田（一九七三）では高木『訳解』を翻訳資料として認めているが、漢訳洋書の和訳書として、どのような翻訳資料の特徴を持っているのか、また、もう一つの和訳書である石黒『訳解』と、訳述方法にどんな違いがあるのか、考察する必要があると思われる。

第二節　『全体新論』と『全体新論訳解』

一　『全体新論』の著者ホブソン

ホブソンは一八一六年一月二日、イギリスのウェルフォード（Welford）に生まれた（注一）。一八三〇年代前半、バーミンガム総合病院附設の医学校で医学教育を受け、一八三五年にロンドン大学医科大学に進学し、医学を勉強した。卒業後、ロンドン伝道会に入り宣教医となった。一八三九年七月イギリスを出航し、一二月一八日にマカオに到着し、一八四三年一月まで病院の管理を引き受けていた。アヘン戦争後の一八四三年香港に移り、中国医療伝道会病院の経営にあたった。一八四五年、夫人が病気のため、一時的に帰国したが、一二月二日夫人を失った。イギリスに滞在中、モリソンの娘と結婚し、一八四七年七月に香港に戻った。翌年二月に広州に移住し、恵愛医館を開設し、医療活動を展開した。一八五六年一〇月には広東に排外暴動が起きたため、香港に移った。一八五七年二月に上海に移住し、年末から上海で仁済医館の管理を任された。一八五九年に健康上の理由から帰国、一八七三年ロンドン郊外で死去した。

以上のホブソンの経歴のうち、中国での約二〇年は、大まかに三つの段階に分けられる。一八三九年一二月から一八四八年初にかけては、マカオ・香港時代と言え、主に医学活動を展開した時期であった。一八四八年二月から一八五六年一〇月までは広州時代と言え、この時期には恵愛医館を開設、中国人医師の養成に力を尽くした。一八五七年二月から一八五九年初上海を出るまでの短い時期は上海時代と言え、時間的余裕を得て執筆活動に励んだ。

ホブソンはマカオ・香港時代を経て、中国医学において解剖学の知識が欠落していることを認識し、広州時代に医療活動を展開するとともに、中国人医師の養成を行った。一八四九年に石版印刷機械を購入し、中国語のテキストの作成が始まった（注二）。最初に『天文略論』（一八四九）を作成し、西洋人が運営する学校で教科書として使用された（注三）。その他にもこの広州時代には多くの著書を刊行した。キリスト教関係著作以外に、『全体新論』（一八五一）と『博物新編』（一八五四）のような医学・自然科学関係著作もある。一八五七年に上海に移住後、中国で蓄積

した豊富な治療経験や治療例に基づき、『西医略論』（一八五七）、『婦嬰新説』（一八五八）、『内科新説』（一八五八）をまとめ、上海仁済医館で出版した。ホブソンの著書の『全体新論』『博物新編』『婦嬰新説』『西医略論』『内科新説』の五書は「ホブソン五書」あるいは「西医五種」と総称されている（注四）。『博物新編』は医学書ではないが、医学基礎をなす自然科学の博物書であり、医学にかかわっているため広義の医学書として認められる。さらに、一八五八年にホブソンは自著で用いていた術語を整理して、『医学英華字釈』という医学用語集も出版した。

二　『全体新論』に対する中日両国での反響

ホブソンは西洋の解剖学・解剖生理学に関する著作から多数の解剖図を引用し、中国語の教師である陳修堂の協力を得て『全体新論』を完成した。初版は一八五一年に恵愛医館より刊行され、同年別の版が上海の墨海書館より再版された。その後、数回刊行された。両広総督葉名琛の父である葉志詵が『全体新論』の翻刻も行った。初版後、ホブソンは図を石版から木版に変え、たびたび増刷された（注五）。『全体新論』は近代中国においてはじめて本格的に西洋解剖学を紹介する役割があり、中国において広く使われた。

一方、日本に伝わった後、和刻本『全体新論』は明治期に開設された医学校に教科書として使われるようになった。北海道の使用状況を例とすると、明治六年（一八七三）二月の「札幌病院蔵書目録」に開拓使医学校（明治五年に開設）で使用されたホブソンの医学五書が挙げられる。現在、『婦嬰新説』を除き、その他の四書は現存している（注六）。また、明治五年（一八七二）函館病院の外科医長を命ぜられたエルドリッジは講義の余課としてホブソン五書を教え、「月曜辰夜合信氏五部書論議乃六時至十二時」という記録がある（注七）。

前述のように、『全体新論』は一八五一年に出版後、嘉永末年（一八五四）ごろに日本に伝わって、安政四年（一八五七）に翻刻された。『全体新論』を除き、ホブソン五書のうちの四書は次のように出版された。

『博物新編』（一八五四）→（日本に伝わったのは一八五五年以後か未詳）　開成所出版、老皂館万屋兵四郎販売一八六〇年頃
『西医略論』（一八五七）→桃樹園三宅艮斎氏蔵版・一八五八年出版
『婦嬰新説』（一八五八）→天香堂蔵版・一八五九年出版
『内科新説』（一八五八）→桃樹園三宅艮斎氏蔵版・一八五八年出版

『全体新論』は中国での出版から日本での出版まで六年間かかったが、他の三種の医学書は『全体新論』の翻刻出版後の二年間で、中国の原著出版の同年、あるいは翌年にすばやく翻刻されたことがわかった。これ

は『全体新論』の原著が愛読され、西学医学を求める渇望に応じたためであり、『全体新論』以外の医学書も歓迎された。これは、『全体新論』の影響が反映されたものである。一方、西洋科学知識を概説する『博物新編』は『全体新論』とほぼ同時に日本に伝わったが、その翻刻出版は医学書の三書より遅かった。これは、当時の日本人が医学書への期待が大きく、普及を積極的に進めたということであろう。

『全体新論』が愛読された理由の一つは、幕末の日本は開国を迫られ、日本人が世界を知り西洋文化を学ぶことを熱望する環境で、オランダ医学から徐々に英米医学に目を向ける時期であったからである。もう一つは、『全体新論』は漢文であり、当時の漢文の教養を有する日本知識人にとっては読みやすかったからである。

ホブソン五書は最初に知識人の間に読まれたが、広く普及するにつれて、和訳本も必要となり、和訳本の刊行も行われた。

三　『全体新論』の和刻本と和訳本

『全体新論』の和刻本と和訳本について、吉田（一九九六）は次のようなものを挙げている。

『全体新論』和二冊　安政四年（一八五七）二書堂発兌（越智蔵版）
和三冊（異版）
『全体新論訳解』和三冊　明治七年（一八七四）同九年（一八七六）
石黒厚訳　東京静観堂
『全体新論訳解』和四冊　明治七年（一八七四）高木熊三郎訳　大阪
文栄堂
『通俗全体新論』和一冊　明治一一年（一八七八）松井惟利訳

右の『全体新論』は「和三冊（異版）」と挙げられる。管見の限りでは、乾坤二巻、図一巻三冊が存在するので、これが吉田（一九九六）の言う「和三冊（異版）」であろうか。八耳「目録」に『全体新論』の翻刻版の版元が「越智蔵版」と「二書堂発兌」との二種類が挙げられている。二種の区別は見返しの左行の文字によると説明し、またどちらかに属するか詳細不明なものも存在していると述べている。どの版元でも、本文の版は同じである。

石黒『訳解』について、吉田（一九九六）では明治七年（一八七四）同九年（一八七六）と述べているが、八耳「目録」には記載されていないものである。明治九年のものはまだ見つからず、さらに調査する必要がある。また、八耳「目録」に記載される『全体新論』を数えると、中国（恵愛医館・墨海書館ほか）刊『全体新論』は一〇点あり、和刻本は約八〇点に達している(注八)。高木『訳解』は全部で一〇点あり、石黒『訳解』は一四点存在していることが分かった。しかし、北海道大学に所蔵

される『全体新論』と『全体新論訳解』が記載されていないため、改めて各図書館と研究機関の所蔵情報を網羅的に調査する必要がある。

和訳本に関して、二種の『訳解』以外に、明治一一年（一八七八）に東京で刊行された松井惟利抄訳『通俗全体新論』が挙げられる。この書は『全体新論』の本文の前半を抄訳し、養生の進めを書き加えたものである。『訳解』と性格が異なり、完全に和訳本とは言えない。そこで、本論文では『通俗全体新論』を考察の対象外とする。

第三節　研究対象資料

北大附属図書館に所蔵される越智蔵版『全体新論』は三点六冊あり、札幌農学校文庫貴重資料である。ほかに、北大附属図書館に石黒『訳解』が一点あり、医学部図書室に越智蔵版『全体新論』一点と二書堂発兌『全体新論』二点と高木『訳解』一点（二冊のみ）がある。札幌農学校文庫の越智蔵版および医学部図書館にある越智蔵版と二書堂発兌のものはすべて黄色表紙であり、本文の版は同じである。見返しに「越智蔵版」と「二書堂発兌」の違いがある。どちらも二二丁の挿絵があり、一一箇所に分布している。

これらの中から北大札幌農学校文庫本『全体新論』を本論文の研究対象資料として用いる。また、二種の『訳解』に関して、石黒『訳解』は北大附属図書館に所蔵されるものを用いる。高木『訳解』は北大にあるものが巻之二と巻之四の二冊しかないため、国立国会図書館に所蔵される高木『訳解』を用いる。以下に、各書の書誌情報と構成を述べる。

一　和刻本『全体新論』

越智蔵版、乾坤二冊、挿図、黄色表紙、出版：安政四年、出版先：京都勝村治右衛門他、24.9×17.6cm

序／全体新論例言／全体新論目録（注九）

正文

乾

第一 身体略論／第二 全身骨体論／第三 面骨論／第四 脊骨脇骨等論／第五 手骨論／第六 尻骨骨盤及足骨論／第七 肌肉功用論／第八 脳為全体之主論／第九 眼官部位論／第十 眼官妙用論／第十一 耳官妙用論

坤

第十二 手鼻口官論／第十三 臓腑功用論／第十四 胃経／第十五 小腸経／第十六 大腸経／第十七 肝経／第十八 胆論／第十九 甜肉経／第二十 脾経／第二十一 心経／第二十二 血脈管廻血管論／第二十三 血脈運行論／第二十四 血論／第二十五 肺経／第二十六 肺経呼吸論／第二十七 人身真火論／第二十八 内腎経／第二十九 膀胱論／第三十

溺論／第三十一全体脂液論／第三十二外腎経／第三十三陽精論／第三十四陰経／第三十五胎論／第三十六胎盤論／第三十七乳論／第三十八月水論／第三十九霊魂妙用論

この札幌農学校文庫本『全体新論』は、正文の一ページ目に「開拓使図書記」と「札幌農学校図書之印」の蔵書印がある。二つの蔵書印から見ると、この『全体新論』は明治二年（一八六九）年から明治一五年（一八八二）年までの開拓使期に購入され、開拓使廃止後、札幌農学校へ移管されたと思われる。

これに対して、医学部図書館に所蔵されている二書堂発兌二点のうち、一点の『全体新論』には蔵書印は押されず、見返しの右下に墨で「濱田要春」と書いてある。これは人名であれば、個人の所蔵であったと推測される。質的に言えば、本の刷りが悪い。また、北大医学部にあるもう一点の二書堂発兌と一点の越智蔵版は蔵書印と書き入れが一切ない。これらの蔵本を本論文の参考資料として使う。

二　『全体新論訳解』二種の内容構成

前述のように、石黒『訳解』は北海道大学図書館蔵本、高木『訳解』は国立国会図書館蔵本を対象資料として使用する。二種の『訳解』とも、内容構成は『全体新論』と一致しているが、巻数が異なるため、各巻に収録される節に相違がある。

北大本石黒『訳解』　縦 22.0cm×横 15.4cm

巻之一「第一身体略論～第八脳為全体之主論」全八節
巻之二「第九眼官部位論～第二十脾経」全一二節
巻之三「第二十一心経～第三十九霊魂妙用論」全一九節

国会本高木『訳解』　縦 17.9cm×横 12.2cm

巻一「身体略論第一～肌肉功用論第七」全七節
巻二「脳為全体之主論第八～耳官妙用論第十一」全四節
巻三「手鼻口官論第十二～肺経第二十五」全一四節
巻四「肺経呼吸論第二十六～霊魂妙用論第三十九」全一四節

北大本石黒『訳解』には蔵書印も書き入れも存在していない。国会本高木『訳解』は表紙に「大日本教育会書籍館」のシールと「東京府書籍館」の蔵書印がある。

第四節　『全体新論訳解』二種の著者

一　石黒厚

石黒厚について各種の著者名典拠録を調べたが、有益な情報が見つか

らず、国立国会図書館近代デジタルライブラリーを検索したところ、石黒『訳解』以外に石黒厚の『輿地新編』が表示された。『輿地新編』の正文に「尾張　石黒厚」と記載されている。これは石黒『訳解』のものと一致している。『輿地新編』は明治七年（一八七四）に出版され、国々の地理を紹介する本である。これは漢字平仮名交じり文であり、「文、明、開、化」の四巻に分けられている。すべての漢字地名に振り仮名が付されている抄訳である。

二　高木熊三郎

高木熊三郎に関して国立国会図書館近代デジタルライブラリーを検索すると、書籍が一一点現れる。『修身要言』（一八七九）を含む四点の著書と『古文孝経』など漢籍の標記注解の六点がある。各書籍に記載されている書籍名、出版年、著者情報、出版先などの情報をまとめてみると、高木に関わる情報が知られる（**表一**）。

また、『日本教育史資料』（巻二三）には明治五年（一八七二）の調査により、高木熊三郎が私塾を経営したという次の情報が記載されている。

名称	学科	旧管轄	所在地	開業	廃業	身分
歳寒書院	漢学	幕府領	江戸堀北通一丁目	嘉永元年	明治元年	平民

以上の情報は、高木熊三郎の生没年を示していない。高木は大阪府平民であり、別称高木叔叔敭である。嘉永元年（一八四八）から明治元年（一八六八）にかけて、大坂で歳寒書院を開いた。その後、明治七年（一八七四）から明治一七年（一八八四）にかけて、著書と漢籍の標記注解を行った。

石黒厚と高木熊三郎に関する調査を通して、二人は『訳解』を作成する立場が異なることがわかった。高木は漢学に関する典籍に訓点や標柱などを施したことと漢学を教える私塾を経営したこと、二つの事実から見ると、漢学に非常に関心を持った学者である。一方、石黒は世界地理や西洋医学の西洋知識に関心を持って、当時の科学知識を取り入れることを目指したのだろう。二人は関心の重点や読者層の想定が異なると思われる。

表一　高木熊三郎の著作

書籍	年代	著者名情報	出版先	身分	住所
全体新論訳解	明治七年	大坂高木熊三郎	文栄堂（大坂）		
全体新論訳解	明治七年	浪華高木敬叔敵	浪華書肆、文栄堂・寶文軒梓		
勧善新編	明治八年	浪華高木熊三郎著（正文） 浪花高木熊三郎（扉）	群玉堂	大阪府平民	第三大区一小区江戸堀北通一丁目八番地
重鐫文家必用附録	明治九年	浪華　高木熊三良 高木熊三郎（扉）	岡田茂兵衛	大阪府平民	第四大区五小区宗是町二番地
新撰幼学詩韻	明治一〇年	浪華高木熊三郎編輯	小川宝玉堂	大阪府平民	第四大区五小区宗是町二番地
新撰詩語粋金	明治一一年	高木熊三郎編輯	小川宝玉堂	大阪府平民	第四大区五小区宗是町二番地
修身要言	明治一二年	浪華　高木熊三郎著	岡田茂兵衛	大坂府平民	北区宗是町二番地
随園文粋　袁枚　著［他］	明治一四年	高木熊三郎訓点	浪華書房群玉堂梓	大阪府平民	西区江戸堀上通二丁目廿二番地
三字経　王伯厚著［他］	明治一六年	日本　高木熊三郎点	大阪書林岡田群玉堂	大阪府平民	大阪西区江戸堀北通二丁目二十二番地
古文孝経標註　孔安国伝［他］	明治一六年	日本　高木熊三郎標註	浪華書林温故書屋	大阪府平民	西区江戸堀北通二丁目三二番地
増補元明史略　標記註解	明治一七年	浪華　高木熊三郎註解	五車楼梓		
標註国語定本　昭解［他］	明治一七年	浪華　高木熊三郎標註 浪華　高木敬叔敵（例言）	浪華温故書屋		大坂府西区北江戸堀貳丁目三十二番地

第五節　『全体新論訳解』二種と和刻本『全体新論』の関係

和刻本『全体新論』の訓点を見ると、句読点と返点を全体にわたって付している。片仮名の附訓は序に多く、本文には少ない。二種の『訳解』は漢字片仮名交じり文で記されたものである。序から正文にかけて振り仮名が付される点では共通している。『訳解』二種と和刻本『全体新論』の関係について、和刻本『全体新論』と二種の『訳解』の序と本文の一部を比較してみる。次の**例一**～**例三**を見よう。

例一

凡ソ天下之物。莫シ不ル有ラ理。惟理有リ未タ窮。即知有リ不ル盡サ。若シ能ク窮レ理有レ據トコロ。則不レ論ニ二何人言ヲ之ヲ一。皆ナ當シ信ス之ヲ。

（和刻本『全体新論』序）

凡ソ天下ノ物理アラザルナシ。惟理イマダ窮メザルアリ。即チ知盡サザルアリ。若シ能ク理ヲ窮メ據ドコロアレバ。則何人コレヲ言フヲ論ゼズ。當ニ之ヲ信ズベシ。

（北大本石黒『訳解』序）

凡ソ天下ノ物ハ理アラザルモノナシ惟理ニ於テ未タ窮メサルアレバ即チ知ルコト未タ盡サヾルアリ若シ能ク理ヲ窮ムル據リドコロ有レバ則チ何人ノ之ヲ言フヲ論セスシテ皆ナ當ニ之ヲ信ズベシ。

（国会本高木『訳解』序）

例二

若久・病ハ則肥・網消・減、筋・骨現・露、乃僅存二皮・肉一。

（和刻本『全体新論』乾　一オ）

若シ病久ケレバ則肥網消減シ。筋骨現露シテ乃僅ニ皮肉ヲ存スルノミ。

（北大本石黒『訳解』巻之一　一ウ）

若シ病氣ニテ、久シク療治相合ヒ難ケレハ肥網漸ク消滅シテ、筋骨皆ナ現露シ、皮肉僅ニ存スルノミ。

（国会本高木『訳解』巻一　一ウ）

例三

婦人臨レ蓐時、必反・展於後一以寛二産・門一。

（和刻本『全体新論』乾　十オ）

婦人蓐ニ臨ムノ時。必ス後ニ反展シテ。以テ産門ヲ寛クス。

（北大本石黒『訳解』巻之一　一五ウ）

婦人ノ産致シ蓐ニ臨ムトキ、必ス後ニ反展テ以テ産門ヲ寛クス。

（国会本高木『訳解』巻一　二三オ）

例一～**例三**を見ると、石黒『訳解』は、和刻本『全体新論』の訓点に基づいた訓読文そのものである。

一方、高木『訳解』は原文の書き下しにとどまらず、『全体新論』の原文の内容を展開した漢文訓読調の文体になっている。**例一**では原文に該当の漢文がないものの、「療治相合ヒ難ケレハ」と「漸ク」を書き加えており、**例三**では「産致シ」を書き加え、「病」を「病気」にするなどの変更を行っており、これらの変更を通して訓読文を和らげて理解しやすくしている。

第六節　『全体新論訳解』二種の言語学的資料価値

一　表記に関する研究価値

（一）　振り仮名について

前述の例のように振り仮名が付されるのは二種の『訳解』の共通点である。その振り仮名の付け方は多様であるが、両者に共通する特徴として左右両側振り仮名（注一〇）があることが指摘できる。**例二**「現露シ」の左右両側振り仮名について、石黒『訳解』は右に「ケンロ」、左に「アラハレ」であり、高木『訳解』は右に「ゲンロ」、左に「アラハレ」を付す。この左右両側振り仮名は右側が音読み、左側が訓読みを原則とするが、例外もある。また、高木『訳解』の巻一の六丁以降は左右両側振り仮名がほとんど消え、右側振り仮名のみとなり、音読みも訓読みもある。

ほかに、同一漢語に異なる振り仮名が付される例が多い。例えば、「血脈管」に対して、石黒『訳解』は「ケツミヤククワン」の音読みであるが、高木『訳解』は「チミヤクノクタ」と湯桶読み（チミヤク）に訓読み（クタ）の形となり、音読みと訓読みが混じっている。

前節に示すように、石黒『訳解』は漢文訓読文であるが、高木『訳解』は漢文訓読調の文章である。二種の『訳解』は訳述法に相違が見られる。これは振り仮名の異同とどんな関係があるか、本論文の第四章で詳しく論じる。

（二）　歴史的仮名遣い

二種の『訳解』は全体的に歴史的仮名遣いで書かれている。しかし、仮名遣いの使用に混乱がある。次に「歴史的仮名遣い→歴史的仮名遣いと一致しないもの」のようにいくつかの例を見よう。仮名遣いの多様性を示すため、※で歴史的仮名遣いに準ずる例を表し、△で現代的仮名遣いを表す。なお、「類　ル𠀋」、「水泡　ス𠀋ハフ」、「垂下　ス𠀋カ」のようにウ段の下に「イ」が続く場合、明治以降は「𠀋」を用いるのが一般

であるため、このような用例を除く。（括弧は振り仮名を表す。）

和語

（1）石黒『訳解』

ホ→フ　濫滞（トドカフリ）一例

（2）高木『訳解』

①　オ→ヲ　陥入リ（ヲチイ）二例／重（ヲモク）二例

②　ヒ→イ　互ニ（タガイ）一例

※遞ヒニ（タガ）一例／互ニ（タガヒ）一例

③　ホ→ウ　濫滞（トドコウリ）一例／停滞リ（トドコウ）一例

透リ（トウ）五例／透ル（トウ）三例／透レ（トウ）一例

④　ホ→ヲ　潤沢ス（ウルヲ）二例／恩沢（ウルヲヒ）一例／濕ヒ（ウルヲ）三例

※濡ヒ（ウルホ）二例／潤ホス（ウル）五例／潤ス（ウルホ）二例／膩潤ホス（ウル）

△湿潤（ウルオヒ）一例／濡潤（ウルオヒ）一例／濡潤フ（ウルオ）一例／湿ヒ（ウルオ）一例／沾ス（ウルオ）一例／潤フ（ウルオ）一例

透リ（トヲ）一例

※透リ（トホ）八例

⑤　ヲ→オ　居ル（オ）五例／居（オル）一例

※　居リ（ヲ）一例／居ル（ヲ）六例

字音語

（1）石黒『訳解』

①　ウ→フ　収放（シフハウ）／収聚（シフシュウ）／収束（シフソク）／収教（シフキヤウ）

※収小（シウセウ）

②　フ→ウ　呼吸（コキウ）／吸嗡（キウキウ）／吸液管（キウエキクワン）／湊畳（ソウテウ）／畳合（テウカフ）／夾畳（ケフテウ）畳積（テウセキ）／摺畳（シフテウ）／畳裏（テウクワ）／凹処（アウシヨ）／浅凹（センアウ）

※吸水（キフスイ）／摂吸（セツキフ）／畳紋（テフモン）

③　ボ→バ　暴笑（バウセウ）

④　ド→ダ　動肉（ダウニク）／動肌（ダウキ）／牽動（ケンダウ）／転動（テンダウ）／縮動（シユクダウ）／動作（タウサ）

⑤　チユウ→チウ　人中（ニンチウ）／中和（チウクワ）

罐中（クワンチウ）／中心（チウシン）／中庸（チウヨウ）

⑥ キュウ→キウ　弓月形（キウゲツケイ）／角弓（カクキウ）

⑦ チヤウ→テウ　顱頂骨（ロテウ）／嶺頂（レイテウ）

⑧ チュウ→チウ　髄柱（ズイチウ）
※髄柱（ズイチュウ）

⑨ ニュウ→ニウ　馬乳（バニウ）

（2）高木『訳解』

① イ→ヰ　枚（マヰ）

② イ→ヒ　開闔（カヒカツ）

③ オ→ヲ　応理（ヲウリ）

④ エフ→ヨウ　前葉（センヨウ）／後葉（コウヨウ）

⑤ エン→エン　連貫円（レンクワンエン）／方円（ハウエン）

⑥ グワイ→グハイ　外体（グハイタイ）／乖離（クハイリ）

⑦ フ→ウ　呼吸（コキウ）／水泡骨（スヰハウ）
※水泡骨（スヰハフ）

⑧ シヨウ→セウ　病症（ヒヨウセウ）

⑨ チヤウ→テウ　顱頂骨（ロテウ）
△顱頂骨（ロチヨウ）

⑩ チュウ→チウ　中土（チウド）

⑪ テフ→チヤウ　蝴蝶（コチヤウ）
△蝴蝶（コテウ）

⑫ ニュウ→ニウ　馬乳（バニウ）

以上の例を見ると、二種の『訳解』には歴史的仮名遣いと一致しないものが多数存在している。和語の仮名遣について、歴史的仮名遣いと一致しない種類は石黒『訳解』には少なく、高木『訳解』には多く見られる。そして、高木『訳解』には「透り」のように、同じ和語に異なる仮名遣いが多く存在している。字音語について、歴史的仮名遣いと一致しない種類が和語より多い。また、特徴として長音の場合は歴史仮名遣いとずれるものが多い。そこで、二種の『訳解』は明治初期における仮名遣いの特徴を分析できる資料であると考えられる。

二　字音に関する研究価値

二種の『訳解』には振り仮名が付されるため、振り仮名を通して明治初期の漢字音の揺れの状態が窺える。二種の『訳解』には同じ漢語であっても、字音が異なることが見られる。その一部の例は次のとおりである。

①成　セイ　漢音　　ケツセイ「結成」（北大本石黒『訳解』）

ジヤウ呉音　ケツジヤウ「結成」（国会本高木『訳解』）

②数対　タイ　漢音　スウタイ「数対」（北大本石黒『訳解』）

ツイ　呉音　スツイ「数対」（国会本高木『訳解』）

③立　リウ　漢音／呉音　チヨクリウ「直立」（北大本石黒『訳解』）

リツ　呉音　チヨクリツ「直立」（国会本高木『訳解』）

④麗　リ　漢音／呉音　フリ「附麗」（北大本石黒『訳解』）

レイ　漢音　フレイ「附麗」（国会本高木『訳解』）

以上の例では一つの漢語が二種の『訳解』に異なる漢字音が対応している。それ以外に現在の漢字音と異なるものは石黒『訳解』に「末処　ハ|ツシヨ　漢音」、「頭骨　ヅ|コツ　呉音」、「図書　ツ|シヨ　呉音」があり、高木『訳解』に「頭骨　トウ|コツ　漢音」、「男女　ナン|ニヨ　呉音」が挙げられる。この中の「生」「頭」「図」「男」「女」の漢字音は呉音から漢音へ、「末」は漢語から呉音へ音の交替である。

以上の例のように、二種の『訳解』には現在と一致しない読み方が多数存在している。本論文の第五章では、同一漢語に異なる漢字音を抽出し、明治初期における漢字音の揺れの状態を考察する。

三　近代語彙に関する研究価値

二種の『訳解』を比べると、翻訳された語彙の違いが存在していることがわかった。たとえば、本章第五節の例に存在する異なる語彙をみよう。

	全体新論	石黒『訳解』	高木『訳解』
①	病	病（ヤマヒ）	病気（ビヨウキ）
②			療治（リヨウヂ）
③	血脈管	血脈管（ケツミヤククワン）	血脈管（チミヤクノクタ）
④	脳包衣	脳ノ包衣（ハウイ）	脳ノ包衣（カハ）

右の例①について石黒『訳解』は『全体新論』と同じ「病」であるが、高木『訳解』は「病気」と翻訳した。ここでは「病」と「病気」は当時どういう意味であったかが問題である。現在の日本において、「病」は堅い文章表現であり、使用頻度が低い。一方、「病気」は日常生活で使われる一般語彙である。②については『全体新論』と石黒『訳解』には見られないが、高木『訳解』で書き添えられたものである。この語は現在あまり使われていないが、その字順と異なる「治療」はよく使われている。また、③について、二種の『訳解』では全部漢字「血脈管」で表されており、石黒『訳解』は音読み一語であるが、高木『訳解』は「チミヤクノクタ」と湯桶読み（チミヤク）に訓読み（クタ）という連語の形である。④は和刻本の『全体新論』には「脳包衣」を合符で繋げ、一語と

認めている。しかし、二種の『訳解』には全部「脳ノ包衣」という連語の形で表され、語の単位認定に差がある。さらに、「包衣」について石黒『訳解』は音読みであるが、高木『訳解』は「包衣」に原文漢語の意味に近い訓読みが付される。

これらの語彙を全部抽出し対照すると、①と②のような当時の語彙の使用実態を知ることができる。また、③と④のように、語彙の翻訳意識について異同も見られる。特に医学用語の翻訳について、それを一語と認めるのか、連語で表されるのか、すなわち、学術用語と認めるかどうか問題が生じる。

第七節　まとめ

『全体新論』は医学史において漢字文化圏に広く知られる漢訳洋書の一つである。医学校のテキストや生理入門書として使われ、日本に影響を与えた。いままで医学資料として研究されてきたが、その受容のさまを示す二種の『訳解』に関してはほとんど研究されていない。

二種の『訳解』は『全体新論』の和訳本としてほぼ同時に出版された。両書は近代日本語の表記、字音、語彙を考察する際に有益な資料である。なぜならば、両書には振り仮名が豊富に付され、振り仮名を通して、明治初期における日本語の実態を考察することが可能となるからである。

【注】

（注一）　ホブソンの経歴について吉田（一九九六）を参照。

（注二）　八耳（二〇〇九）を参照。

（注三）　（注二）に同じ。

（注四）　ホブソンの中国語著作について吉田（一九九六）を参照。

（注五）　『全体新論』の出版と翻刻について八耳（二〇〇九）を参照。

（注六）　開拓使医学校におけるホブソン五書の使用事情について小竹（二〇〇三）を参照。

（注七）　エルドリッジの余課に使われるホブソン五書に関する記録は阿部（一九五一）と小竹（二〇〇三）を参照。

（注八）　八耳「目録」には詳細不明の和刻本について「研医会本は25.5×17.3cmで越智蔵板，二書堂とする。2点所蔵か。」のように記載されている。

（注九）　数字の書き方は原則として、八、九、一〇、一一…のようにするが、『全体新論』と『訳解』二種の節は原文どおりにする。

（注一〇）　本論文では一語に左右両側ともに振り仮名がある場合、その振り仮名を「左右両側振り仮名」とする。また、語の左側にある振り仮名を「左側振り仮名」、右側にある振り仮名を「右側振り仮名」と定義する。

第三章　『全体新論』と『全体新論訳解』二種の現存本調査

第一節　調査目的

第二章では中国書『全体新論』と和刻本『全体新論』と二種の『訳解』について各資料の構成、相互関係、著者などを述べた。その調査の際、次の問題点に気づいた。

（一）　第二章に述べたように、北大附属図書館に所蔵される越智蔵版『全体新論』三点六冊と石黒『訳解』一点があり、医学部図書室に越智蔵版『全体新論』一点と二書堂発兌『全体新論』二点と高木『訳解』一点がある。一九世紀の漢訳洋書および和刻本の所在を示す八耳「目録」の調査には『全体新論』と和訳本が多数収録されているが、北大にある上記の資料については記載されていない。

（二）　北大本石黒『訳解』と国立国会図書館本にある石黒『訳解』を見比べ、両書に左右両側振り仮名の数が異なることに気付いた。

（三）　国会本高木『訳解』にはいくつか直された形跡がある。

これらの問題を解決するためには、北大以外の現存本がどのような状況であるのかについて改めて調査する必要があると思われる。そのため、二〇一三年三月と二〇一三年六月と二〇一三年一〇月に三回の現存本調査を行った。この調査により、八耳「目録」に記載されていない現存本が多数見つかり、また、当時の使用者による使用形跡が複数あることに気付いた。これらの使用形跡を分析すると、使用者がどういった目的でどのように『全体新論』と『訳解』を使ったのか、さらに、使用者の言語実態がどうであるのかを探ることが可能であることがわかってきた。本章では、調査した現存本と使用形跡を中心に、各書の使用形跡をまとめ、反映した使用者の言語実態および使用字典を注目し、当時の使用者の漢訳洋書に対する読解状況を考察したい。

第二節　現存本の所在

八耳「目録」の調査によると、各図書館と研究機関に所蔵されている現存本は次のようになる。／は装丁の相違、（ ）は書誌情報を示す。また、八耳「目録」は図書館と研究機関に関する名称を略称で示しているが、本節では改称したものを含め現在の全称を加えて［ ］で示す。現段階で所蔵先が不明の場合は「未詳」を記す。

中国書『全体新論』　東北大狩野［東北大学附属図書館狩野文庫］、京大［京都大学附属図書館］／宮書古賀［官内庁書陵部古賀文庫］／国会［国立国会図書館］、日比谷実藤［東京都立中央図書館実藤文庫］／葵［静岡県立中央図書館葵文庫］、杏雨［杏雨書屋］／国教研［国立教育政策研究所］、静嘉［静嘉堂文庫］／静嘉（合冊）［静嘉堂文庫］

越智蔵版『全体新論』　東北大狩野［東北大学附属図書館狩野文庫］、東洋藤井［東洋文庫藤井文庫］、慶大富士川［慶応義塾大学信濃町メディアセンター富士川文庫］、慶大医二点［慶応義塾大学医学部のことか］、北野［北野天満宮］、大阪府［大阪府立中之島図書館］、大阪府（一冊）［大阪府立中之島図書館］、岡山大古医書一一点［岡山大学附属図書館古医書］／内閣［国立公文書館内閣文庫］、東京電機大［東京電機大学総合メディアセンター図書館］、早大［早稲田大学図書館］、香川大神原［香川大学附属図書館神原文庫］／黒羽町作新館二点［黒羽藩校作新館］、埼玉小室［埼玉県立文書館小室家文書］、国教研［国立教育政策研究所］、静嘉大槻［静嘉堂大槻本］、東大洪庵［東京大学総合図書館緒方洪庵記念文庫］、早大（三冊）［早稲田大学図書館］、金沢泉丘高［金沢泉丘高等学校］、小浜［小浜市立図書館］、豊橋［豊橋市中央図書館］、刈谷村上［刈谷市中央図書館村上文庫］、神宮［神宮文庫］、京大法医［京都大学法医学教室のことか］、杏雨二点［杏雨書屋］、岡山大古医書（三冊）［岡山大学附属図書館古医書］、九大眼科［九州大学医学図書館眼科教室のことか］、佐賀鍋島［佐賀県立図書館鍋島家文庫］／内閣（二冊、緑色表紙）［国立公文書館内閣文庫］

二書堂発兌『全体新論』　内閣［国立公文書館内閣文庫］、東北大狩野［東北大学附属図書館狩野文庫］、日比谷加賀［東京都立中央図書館加賀］、東大総二点［東京大学総合図書館］、同志社小室沢辺［同志社大学図書館小室・沢辺記念文庫］、愛日［愛日文庫］、北野［北野天満宮］、杏雨［杏雨書屋］、鳳鳴青山［篠山鳳鳴高等学校図書館青山文庫］、金刀比羅［金刀比羅宮図書館］、東書［東書文庫］／東大総二点（明治印）［東京大学総合図書館］、浅野［広島市立中央図書館浅野文庫］

分類不明　神宮／酒田光丘［酒田市図書館光丘文庫］、高鍋町立図書館［高鍋町立図書館］／慶大富士川［慶応義塾大学信濃町メディアセンター富士川文庫］／慶大富士川（一冊）［慶応義塾大学信濃町メディアセンター富士川文庫］／岐阜市［岐阜市立図書館］／神宮（一冊）［神宮文庫］／上野市立図書館三点［上野市立

図書館」、津有造館「津市有造館文庫」、大阪府石崎「大阪府立中之島図書館石崎文庫」／滋賀医大河村「滋賀医科大学附属図書館河村文庫」／滋賀医大守一堂「滋賀医科大学附属図書館守一堂文庫」／京大二点「京都大学附属図書館」／京大富士川「京都大学附属図書館富士川文庫」／大阪女子大「大阪女子大学附属図書館：廃止」／神大医「神戸大学附属図書館医学分館」／岩国徴古館「岩国徴古館」／徳島「徳島県立図書館」／祐徳「祐徳文庫」

詳細不明　研医会（注一）「研医会」

高木『訳解』　慶大医二点「慶応義塾大学信濃町メディアセンター富士川文庫」、慶大医二点「慶応義塾大学医学部のことか」、滋賀医大「滋賀医科大学附属図書館」、杏雨「杏雨書屋」、愛日「愛日文庫」、金刀比羅「金刀比羅宮図書館」、弘前「弘前市立図書館」、鹿沼大欅「鹿沼市立図書館大欅文庫」、東洋藤井「東洋文庫藤井文庫」、香川大神原「香川大学附属図書館神原文庫」

石黒『訳解』　東北大狩野「東北大学附属図書館狩野文庫」、研医会「研医会」、静嘉「静嘉堂文庫」、東大洪庵「東京大学総合図書館緒方洪庵記念文庫」、金大医「金沢大学附属図書館医学図書館」、金沢泉丘高「金沢泉丘高等学校」、神宮「神宮文庫」、京大「京都大学附属図書館」、京大富士川「京都大学附属図書館富士川文庫」、杏雨「杏雨書屋」、愛日「愛日文庫」、金刀比羅「金刀比羅宮図書館」、長崎医「未詳」、滋賀医大守一堂「滋賀医科大学附属図書館守一堂文庫」

八耳「目録」によれば、中国（恵愛医館・墨海書館ほか）刊の『全体新論』は一〇点ある。和刻本『全体新論』は約八〇点に達している（注二）。その内訳は、越智蔵版四二点、二書堂発兌一五点、越智蔵版と二書堂発兌とのどちらかに属する分類不明の現存本二二点、詳細不明二点ある。高木『訳解』は一〇点、石黒『訳解』は一四点ある。

各図書館や研究機関における書籍の整理に伴う目録類の追加やデータベースの作成作業の進捗により、これまで探しにくかった資料を検索することがさらに便利になった。そこで、『全体新論』と二種の『訳解』に関する現存本を新たに調べた。八耳「目録」を含め、日本全国の大学図書館と研究機関の所蔵する図書・雑誌が検索できる国立情報学研究所「CiNii Books」をはじめとして、各大学図書館の蔵書検索と蔵書目録類を使い、さらに『全国漢籍データベース』を代表とするデータベース類を加え、現存本の所蔵調査を再度行った。その結果、現段階で現存本は中国書『全体新論』は一二点、和刻本『全体新論』一〇二点以上（注三）、石黒『訳解』一八点と高木『訳解』一三点の所在が判明できた。現存本

の所蔵は次の通りである。

中国書『全体新論』（一二点）　国立国会図書館、龍谷大学大宮図書館
写字台文庫、同志社大学図書館愛山文庫、国際日本文化研究センター図書館宗田文庫、国際日本文化研究センター図書館（合冊）、東北大学附属図書館狩野文庫、杏雨書屋、静岡県立中央図書館葵文庫、東京都立中央図書館実藤文庫、静嘉堂文庫、静嘉堂文庫（合冊）、官内庁書陵部古賀文庫

越智蔵版『全体新論』（四九点）　北海道大学附属図書館三点、北海道大学医学研究科・医学部図書館、日本大学松戸歯学部図書館、多和文庫（注四）、神戸大学附属図書館医学分館、龍谷大学大宮図書館、京都大学吉田南総合図書館（三冊）、京都大学附属図書館富士川文庫、国際日本文化研究センター図書館、東京外国語大学附属図書館、早稲田大学図書館、早稲田大学図書館（三冊）、研医会図書館、慶応義塾大学図書館二点、慶応義塾大学図書館（三冊）、慶応義塾大学信濃町メディアセンター富士川文庫二点、東京大学総合図書館緒方洪庵記念文庫（三冊の合冊）、東京大学総合図書館南葵文庫、東京大学文学部図書室松村文庫、築波大学附属図書館、広島大学医学部医学資料館、愛媛大学図書館（乾・図の二冊）、滋賀医科大学附属図書館河村文庫、岡山大学附属図書館古医書一一点、岡山大学附属図書館赤沢文庫（三冊）、香川大学附属図書館神原文庫、九州大学医学図書館二点、北野天満宮、杏雨書屋二点、東洋文庫藤井文庫、鳥取大学附属図書館（三冊）、新潟大学附属図書館（三冊）、長崎大学附属図書館医学分館

二書堂発兌『全体新論』（二六点）　北海道大学医学研究科・医学部図書館二点、日本大学松戸歯学部図書館、神戸大学附属図書館医学分館、同志社大学図書館小室・沢辺記念文庫、同志社大学図書館荒木文庫、同志社大学図書館中瀬古文庫、同志社大学神学部研究室図書、名古屋大学附属図書館、名古屋大学附属図書館医学部分館、研医会図書館三点、東京大学総合図書館二点、東京大学総合図書館緒方洪庵記念文庫、東京大学総合図書館鶚軒文庫、東京大学総合図書館南葵文庫、筑波大学附属図書館、九州大学文系合同図書室、新潟大学附属図書館、広島大学医学部医学資料館、成城大学図書館、東京大学駒場図書館一高文庫、杏雨書屋、鳥取大学附属図書館

分類不明（注五）（二七点以上）（注六）　国文学研究資料館図書館、神戸大学附属図書館医学分館、東北大学附属図書館狩野文庫（二点あるか）、北野天満宮、東書文庫（乾存）、大阪府立中之島図書館、大阪府立中之島図書館（一冊）、静岡県立図書館葵文庫（乾・坤各存一、一点か二点か）、神宮文庫三点、慶応義塾大学信濃町メディアセンタ

ー、国立公文書館内閣文庫二点、東京都立中央図書館加藤文庫、刈谷中央図書館（二点あるか）、高鍋町立図書館、岐阜市立図書館（六冊）、酒田市図書館光丘文庫、金刀比羅宮図書館、静嘉堂文庫、岩国徴古館、九州大学医学図書館、東京成徳学園十条台キャンパス図書館、弘前大学附属図書館、徳島県立図書館、京都大学大学院経済学研究科・経済学部図書室（図一冊のみ）

石黒『訳解』（一八点）　北海道大学附属図書館、国文学研究資料館図書館、東京大学総合図書館緒方洪庵記念文庫、関西大学図書館、国立国会図書館、京都大学附属図書館、京都大学附属図書館富士川文庫、同志社大学図書館荒木文庫、名古屋大学附属図書館医学部分館、研医会図書館二点、築波大学附属図書館、東京学芸大学附属図書館、長崎大学附属図書館、東京大学文学部図書室松村文庫、杏雨書屋、国立公文書館内閣文庫、京都大学大学院経済学研究科・経済学部図書室

高木『訳解』（一三点）　北海道大学医学研究科・医学部図書館、新城ふるさと情報館牧野文庫、日本大学松戸歯学部図書館、国立国会図書館、国際日本文化研究センター図書館、東京外国語大学附属図書館、滋賀医科大学附属図書館河村文庫、香川大学附属図書館神原文庫、東洋文庫藤井文庫、杏雨書屋、金刀比羅宮図書館、岩国徴古館、国立公文書館内閣文庫

第三節　現存本の現地調査

北海道大学附属図書館の越智蔵版『全体新論』三点、石黒『訳解』一点および北海道大学医学部本の二書堂発兌『全体新論』二点と越智蔵版『全体新論』一点と高木『訳解』一点の調査を現地において行った。そのほか、大学図書館と研究機関を中心に三回の現存本調査を施した。現段階において、中国書『全体新論』五点、越智蔵版『全体新論』二二点、二書堂発兌『全体新論』一八点、分類不明『全体新論』二点、石黒『訳解』一一点と高木『訳解』六点、計六四点を実際に調べた。結果として、次のように、それぞれの現存本に関する所蔵図書館、書誌、書き入れの有無をまとめることができた。

一　中国書『全体新論』

（1）国立国会図書館（東京館）　一巻、一冊、黄色表紙、上海墨海書館、23.7×15.6cm、印記、書き入れ

（2）龍谷大学大宮図書館写字台文庫　一巻、一冊、黄色表紙、上海墨海書館、25.6×16.1cm、印記、公開画像

（3）同志社大学図書館愛山文庫　一巻挿図、一冊、表紙なし、上海墨海書館、24.8×15.6cm、印記、所蔵者情報、書き入れ

（4）国際日本文化研究センター図書館宗田文庫　一巻挿図、一冊、黄褐色表紙、上海墨海書館、25.6×16.0cm、印記

（5）国際日本文化研究センター図書館　挿図、内科新説ほかと合綴、合綴表紙、上海墨海書館、27.0×17.0cm

二　越智蔵版『全体新論』

（1）北海道大学附属図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、24.9×17.6cm、印記

（2）北海道大学附属図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、24.9×17.6cm、印記

（3）北海道大学附属図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、24.9×17.6cm、印記

（4）北海道大学医学研究科・医学部図書館　乾坤二巻挿図、二冊の合冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、23.3×17.2cm、印記

（5）日本大学松戸歯学部図書館　二巻存乾一巻、挿図、一冊、黄色表紙、27.0×17.6cm

（6）多和文庫、マイクロフィルム（注七）、乾坤二巻、二冊、江戸須原屋茂兵衛等六肆、印記、書き入れ

（7）神戸大学附属図書館医学分館和辻文庫、乾坤二巻図一巻、二冊（乾坤二巻の題簽:乾、図の題簽:坤）、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆（出版先は図の最後に）、25.2×17.3cm

（8）龍谷大学大宮図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.2×18.1cm、印記、所蔵者情報

（9）京都大学吉田南総合図書館　乾坤二巻図一巻、二冊（乾坤の題簽:乾、図の題簽:坤）、青表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆（図の巻に刊記あり）、26.3×18.4cm、印記

（10）京都大学附属図書館富士川文庫　乾坤二巻、一冊、黄色表紙、24.8×17.3cm、印記、所蔵者情報、書き入れ

（11）国際日本文化研究センター図書館宗田文庫　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.2×17.2cm、印記、所蔵者情報

（12）東京外国語大学附属図書館　乾坤二巻図一巻、三冊、緑色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、26.4×18.1cm、印記

（13）早稲田大学図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、24.9×17.2cm、印記、所蔵者情報、公開画像

（14）早稲田大学図書館、乾坤二巻図一巻、三冊、緑色表紙、江戸須

原屋茂兵衛等六肆、26.3×18.1cm、印記、所蔵者情報、書き入れ

（15）研医会図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.2×17.6cm、書き入れ（朱点、青点）

（16）慶応義塾大学図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等一一肆、26.1×18.1cm、印記、書き入れ（朱点）

（17）慶応義塾大学図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.2×17.8cm、印記、書き入れ、公開画像

（18）慶応義塾大学図書館　乾坤二巻図一巻、三冊、緑色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、26.0×17.8cm、印記、書き入れ、公開画像

（19）慶応義塾大学信濃町メディアセンター富士川文庫　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、東京須原屋茂兵衛等七肆、25.2×17.5cm、印記、書き入れ、公開画像

（20）慶応義塾大学信濃町メディアセンター富士川文庫　乾坤二巻挿図 二冊 黄色表紙 江戸須原屋茂兵衛等六肆 乾 25.2×17.7cm、坤 25.2×17.5cm、印記、書き入れ

（21）東京大学総合図書館緒方洪庵記念文庫　乾坤二巻図一巻、三冊の合冊、緑色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.9×17.5cm、印記、書き入れ（朱点）

（22）東京大学総合図書館南葵文庫　乾坤二巻挿図、二冊、黄表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.4×17.2cm、印記、書き入れ（朱点）

三　二書堂発兌『全体新論』

（1）北海道大学医学研究科・医学部図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、24.9×16.6cm、所蔵者情報

（2）北海道大学医学研究科・医学部図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.2×17.3cm

（3）日本大学松戸歯学部図書館　乾坤二巻、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.2×17.2cm、印記、所蔵者情報、書き入れ

（4）神戸大学附属図書館医学分館荘田文庫　乾存一巻挿図、一冊、黄色表紙、25.3×17.3cm、印記、所蔵者情報、書き入れ

（5）同志社大学図書館小室・沢辺記念文庫　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、東京須原屋茂兵衛等六肆、24.9×17.6cm、印記、所蔵者情報、書き入れ（印刷の不鮮明箇所を朱筆で直すもの）

（6）同志社大学図書館荒木文庫　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.2×17.3cm、印記、所蔵者情報、書き入れ（紙片類）

（7）同志社大学図書館中瀬古文庫　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.1×17.5cm、印記、所蔵者情報、書き入れ

（8）同志社大学神学部研究室図書　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.2×17.7cm、所蔵者情報、書き入れ

（9）名古屋大学附属図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、24.8×17.3cm、印記、所蔵者情報、書き入れ

（10）名古屋大学附属図書館医学部分館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、東京須原屋茂兵衛等六肆、25.0×17.7cm、印記

（11）研医会図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.5×17.3cm、印記

（12）研医会図書館　乾坤二巻挿図・上二冊 黄色表紙 25.2×17.6cm、図一巻、一冊、緑色表紙、25.2×17.3cm、江戸須原屋茂兵衛等六肆、印記

（13）研医会図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、乾 25.4×17.2cm、坤 25.5×17.3cm、印記

（14）東京大学総合図書館　乾坤二巻挿図、二冊の合冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、24.9×17.3cm、印記、所蔵者情報

（15）東京大学総合図書館　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、東京須原屋茂兵衛等六肆、25.5×17.3cm、印記

（16）東京大学図書館緒方洪庵記念文庫　乾坤二巻挿図、二冊の合冊、黄色表紙、東京須原屋茂兵衛等六肆、24.9×17.5cm、印記

（17）東京大学総合図書館鶚軒文庫　乾坤二巻挿図、二冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.4×17.2cm、印記、所蔵者情報、書き入れ（朱点）

（18）東京大学総合図書館南葵文庫　乾坤二巻挿図、二冊の合冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.5×17.3cm、印記、所蔵者情報

四　分類不明『全体新論』

（1）国文学研究資料館図書館　二巻存坤一巻、一冊、黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.6×17.3cm、所蔵者情報、書き入れ、公開画像

（2）神戸大学附属図書館医学分館　坤存一巻挿図 一冊 黄色表紙、江戸須原屋茂兵衛等六肆、25.2×17.5cm、印記

五　石黒『全体新論訳解』

（1）北海道大学附属図書館　天地人三巻、一冊、黄色表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、22.0×15.4cm

（2）国文学研究資料館図書館　天地人三巻、三冊、青表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、22.4×15.5cm、印記、所蔵者情報

（3）東京大学総合図書館緒方洪庵記念文庫　天地人三巻、三冊の合冊、黄色表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、22.4×15.5cm、印記、書き入れ

（4）関西大学図書館　天地人三巻、三冊、黄色表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、21.7×14.8cm

（5）国立国会図書館（関西館）天地人三巻、三冊、黄色表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、19.9×14.1cm、印記

（6）京都大学附属図書館　天地人三巻、三冊、黄色表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、21.7×15.0cm、印記

（7）京都大学附属図書館富士川文庫　天地人三巻 三冊 黄色表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、21.9×15.4cm、印記、所蔵者情報

（8）同志社大学図書館荒木文庫　天地人三巻、三冊、青表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、22.4×15.5cm、印記、所蔵者情報

（9）名古屋大学附属図書館医学部分館　天地人三巻、三冊、青表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、22.3×15.4cm、印記、所蔵者情報、書き入れ

（10）研医会図書館　天地人三巻、三冊、黄色表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、22.1×15.1cm、印記

（11）研医会図書館　天地人三巻、三冊、黄色表紙、東京北畠茂兵衛等一四肆、22.5×15.4cm、印記

六　高木『全体新論訳解』

（1）北海道大学医学研究科・医学部図書館　四巻存二巻（巻之二と巻之四）、二冊、大坂文栄堂等五肆、17.4×11.9cm

（2）新城ふるさと情報館牧野文庫　マイクロフィルム（注八）、四巻存一巻、一冊、大坂文栄堂等四肆、印記、所蔵者情報

（3）日本大学松戸歯学部図書館　四巻、四冊、黄色表紙、大坂文栄堂等四肆、17.9×12.2cm、印記

（4）国立国会図書館（関西館）　四巻、四冊、黄色表紙、大坂文栄堂、17.9×12.2cm、印記、書き入れ

（5）国際日本文化研究センター図書館　乾：巻一－二、坤巻三－四、二冊、改装の表紙、大坂文栄堂等四肆、17.5×11.8cm、印記

（6）東京外国語大学附属図書館　四巻、四冊、黄色表紙、大坂文栄堂宝文軒、18.0×12.1cm、印記

第四節　現存本の使用形跡

現存本を調査したところ、中国書『全体新論』二点、越智蔵版『全体新論』一一点、二書堂発兌『全体新論』八点、分類不明一点、石黒『訳解』二点と高木『訳解』一点に書き入れがあることを確認した。

書き入れは直接に原本に書かれるケースが一番多い。紙類に書かれるものも存在する。書き入れはほとんど黒字であるが、赤色のものも少数ある。また、原文に付される訓点を朱筆で直すものも含まれている。漢文のほかに、和訓や図もあり、書き入れの内容は多種多様である。

本章の第一節では、気付いた問題点の（三）について国会本高木『訳解』にいくつかの直された形跡があると述べたが、この現存本を調査したところ、書き入れがわずかあることがわかった。本節では国会本高木『訳解』のような書き入れの少ない現存本と朱点のみの現存本を考察対象から除外する。これは、書き入れが少ない場合、現存本の使用状況を十分に分析できないと考えるからである。

まず、慶応義塾大学（請求記号：42@22@1 - 3）（以下の表に慶応本42@22@1-3 と略す）、慶応義塾大学本（請求記号：76@20@1 - 2）（以下の表に慶応本 76@20@1-2 と略す）、慶応義塾大学富士川文庫本（以下の表に慶応富士川文庫本と略す）、早稲田大学本、同志社大学神学部本に見られる漢字、漢語、医学関係の書き入れをまとめる（**表一**）。また、日本大学松戸歯学部本と同志社大学中瀬古文庫本の和訓を主とする漢字注釈を考察する。さらに、同志社大学荒木文庫本と同志社大学神学部本と前述の早稲田大学本と慶応義塾大学富士川文庫本における医学用語の書き入れを考察する。最後に、多和文庫本と早稲田大学本と慶応義塾大学富士川文庫本の書き入れを高木『訳解』と比べ、高木『訳解』との関係を明らかにする。

表一　現存本に見られる書き入れ

	漢字注釈	漢語注釈	医学関係	その他	合計
慶応本 42@22@1-3	256	7	0	3	266
慶応本 76@20@1-2	147	2	1	0	150
慶応富士川文庫本	238	97	162	95	592
早稲田大学本	101	7	17	19	144
同志社大学神学部本	106	38	228	2	374

一　漢字に関する書き入れ

まず、漢字に対する解釈について漢文を主とする漢字注釈と和訓を主とする漢字注釈の二部分に分け、代表的な現存本にある書き入れの

様相をまとめる。

（一）　漢文を主とする漢字注釈

表二に示すように、各現存本の漢字解釈は、漢文義注や日本語文の義注や字音、字訓、音訓両方など多様である。ここでは、多数である漢文注釈を対象に考察する。この類に慶応義塾大学二点と慶応義塾大学富士川文庫一点と早稲田大学一点が挙げられる。次はそれぞれの特徴と使用字典類を考察する。**表二**に示すように、同志社大学神学部本は漢字に対する漢文解釈が九箇所しかないため、この現存本の漢字注釈に関する説明を省略する。

（1）慶応義塾大学本　越智蔵版『全体新論』請求記号：76@20@1 - 2（二〇一三年一〇月調査）

書き入れは一五〇箇所ある。漢字に対する解釈が一番多く、一四七箇所ある。漢語に対する解釈は二箇所あるが、医学用語が一箇所しかない。

漢字に対する注釈は漢字、反切、類音、意味注、類字などからなり、漢文注釈を主とするものである。次の例①のように示す。使用字典は『康熙字典』と推測できる。その根拠は次頁の例②に現れた「字典」の記載から知られる。

表二　漢字に対する書き入れ

	漢文注釈（字典）	漢文注釈（非字典）	日本語注釈	音	訓	音訓両方	その他	合計
慶応 42@22@1-3	232	3	0	6	5	10	0	256
慶応 76@20@1-2	141	6	0	0	0	0	0	147
慶応富士川文庫本	177	3	39	0	19	0	0	238
早稲田大学本	71	17	1	3	9	0	0	101
同志社大学神学部本	8	1	15	15	51	12	4	106

① 髻古詣切音計（說文）總髮也从髟吉声古通用結（玉篇）同髺

② 案奶嬭訛字典嬭古文囡（廣韻）奴蟹切音疠乳也或作妳

「髻」と「嬭」について、『標註訂正康熙字典』には次のように記載されている。

髻『唐韻』古詣切『集韻』『韻會』『正韻』吉詣切。丛音計。『說文』總髮也。从髟。吉聲。古通用結。此字後人所加。『史記陸賈傳』尉佗魋結箕踞。『漢書註』結讀曰髻。『玉篇』同髺。『集韻』亦作紒。（後略）

嬭〔古文〕『廣韻』奴蟹切『集韻』女蟹切，丛音疠。乳也。或作妳。又『風土歲時記』唐人呼晝睡爲黃嬭。（後略）

例①は『康熙字典』から必要と考えられる内容を引用する。例②では、原文に「奶」の字が『康熙字典』に掲出されていないため、使用者は「案奶嬭訛字」と判断を下し、『康熙字典』から「嬭」の字に関する解釈を引用する。この類に「塑同埽」、「罩同罩」、「坁疑拗訛」、「案僱雇字訛」もある。また、次の例③については、『康熙字典』に「欵俗款字」とのみあるが、使用者は「款」字の釈文から引用し、「欵」の解釈として挙げる。すなわち、『全体新論』の間違った字を判定する上で、正確な漢字を『康熙字典』から引いていることになる。

③ 欵俗款字（集韻）苦緩切音窽〇科也今章疏言列款謂科條列之

書き入れの漢字を『標註訂正康熙字典』と見比べ、この現存本の使用者は一四一字の漢字について『康熙字典』を調べたことがわかった。また、「獲恐護誤乎」「字書無拘字疑拗誤」「難字書無所考疑鞋訛」のような六字に関する書き入れは字典からの内容ではなく、使用者自らの解釈である。

（2）早稲田大学本　越智蔵版『全体新論』請求記号：ヤ 0900728　1-3（二〇一三年一〇月調査）

書き入れは一四四箇所ある。漢字に対する解釈が一番多く、一〇一箇所ある。漢語に対する解釈はわずか七箇所である。ほかは、漢字の傍訓と医学用語を解釈するものである。漢字解釈は例①と例②のように、明確に「字典」と書かれているのは一六箇所である。漢字解釈のうち、全部で七一箇所の書き入れが『康熙字典』によるものである。

① 七大経　案此段五官、惟指耳目口鼻而言也、當攷脳為全體之主

論、字典、身有五官、孟子耳目之官、不思而蔽於物、又心之官則思、與此所言五官別矣、又素霊蘭秘典、有十二官、

② 字典、塑、埏土象物也、今俗捏土肖鬼神象貌、曰揉、

例①、例②の傍線部に相当すると考えられる『標註訂正康熙字典』の記載は次の通りである。

【官】（前略）又身有五官。『孟子』耳目之官，不思而蔽於物。『又』心之官則思，思則得之。（後略）

【塑】 同埏。『宋謝顯道曰』明道如泥，塑人及接人，渾是一團和氣。

例①の書き込みは『標註訂正康熙字典』の記載と一致する。一方、例②「塑」の釈文は『康熙字典』にある「塑」の釈文と異なる。類字の「埏」の記載を調べると、傍線部が例②の釈文と一致した。次は「埏」の記載である。また、例②の「揉」は「埏」の誤写であると思われる。

【埏】『廣韻』桑故切『集韻』『韻會』『正韻』蘇故切，丛音素。埏土象物也。今俗捏土肖鬼神象貌曰埏。通作素。亦作塑。

（3）慶応義塾大学富士川文庫本　越智蔵版『全体新論』（二〇一三年一〇月調査）

この現存本には書き入れが数多く五九二箇所ある。また、書き入れの形式も多種多様である。字注や語の注釈以外に、文の解釈と図もある。内容は字書や医学参考書による漢文の解釈があり、使用者自身の考えによる日本語文の解釈もある。

漢字の解釈は二三八箇所ある。それぞれの書き入れを『標註訂正康熙字典』と『和刻本辞書字典集成』に収録される『字彙』と見比べ、一七七箇所の書き入れは『字彙』や『康熙字典』などの字書を参照したと考えられる。この類の書き入れは次の六パターンに分けられる。

ア 『字彙』と明確に示すもの（五七箇所）

① 軋字彙勢相傾也

イ 『康熙字典』と明確に示すもの（一箇所）

② 撥字典発揚皃増韻転也

ウ 『康熙字典』と比べ、『字彙』からの引用と判断できるもの（六〇箇所）

③ 榫音損刻レ木入レ竅也（「損」は『康熙字典』に「筍」である）

この現存本に書き入れが二六六箇所ある。漢字に対する解釈は二五六箇所ある。そのうち、二三二字の解釈は字典によるものであるが、どちらの字典から引用するのか明確に示していない。

① 全音泉備也具也保也完全也

② 渾水流声又濁也荘子渾然無圭角淮南子渾然而往註渾音大泱泱揮揮之揮行皃

③ 芒木初生而有芒角

『字彙』と比べて、例①のように、『字彙』と一致する漢字は一六六字あり、例②の傍線部のように、解釈の一部のみが『字彙』と一致する漢字は五三字あり、例③のように、完全に一致しない解釈は一三字ある。これは『字彙』を引いた際に、別の字典を参照したのか、それとも、『字彙』と近い系統の字典を引いたのか、まだ判明していない。

以上の（1）～（3）の三種の現存本の書き入れを見ると、共通して『康熙字典』から引用されたことがわかった。（3）では『字彙』も多用されている。また、（4）は『字彙』を用いている可能性が高い。全体的

④ 尻音考説文脽也脊梁尽処是也（「梁」は『康熙字典』に「骨」である）

エ 『字彙』と比べ、『康熙字典』からの引用と判断できるもの（二三箇所）

⑤ 鉸玉篇釘鉸類篇以金飾物器也顔延之赭白馬賦寶鉸星纏註鉸装飾也

オ 『字彙』と『康熙字典』の両方に同じ記載があり、どちらから引用されたのか判断できないもの（二七箇所）

⑥ 湾音弯水曲也

カ 『字彙』と『康熙字典』に記載されていないもの（六箇所）

⑦ 尭字彙補力換切音乱諸物臨死之時迷離没乱之意（『字彙補』からの引用は二箇所）

⑧ 蓰孟子或相倍蓰朱子註曰蓰五倍也（引用不明）

上記のアとウを合わせて見ると、『字彙』からの引用は『康熙字典』より多い。これに基づいて推測すれば、オは『字彙』から多く引用された可能性が高い。

（4）慶応義塾大学本　越智蔵版『全体新論』請求記号：42@22@1

に、当時漢文を読む際には単字字典を主として使っていたことがわかった。

（二）和訓を主とする漢字注釈

（1）日本大学松戸歯学部本　二書堂発兌『全体新論』（二〇一三年三月調査）

現存本には漢字に字音と字訓が付された小紙が二八枚挟まれている。全部で五二個の漢字項目がある。ほかに、国名に関する音訳語一語がある。紙一枚に一つの漢字項目を記載するものは二〇枚ある。一番数多い場合は紙一枚で一三字に達している。

また、漢字の左右に音、下に訓や意味注が付されている。五三字の内、字音があるのは四六字、字訓があるのは四四字である。漢字に字音と字訓の両方が付されているのはこの四四字である。例①のように、左右ともに字音が付されているのは八字であり、意味注が付されているのは一三字である。「扳」「掰」「噙」の三字について字音はあるが、字訓は存在しない。また、「滙」「逞」「踁」「窘」「篘」「拗」の六字は漢字のみで、字音、字訓、意味注が一切付されていない。

五一字の解釈は、例①のような字音と字訓と意味注の三種があるのは九字であり、字音と意味注の両方があるのは三字であり、字音と字訓の組み合わせが一番多く、三四字である。

例①　齝　チ・シ　ニレカム　牛曰―食已テ久後復出シテ嚼ムレ之

上記の注が一切付されていない六字と音訳語一語を除き、四六字の左右字音、それぞれの字訓、意味注を『増続大広益会玉篇大全』（以下『増続玉篇』と略す）と比べてみると、『増続玉篇』と完全に一致する漢字が多い。一致しない部分は濁音の有無か歴史的仮名遣いの違いか例①の意味注に見られるように「後」一字の多いかのようなものである。多少相違があるが、『増続玉篇』の記載に近い。

（2）同志社大学中瀬古文庫本　二書堂発兌『全体新論』（二〇一三年六月調査）

欄外に骨名を挙げる書き込みは二箇所ある。それ以外はすべて漢字に対して、類字、音注、意味注、訓注の組み合わせによる書き込みである。音注は片仮名の漢字音や反切や類音に分けられる。全部で一三二字の漢字項目がある。その音注について、片仮名で漢字音が付されるのは一一一字、反切があるのは一二四字、「遡」と「轂」と「匀」の三字は「音朔」、「音穀」、「音旬」の類音注である。意味注があるのは九〇字、訓が付されているのは九六字である。片仮名の漢字音、反切、意味注、訓注の四

つを揃えるのは「欸」「榱」など四六字である。次いで、漢字音、反切、訓注の三種あるのは二七字と漢字音、反切、意味注の三種あるのは一六字である。

一三二字の漢字項目を『増続玉篇』と見比べると、一致するものが多く、『増続玉篇』からの引用であると推測する。一致しない箇所は誤写や歴史仮名遣いの違いによるものであるが、六箇所の反切が『増続玉篇』と異なり、ほかの字書を参照している可能性があると考えられる。

日本大学松戸歯学部本と同志社大学中瀬古文庫本との両方が『増続玉篇』を引いている。『増続玉篇』は毛利貞斎によって編輯され、元禄五年（一六九二）の初刊から明治四四年（一九一一）にかけて次々と版を重ねていた(注九)。そこには和訓が豊富に付されているために二種の現存本に用いられたと考えられる。

二　漢語に関する書き入れ

表三は**表二**のつづきで、漢語を表すものである。**表二**と見比べてみると、漢語注釈は漢字注釈よりはるかに少ないことがわかる。同志社大学神学部本と慶応義塾大学富士川文庫本において、音注・訓注など日本語文で解釈している箇所は漢文注釈より多いのが特徴である。次は、慶応義塾大学富士川文庫本を対象に漢語注釈を分析する。

この現存本には漢語解釈は九七箇所あり、書き入れの約一六パーセントを占める。漢語解釈については、次の例①のような日本語文で解釈するものと例②の和訓で解釈するものがほとんどである。

① 確鑿：シツカリト穿鑿シテヨリトコロアル也

② 按摸：ナデサスルナリ

③ 蜿蜒：漢語字類蜿蟺又蜿蜒訓ス二ノタクルト一

表三　漢語に対する書き入れ

	漢文注釈	日本語注釈	音	訓	音・訓	その他	合計
慶応 42@22@1-3	2	2	1	0	2	0	7
慶応 76@20@1-2	2	0	0	0	0	0	2
慶応富士川文庫本	7	49	1	40	0	0	97
早稲田大学本	5	0	1	1	0	0	7
同志社大学神学部本	4	15	3	12	3	1	38

例③を通して、この現存本の使用者は漢語を調べる際、漢語辞書の『漢語字類』を使っていたことがわかった。

三　医学用語に関する書き入れ

『全体新論』は医学書であるため、使用者が読む際に、医学関係の注釈を書き入れることが少なくない。使用者が医学知識、特に医学用語をどのように理解していたのかについて、このような書き入れを通して検討することができる。

表四に示すように、慶応義塾大学富士川文庫本と同志社大学神学部本は医学関係の書き入れが多い。特に、医学用語に関する書き入れが多い。この書き入れの量から判断すれば、使用者は医療関係の仕事に就いていた人であると推測できよう。そこで、次は医学関係の書き入れを分析し、使用者がどのような人物であるかを検討してみよう。

表四　医学関係の書き入れ

	書き入れ 医学用語	医学解釈 （出典有）	医学解釈 （出典無）	合計
慶応 42@22@1-3	0	0	0	0
慶応 76@20@1-2	1	0	0	1
慶応富士川文庫本	86	0	76	162
早稲田大学本	2	7	8	17
同志社大学神学部本	136	0	92	228

（1）同志社大学荒木文庫本　二書堂発兌『全体新論』（二〇一三年六月調査）

挟んでいる一枚の紙に書き入れがある。紙の裏の左下に「宇田弘」の書き込みがある。「宇田弘」は乙訓医師会のホームページに明治三九年（一九〇六）の創立時の京都府医師会乙訓支部の幹部として記載されている。この紙は縦書きで、二段に分けられている。上段の始めは「合信氏諸骨表」であり、ホブソンの『全体新論』に記述する骨名が挙げられている。下段の始めは「鈍屈里孫氏比較」であり、骨名が上段の「合信氏諸骨表」の骨名と対応して挙げられている。両書では一致しない骨名が多い。また、合信氏の「尾骶骨」に「布列私解剖圖以之爲尾骶骨」という注を書き入れている。宇田弘氏は「布列私解剖圖」をも参照したことがわかった。

「鈍屈里孫氏」はロブリー・ダングリソンである。ダングリソン（Robley Dunglison、一七九八～一八六九）はアメリカの多作な著述家である。氏の『医学事典』（一八三三年、チャールズ・ボウエン社出版）は最高傑作であると深瀬（一九九七）は言及している[注一〇]。また、阿知波（一九七九）の調査により、ダングリソン氏の著作は明治初期に当

時の医学生に多く使われていたことがわかった。

「布列私解剖圖」は『布列私解剖圖譜』であり、明治五年（一八七二）に中欽哉（定勝）によって訳述されたものである（注一一）。

（2）同志社大学神学部本　二書堂発兌『全体新論』（二〇一三年六月調査）

この現存本は図書館の記録により、キリスト教史学者である魚木忠一（一八九二～一九五四）が昭和三四年（一九五九）に寄贈した本であることが判明している（注一二）。

現存本には赤字で行間や欄外に書き込まれた例が多い。書き入れの六割強を占めるのは医学関係の解釈である。その中で医学用語に対する解釈は約六割を占める。

この本の医学用語は漢文あるいは日本語文で注釈されている。漢文は『全体新論』の第一節から第六節までの六節に集中している。つまり、骨関係の解釈は漢文が圧倒的に多い。「下牙床骨」の解釈は六〇〇字以上に達している。こちらの漢文は何らかの参考書によると推測される。一方、日本語文で解釈する医学用語の数は漢文より多いが、文の長さは短く、わかりやすい解釈である。また、原文「墊膈」の左に「軟骨」、「動肉」の右に「筋腱属」のように、別の医学用語で解釈された例が多い。その一方で、「脳漿」の右に「兼脊言」、左に「脊髄」のような左右両側の書き入れもある。また、「第七対脳筋」を「旧説聴神―新説顔面―」と解釈している箇所で省略されている字は前後の書き入れによって「圣」と「神圣」と推測する。「圣」は「経」を簡略したものであると思われる。この解釈から当時すでに「神経」という語を使っていたことがわかり、「旧説」と「新説」から医学用語の変化とホブソン医学用語の受容が見られる。つまり、以上の解釈は当時の医学用語の受容研究に役立つ情報を提示している。

医学用語以外の医学知識を解釈する際に漢文は日本語文より多用され、医学関係解釈の八割以上を占める。

医学の解釈について、この本には人体部位の絵が描かれている箇所がある。例えば、大脳の形が描かれた絵があり、大脳の一部「ハロリス橋」を「ハロリスノ真形如此故名橋」という解釈が書き入れられている。

また、右の例のように、漢文解釈に医学関係の音訳語が約四〇語あることも特徴である。例えば、「手腕」については

㈠ヲススカホイデイユム㈡セミヂニナチユム㈢トライキユトリユム㈣ヒシホルミ㈤トレベシユウム㈥トレベソイソイデス㈦マグニム㈧ヲンシホルム

のように音訳語が挙げてある。「馬乳」について「錐顖之□故称曰離骨連繋洋名シンレスモウセス」(注一三)とある例のように「洋名」「英称」「葡称」を音訳語の先に書き入れ、医学用語を解説する例もある。

（3）早稲田大学　越智蔵版『全体新論』（二〇一三年一〇月調査）

医学解釈について次の書き入れがある。

① 案此篇、當與靈骨度篇參看、――『黄帝内経・灵枢経』第十四篇「骨度」

② 霊五癰津液別論義同、茲不引何、――『黄帝内経・灵枢経』第三六篇『五癰津液別』

③ 液水藏（右）素問云、津液藏焉、――『黄帝内経・素問霊蘭秘典論』

④ 倉廩之官――『黄帝内経・素問霊蘭秘典論』

⑤ 難経、腎有両枚、重一斤一両、此曰一斤二両、且引素問、誤、――『黄帝八十一難経』

⑥ 難経、人一日一夜、凡一萬三千五百息――『黄帝八十一難経』

⑦ 胃之為言、云云、見釈名、此云爾雅、誤、劉熙釈名――『釈名』

⑧ 東方朔神異経云、人腹中虮蟲、其状如蚓、多則傷、少則穀不消、

⑨ 前喉後咽、説見沈括夢溪筆談、

⑩ 中土醫書左歪則針灸於右右歪則針灸於左是面上事作四支之謂也

以上の例を見ると、例①、②は『黄帝内経・灵枢経』による書き入れである。また、例③、④は『黄帝内経・素問霊蘭秘典論』を参照したものである。この例④の「倉廩之官」について、使用者は『全体新論』の該当内容の割注「見三才図会」を朱点で抹消し、右に「素問霊蘭秘典論」を書き入れている。例⑤、⑥は『黄帝八十一難経』によるものであり、特に例⑤は『全体新論』の正文に書かれた『素問』からの由来を疑い、『難経』によるものを示している。

以上のような中国の漢方医学書だけでなく、例⑦～⑩のようにほかの分野の著述も参照している。例⑦は『全体新論』割注の「見爾雅」の叙述を否定し、劉熙の『釈名』によると訂正したものである。一方、例⑩のように参照書籍を明確に書いていないものもある。

（4）慶応義塾大学富士川文庫本　越智蔵版『全体新論』（二〇一三年一〇月調査）

漢文で書かれた医学関係の注釈は一〇箇所あるが、次の例①、②のようなものであり、医学関係の内容を説明したものである。これらの例に

よって、①のような漢方関係の書籍だけではなく、②のような西洋医学者による書籍を参照したことがわかった。

① 大成論云大抵眼目為五蔵之精華一身之至要、故五蔵分五輪、八卦分八廓、五輪者肝属木曰風輪、在眼為烏睛、心属火曰血輪、有眼為二眥、脾属土、在眼為上下胞、肺属金在眼曰肉輪、在眼為上下胞、肺属金曰気ノ輪、在眼為白睛、腎属水曰水輪、在眼為瞳子○又云胆之府為天郭。膀胱之府為地郭命門之府為水郭、小腸之府為火郭、腎之府為風廓、脾胃之府

② 東京医学校日講記聞曰動脈者以膜質三層成焉曰外層曰中層曰内層。其外層曰蜂窠質膜。中層曰柔軟筋質膜。内層曰漿液膜

医学用語に関する解釈は七六箇所ある。同義語の医学用語で次の例③と例④を解釈する。

③ 罩睛皮　所謂白膜

④ 明眼罩　所謂角膜

これらの例は、『全体新論』の医学用語が日本に採用されなかった証拠となる可能性を示す。この類の医学用語を考察すれば、当時の日本における『全体新論』の医学用語の受容状況を確認できると考えられる。

また、漢文の解釈は「貞齋云」「貞齋按」で始まり、一一箇所の書き入れがある。次の例⑤のようなものである。

⑤ 彎膊：貞齋按脇骨弯端附脊骨之処殆如膊骨附鎖骨故此曰弯膊脇膊

「貞齋云」「貞齋按」の「貞齋」についてはこの本の乾坤二冊の一ページ目に「貞齋之印」の蔵書印があり、大野貞齋（一八四〇～一八八九）のことである。緒方洪庵の「適々斎塾姓名録」の第六三七番に名がある人物である。『勝浦市史　通史編』によると、貞齋は成東町姫島村の南凱と称した人である。上総勝浦（現在千葉県勝浦市）に住み、鈴木養齋の曾孫と記載されている。元治元年（一八六四）に入門し、その後、仲本町で医業を施すかたわら私塾を開き、道学と蘭学を教えたという。

四　使用形跡から見る『全体新論』と高木『全体新論訳解』の関係

（1）多和文庫本　越智蔵版『全体新論』（二〇一三年三月調査）

この現存本には書き入れが多く、欄外に字や語についての注が多数あ

る。また、訓点が付される原文にさらに片仮名や漢字を書き加える箇所が見られる。

注については、「按スル」と「訳解云按スルニ」で始まる書き込みがある。高木『訳解』に注がある場合、「按スルニ」で始まることが多い。多和文庫本と高木『訳解』との関係を明らかにするために、高木『訳解』にある注釈と多和文庫本の該当する内容を比べてみた。その一部を次の**表五**に示す。

高木『訳解』には九一条の注釈がある。多和文庫本の書き入れは高木『訳解』の字注や語彙注釈を参照し、その中の六五条を引用している。例5の一箇所のみは多和文庫本の使用者が自分で解釈したものである。例1では高木『訳解』で「西土（カラ）ノ粤東粤西」と注釈したが、実際に「粤東」は中国の広東、「粤西」は中国の広西を指しているのだろう。すなわち、「西土（カラ）ノ粤東粤西」ではなくて、「中土ノ粤東粤西」の間違いであると考えられる。そこで、多和文庫本は例1のように高木『訳解』で間違っているものや例6のように引用する必要のないものを判断し、除外していることがわかった。また、高木『訳解』では注はほとんど長文で、欄外に書くか割注をする形となる。しかしながら、多和文庫本は例2のように欄外に記載するか、あるいは例3、例4のように被注字と被注語の左に書くという形である。さらに、多和文庫本では例

表五　多和文庫本と高木『訳解』の注釈

	被注字・語	高木『訳解』		多和文庫本	
		注文	位置	引用文	位置
1	粤	按スルニ粤ハ西土ノ粤東粤西ノ地ナリ	割注	×	
2	繙	敕按スルニ繙ハ翻譯ノ翻ノ字ノ訛ナランカ	割注	按スルニ繙ノ字ハ恐ラクハ翻譯ノ翻ノ字ノ訛ナランカ	欄外
3	柝	按スルニ柝ノ字ハ、手扁ヲヨシトス、音ハ、セキ	割注	手扁ヲヨシトス 音ハセキナリ	被注字ノ左
4	惴	敕按スルニ惴ノ字ハ宜シク手ヘンヲ作ルベシ字ノ誤ナリ	欄外	揣	被注字ノ左
5	口(高木) 日(多和)		本文	日一二口ヲ作ルハ脈管ノ瘡口ヲ云フカ又日ノ字恐ラクハ目ノ誤字カ	欄外
6	救世の主 基督	按スルニ救世ノ主基督トハ、蓋シ、人名カ或ハ書ノ名ナラン	割注	×	

4のように原文の誤字の左に正しい漢字を書き入れることが多い。

（2）早稲田大学本　越智蔵版『全体新論』（二〇一三年一〇月調査）

この現存本に次のような書き入れがある。

① 按スルニ脳ハ西洋ニテヘルセント云

② 鎗ハ槍ノ誤金ニ从フモノハ鍋ノ類也

以上の二例は高木『訳解』の注釈と一致する。このほか、「鞭恐鞋」、「脈恐泒」、「日当作口」、「大恐入」のような書き入れは高木『訳解』の注釈を参照した可能性がある。

一方、高木『訳解』は『全体新論』に現れた「哮喘」について、

哮喘（ラウゼン）（408 ウ 02）（注一四）【按スルニ哮恐（ヲソ）ラクハ哮（ラウ）ノ誤（アヤマ）リナラン字典ニ此ノ字ナシ。哮ハコエナリ。】

のように注釈したが、早稲田本の使用者はこの注釈を引用せず、「哮當作哮」と直し、書き入れた。

（3）慶応義塾大学富士川文庫本　越智蔵版『全体新論』（二〇一三年一〇月調査）

この現存本に「臘　訳解ニ蠟ノ誤トナセリ」という一箇所があり、この書き入れは「訳解」によるものと考えられる。高木『訳解』では次のように解釈している。

臘（ラフ）（322 オ 02）【按（アン）スルニ蠟（ラウ）ノ字（シ）ヲ原文ニ月辺（ツキヘン）ニ作ル今マ之ヲ改ムモノ此ノ如（ゴト）シ。下ノ臘味（ラウミモマタアヤマ）亦誤リシリ】

よって、この書き入れは高木『訳解』の注釈と一致していることがわかる。

以上三種の現存本の使用者は『全体新論』を読む際に、高木『訳解』を参照したことが明らかである。本文を理解するために、字書、字典類だけではなく、和訳書である高木『訳解』をも使われていたのであり、高木『訳解』が参考の書籍として読まれたことがわかった。

第五節　『全体新論』の読解と『全体新論訳解』二種

一　現存本の漢字注釈と『全体新論訳解』二種

第四節では現存本に見られる書き入れを漢字、漢語、医学用語に分けて、それぞれの特徴と使用字典を分析した。さらに、調査により、高木『訳解』は『全体新論』を読む際に利用されたという両者の関係が明らかになった。

本節では『全体新論』に見られる書き入れが二種の『訳解』にどのような形で現れているのかについて検討する。方法としては書き入れの数が多い漢字を中心に考察する。日本大学松戸歯学部本、同志社大学中瀬文庫本、同志社大学神学部本、早稲田大学本、慶応義塾大学本二点と慶応義塾大学富士川文庫文の現存本を考察対象にする。以上七点の現存本にある漢字の書き入れをまとめると、計五二四字に注釈を書き入れた。『常用漢字表』（二〇一〇）と比較してみると、約六五パーセントが『常用漢字表』に入っていない漢字である。七点の現存本にすべて解釈されている漢字は「磆」「抖」「庥」のわずか三字である。これに対して、約三〇〇字は一点のみの現存本に見られる。どのような漢字を解釈するか基準が異なるということである。各現存本の漢字と『常用漢字表』を比較し、一致しない漢字数が各現存本の漢字合計に占める割合を計算すると、慶応義塾大学本 76@20@1 - 2 と日本大学松戸歯学部本は一致しない割合が高く、九割以上を占める。慶応義塾大学本 42@22@1-3 は一致しない割合が一番低く、約六割である。

四点以上の現存本に現れる漢字は七三字ある。この漢字が二種の『訳解』にどのように訳されるかを考察する。

現存本に解釈されるこれらの漢字を二種の『訳解』と比べてみると、現存本では漢字のみで解釈されるが、二種の『訳解』にはほとんどその字と前後の漢字とを組み合わせて語として翻訳されることがわかった。また、この七三字で構成する語は高木『訳解』にはすべて振り仮名が付されるが、石黒『訳解』には付されていない字は二つある。そして左右両側振り仮名が多数存在している。高木『訳解』には七字に、石黒『訳解』には二五字に左右両側振り仮名が付されている。特に、石黒『訳解』には「稜」を例として、「稜（リヤウ・カト）」「稜芒（リヤウホウ・カト）」、「三稜（・ミツカド）」のように、左右両側振り仮名と左側振り仮名の形で現れる。石黒『訳解』は左右両側振り仮名が多く、漢字の意味理解に役立つ手段であると言える。右側振り仮名について、石黒『訳解』には音読みが多い。これに対して、高木『訳解』には訓読みが多いので、意味理解がし易い。最後に、高木『訳解』では七字に割注のような注釈が付いているのは特色である。

二　高木『全体新論訳解』の注釈

前述の現存本に見られる計五二四字の注釈に対して、高木『訳解』はそのうちの三八字に注釈が付いている。序、例言、正文に注釈があるのは高木『訳解』の特徴であると言える。注釈は誤字、難字、難語を解釈しており、割注と欄外の二種類計九一箇所である。欄外はわずかに九箇所であり、ほとんど割注である。次の例を見よう。

① 繙（例言 03 オ 02　割注）【敕按スルニ繙ノ字ハ恐ラクハ翻訳ノ翻ノ字ノ訛ナランカ】

② 分柝（103 ウ 01　割注）【按スルニ柝ノ字ハ、手扁ヲヨシトス、音ハ、セキ。】

③ 執金（130 オ 08　欄外）【敕按スルニ執金ノ二字ハ未タ詳カラス姑ク後攷□マツ】

④ 療癘（407 ウ 02　割注）【敕按ズルニ療ハ魯果ノ切シ音ハ裸ナリ。又魯猥ノ切シ音ハ磊ナリ。康熙字典ニ療癘ハ筋ノ結ボル病ヒナリ。正字通ニ曰ク瘍頸ビ項ジヲ繞リテ絫絫ナリ。方書ニ療癘ハ或ハ耳ノ後ロ頤ヒ項スジノ缺盆ノ辺ニ在ルハ手ノ少陽三焦経之ヲ主ル。或ヒハ胸及ビ胸ノ側ラニ在ルヲ皆ナ馬刀瘡ト爲ス足ノ少陽膽ノ経之ヲ主ル。】

⑤ 基督（443 ウ 02　欄外）【敕按スルニ博物新編ニ云ク基リ督ト教ノ偶像功名ハ花ノ上ノ露富貴ハ草頭ノ霜ナリ、甚麼豪強智力ヲ争ヒ甚麼驕傲兇頑ヲ逞シクスル総テ目シク早ニ及ンテ頭ヲ回ラシ心ヲ洗ヒ慮ヲ滌キ造化ノ真宰ヲ崇ミ福ヲ穫ル窮ナク偶像ノ邪神ヲ掃ヒソノ誘惑ニ迷フトカルベシ則チ生テ真ノ道ヲ行ナヒ死シテ永キ休ヲ享ク豈美シカラスヤ大森解谷曰ク此レ英人ノ文ニ係ル故ニ其ノ説斯ノ如シ我国ニアリテハ自ラ皇国ノ教アリ何ノ基リ督教カコレ有ラン】

注釈は「按スルニ」、「敕按スルニ」という明確な表示で始まるのが多数であり、七八箇所ある。高木自らの解釈が典拠による解釈より多い。③と④のような漢語に対する解釈が一番多く、四〇箇所ある。これの半分以上には典拠がある。次に①のような誤字に関する解釈が三六箇所あるが、これは完全に高木自らの判断によるものである。②のような難字に対する解釈は一〇箇所あるが、ほとんど典拠ある解釈である。難字、難語以外に、⑤のような翻訳の際の難解箇所に対する自らの見解もいくつか見られる。

これらの注釈を通して、訳者の難字、難語に対する理解が知られる。また、難字を解釈するために用いた字典類がわかる。さらに、当時の新

事物に対する見解も見られる。以上の例を見ると、これらの注釈は高木『訳解』の有力な翻訳手段であると思われる。

現存本に見られる漢字解釈を二種の『訳解』と比べると、二種の『訳解』は漢字に対する解釈方法が異なることがわかった。石黒『訳解』は左右両側振り仮名と左側振り仮名の形で、すなわちその左側の振り仮名を通して意味を解釈している。七点の現存本にある計五二四字に対して、石黒『訳解』は一五五字で構成される語に左右両側振り仮名あるいは左側振り仮名が付されている。しかも、同一漢字に二つ以上のものもある。一方、高木『訳解』は右側振り仮名に訓読みが数多く付される以外に、左右両側振り仮名と難字や誤字に対する注釈も多数ある。七点の現存本にある計五二四字に対して、三八字に注釈があり、四五字に左右両側振り仮名が付されている。

第六節　石黒『全体新論訳解』の版元

第四節と第五節では現存本に見られる使用形跡について考察した。本節では調査の際に気付いた石黒『訳解』の版元問題について調査成果の一つとして報告する。

第一節では調査目的としてすでに述べたように、北大本石黒『訳解』と国立国会図書館関西館に所蔵する石黒『訳解』における左右両側振り仮名の数が異なることに気付いた。

北大本石黒『訳解』と国会本石黒『訳解』と比べてみると、北大本は左右両側振り仮名三一三語あるが、国会本より二四語多いことがわかった。次頁の**表六**に示すように、国会本には右側振り仮名か左側振り仮名かのどちらかの一方であるが、北大本石黒『訳解』には反対側にも振り仮名を付して両側振り仮名にしている。

また、両本のほかの振り仮名を比べてみると、左右両側振り仮名以外に、振り仮名を付した語の数も違うことがわかった。次頁の**表七**に示すように二四語の違いが現れる。そのうち、次の①と②の振り仮名の違いと②の送り仮名の違いも存在している。

	北大本石黒『訳解』	国会本石黒『訳解』
①	遽　遽カニ（ハルカ）	遽ヒニ（タガ）
②	逗　逗マル（トヽ）	逗マル（セ）

表六と**表七**に示すように、北大本と国会本は四八箇所の振り仮名の違いが見られる。右の二箇所はいずれも修正によるものであるが、それ以外の四六箇所は北大本で新たに付された振り仮名である。現存本調査に

表六　北大本と国会本の不一致の左右両側振り仮名　※・カタカナは左側振り仮名を表す。

表記	所在	北大本	国会本	表記	所在	北大本	国会本
包裏	102オ03	ホウクワ・ツツム	・ツツム	齷	227オ02	サン・コ□モノハ	サン
咀嚼	105オ01	ソシヤク・カム	ソシヤク	**齟然**	227オ07	コンゼン・ハノナキ皃	コンゼン
顧盼	105オ04	コビン・カヘリミル	・カヘリミル	**涎沫**	228ウ01	ゼンマウ・タタヨダレ	ゼンマウ
咽喉	106ウ10	インコウ・ノド	・ノド	**齟齬**	228オ06	チセツ・ニレカム	チセツ
逼近	107オ06	ヒヨクキン・セマリ	・セマリ	**躍動**	302オ06	ヤクダウ・ヲドリ	ヤクダウ
優伶	110オ01	イウレイ・カンニン	イウレイ	**喰鱒**	315オ05	ケンハツ・イキコヨナ皃	ケンハツ
抽擢	122ウ04	チウチク・ヒキツケ	チウチク	**圉圉**	315オ05	ギヨ・クルシム皃	ギヨ
抖擻	122ウ05	トソウ・ハラウ	トソウ	篦𩲭	315オ06	ボツラン・シセントスル皃	ボツラン
疲弊	123オ04	ヒヘイ・ツカレ	ヒヘイ	**喁**	315オ06	ギヨウ・ハナウ□コト	ギヨウ
跌碭	125オ04	テツカウ・ツマヅク	テツカウ	**延嗣**	324オ07	エンシ・ヨ□キ	エンシ
痴蠢	127オ01	チシユン・ヲロカ	チシユン	**夭𡿺**	326オ04	ヨウラフ・ワカジニ	ヨウラフ
癲狗	131オ01	テンコウ・キチガヒノイヌ	テンコウ	**手淫**	326ウ04	シユイン・センスリ	シユイン

表七　北大本と国会本の不一致の振り仮名　※・カタカナは左側振り仮名、（ ）は送り仮名を表す。

表記	所在	北大本	国会本	表記	所在	北大本	国会本
脂膜	101オ06	シボマリ	シボ	撃ス	118オ02	ゲキ	
另ニ	102オ02	ベツ		繋ク	118ウ03	ツナ	
包裏	103オ04	・ツヽム		趾	118ウ06	・アシノユヒ	
稜芒	103オ10	リヤウホウ		癰	118ウ10	ヨウ	
截	104オ03	セイ		売	121オ07	コウ	
承ク	104オ08	ウ		表現	122オ01	・アラワス	
厚シ	104オ10	アツ		揚ケ	122オ03	ア	
両	104オ10	ツヽ		高	122オ03	（ク）	
壊ス	105ウ01	ヤブ		百足	125ウ10	・ムカゼ	
心	106オ05	シンゾウ		遞	127オ08	ハルカ（カニ）	タガ（ヒニ）
承テ	109オ06	ウケ		逗マル	308ウ04	トヽ	
懸ク	109オ07	カケ		蛋	309ウ05	タン	

より、この四六箇所はただの使用者による書き入れではなく印刷されたものであることは、ほかの現存本にも上記の振り仮名の違いが存在することから推測できる。

北大本と同様に関西大学本、京都大学富士川文庫本、京都大学人文科学研究所本、名古屋大学医学部本では四八箇所の振り仮名が付される。一方、東京大学洪庵文庫本、国文学研究資料館本、同志社大学荒木文庫本は国会本と一致し、北大本と異なる別の系統であることがわかった。北大本と一致する系統は新たに振り仮名が付され、改めて刊行され、国会本の系統より後のものであることが明らかである。

吉田（一九九六）は石黒『訳解』に明治七年と明治九年の版があると指摘している。国会本は明治七年（一八七四）の版であるが、北大本は明治九年（一八七六）の版であるかどうかはまだ明確に言えない。これまで、調査した現存本には再版に関する有力な情報が見つからず、今後の調査成果が期待される。

第七節　まとめ

以上、『全体新論』の現存本の使用形跡を調査したところ、漢字、漢語、医学用語などの書き入れが多数存在していることがわかった。難字については、漢文のみの注釈や和訓付きの注釈が付され、『字彙』や『康熙字典』を参照し、漢字を解釈している。あるいは、『増続玉篇』により、和訓を引用している。すなわち、明治初期には単字字書を用い、漢文を読解することが主流であった。

また、医学用語については当時の使用者が中国の漢方書籍だけではなく、西洋人の著述も参照したことがわかった。明治初期は積極的に西洋医学を受け入れようとする時期であり、英語翻訳による医学用語は、一歩先に伝来した漢訳洋書である『全体新論』の医学用語と併用されている。現存本に現れた医学用語の書き入れを『全体新論』本文の医学用語と比べ、その受容状況を確認することは今後の課題にしたい。

漢字、漢語、医学用語を考察する以外に、書き入れにより、三種の現存本の使用者が高木『訳解』を参照していたことがわかった。

【注】

（注一）　八耳「目録」には詳細不明の和刻本について「研医会本は25.5×17.3cm　で越智蔵板，二書堂とする。2点所蔵か。」のように記載されている。

（注二）　（注一）に述べたように、研医会に何点あるか不明であるため、概数で示す。

（注三）　分類不明『全体新論』は原本未調査のため、何点あるか不明

である。本論文では各所蔵機関を一点ずつと概数で示す。

（注四）　二〇一三年三月調査については、原本だけではなく、マイクロフィルムの資料も含めて調べた。

（注五）　坤のみ残存され、版元が判断できない現存本と、原本を調査せずに所蔵される図書館や研究機関の蔵書検索や蔵本目録に版元が記録されていない現存本の二種類を分類不明とする。ただし、未調査の現存本は版元の確認調査に従い、越智蔵版か二書堂発兌かに新たに分類する場合がある。

（注六）　次の静岡県立図書館葵文庫、刈谷中央図書館、岐阜市立図書館にある現存本は蔵書検索や目録類の記録にある記録により何点あるか判断できないためそれぞれ一点と最低限の概数で数える。

（注七）　多和文庫本の『全体新論』について国文学研究資料館図書館に所蔵されているマイクロフィルムを調べた。

（注八）　新城ふるさと情報館牧野文庫本について国文学研究資料館図書館に所蔵されているマイクロフィルムを調べた。

（注九）　関場（一九七七）を参照。

（注一〇）　深瀬（一九九七）では『医学事典』の初版は A New Dictionary of Medical Science and Literature の書名であると述べている。

（注一一）　「布列私解剖図譜」の詳細は中泉行史ほか（二〇〇二）を参照。

（注一二）　魚木忠一氏の生没年について有賀鐵太郎（一九五五）を参照。

（注一三）　現存本にある書き入れが判別できない箇所を□で表す。

（注一四）　高木『訳解』の所在は巻・頁・オ（表）・ウ（裏）・行の順とする。次の石黒『訳解』の所在もこの順序に従う。

第四章　『全体新論訳解』二種の振り仮名

第一節　振り仮名に関する先行研究

近代の文章の振り仮名表記の使用状況、形態、用法は種々様々である。それらについての先行研究は非常に多く、さまざまな角度からの検討が行われている。ことに、振り仮名の表記の問題、および漢字との関係については度々指摘されてきた。指摘の例として、進藤（一九八二）や京極（一九九三）における振り仮名型の分類、岩淵（一九八九）における振り仮名の四役割、大島（一九八九）における漢字と仮名の対応関係、そして、石井（二〇一二）における振り仮名と漢字の二重表記などが挙げられる。

この他に、振り仮名にテキストジャンルによる一定の違いが見られると論じる研究があり、本章の観点にも深く関係する。京極（一九八一）では文章ジャンルによる使用実態の調査が行われ、文章のジャンルや表現形式により、その表記法が異なると指摘する。そして、細川（一九八九）は近代の振り仮名の実態調査について、次のように述べている。

> 従来、なぜ振り仮名が施されるのかという観点での個別的・選択的な研究はいくつかなされているものの、どのような場合にどのような形で振り仮名が付されるのか付されないのかという観点から具体的な基礎調査は意外に少ないのが現状である。今後、こうした観点からの資料調査および言語実態分析を急がねばなるまい。

さらに、振り仮名の研究は「語義や表現あるいは文体とのかかわりの方が強い」ことと、「振り仮名の問題は、すなわち漢字・仮名表記の問題であり、同時に和語・漢語の問題とも深くかかわっている」ことも指摘する。

細川（一九八九）以降の研究では、主として文芸作品を対象に振り仮名の実態調査が行われてきた。しかし、文芸作品以外の文章において、振り仮名の表記法がどうなっているのかについて注目度はまだ低い。中でも、専門分野の翻訳文に見られる振り仮名の特徴との差異、および振り仮名に文体の差異や和語・漢語の問題が反映しているかどうかについての研究は十分ではない。

第二章で述べたように、飛田（一九七三）は高木『訳解』が「難解かと思われる漢語にふりがながあり、右側は読み方、左側は意味（訳語）を示している」と述べている。この指摘は左右両側振り仮名の特色に触れたものである。そこで、本章では、高木の『訳解』に加え、石黒『訳

解』と対照しながら、それぞれの振り仮名の特徴を具体的に明らかにしたい。

よって、本章では同一の漢文を和訳した二種の『訳解』を取り上げて、それらに付された振り仮名の量的基礎調査を通して、両者の共通点と相違点を検討し、近代の文章の振り仮名表記の研究において、二種の『訳解』の資料的価値を明確にしたい。

第二節　振り仮名の取得方法

振り仮名の取得は、EmEditor、perl プログラムと Microsoft Office Excel（以下はエクセルと略す）を使って、二種の『訳解』をテキスト化して行う。EmEditor は Windows 用テキストエディターであり、高速・軽量・高機能で、マクロ、ユニコードや巨大ファイル対応が特徴である。エクセルは大量のデータを高速に処理できるソフトウェアであるため、テキスト化とデータ処理を効率よく行うことができると考えられる。

石黒『訳解』と高木『訳解』の序、例言と正文の第八節までの内容をテキスト化の対象とする。次は二種の『訳解』序の一文目をテキスト化した例である。

I00-001 凡(およ)ソ,天下(テンカ)ノ,物(モノ),理(リ),アラザル,ナシ。

T00-001 凡(オヨ)ソ,天下(テンカ)ノ,物(モノ)ハ,理(リ),アラザル,モノ,ナシ。

一　テキスト入力の方針

二種の『訳解』をテキスト化する前提として、原文を前掲の例のように入力する。入力の方針は次の通りである。

（一）　文字をすべて全角文字とする。本文にある割注を【　】の中に入力する。表記は本論文の凡例で述べたように改める。

また、割注を次のように入力する。

1　本文中の割注だけを入力する。本文欄外の注釈を除外する。

2　割注の所在位置により、入力する場所が異なる。次の例（1）のように、一文の終りにある割注は、独立の一文として入力する。例（2）のように、一文の間にある割注は、この文の中、すなわち、被注字・語の後に入力する。また、区切りの単位となる可能性があるため、割注の改行を分割符号「／」を入力しない。

例（1）　原文　當中鼻脊ニ近クノ處。【即俗ノ／印堂】

入力　①　當中鼻脊ニ近クノ處。

② 【即俗ノ印堂】

例（2） 原文 上水泡骨【下亦水泡骨アリ。／故ニ上ト云フ】

ハ額内ノ正中ニアリ。

入力 上水泡骨ハ【下亦水泡骨アリ。故ニ上ト云フ】

額内ノ正中ニアリ。

3 以上の例（2）原文のように、「上水泡骨」につく助詞「ハ」は原文の割注の後に来るのが普通であるが、入力する際にその助詞は割注の前に移動し、すなわち被注字・語の後に入力する。これは助詞が一つの文節になるのを避けるためである。

4 【 】の中に【下亦水泡骨アリ。故ニ上ト云フ】のように最後の「。」を入力しない。

5 一箇所の割注にはいくかの文があっても、入力する際に一つの【 】に入れて、一文とする。

（二） 原文にある片仮名の振り仮名を半角の( )に片仮名で入力する。そのうち、右側振り仮名は標記なくそのままで、左側振り仮名は(・カタカナ)で入力する。左右両側振り仮名は(カタカナ・カタカナ)の形で、右側振り仮名は最初に入力する。原文の漢字に振り仮名が付されていない場合は補読をして半角の( )の内に平仮名を入力する。片仮名は原文の通りに入力するが、補読の平仮名は現代仮名遣いに変換する。補読の方針は次のとおりである。

1 原文の前後に一致する振り仮名がある場合は、その振り仮名によって入力する。例えば、石黒『訳解』には「脳氣筋(ノウキキン)」の振り仮名によって、振り仮名が付されていない「脳氣筋」を(のうききん)と補読する。

2 完全に一致する振り仮名が存在しない場合、漢字語の一字ずつは原文に振り仮名があるかどうか確認し、すでに存在する場合、その振り仮名を使う。存在しない場合は、その読みを推測する。

（三） 区切り単位として、半角カンマ（,）と句点（。）を文節の区切りとして使う。特に、注意するのは割注が文中に現れる場合、【】の前後にカンマ（,）を入れることである。例えば、例（2）を区切り単位を入れると次のようになる。

上水泡骨(ジヤウスイハウコツ)ハ,【下(した),亦(また),水泡骨(すいほうこつ),アリ。故(ゆえ)ニ,上(うえ)ト,云(い)フ】,額内(ガクナイ)ノ,正中(・マンナカ)ニ,アリ。

カンマ（,）を入れないと、「【」は前の文節の一部になり、「】」は全角文字として、一文節になるためである。

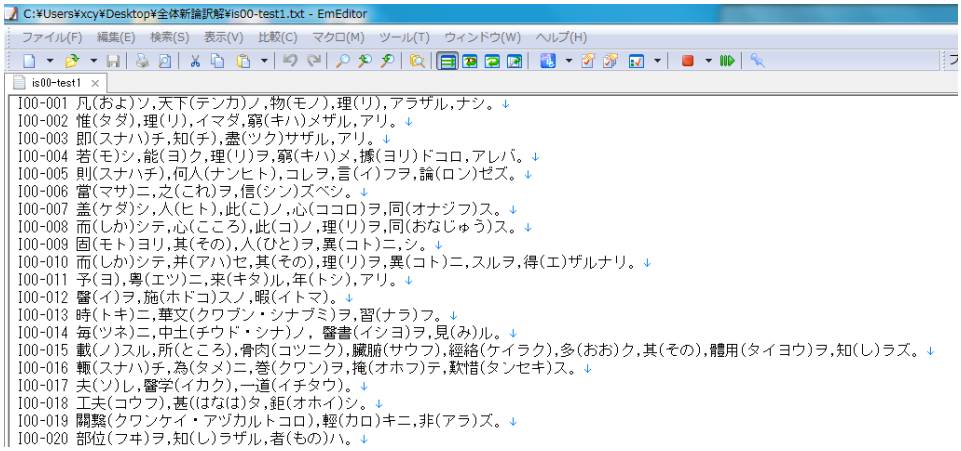
（四）原文一文を一行とし、その先頭に元のテキスト情報（訳者・目次）と連番を付ける。Ｉは石黒『訳解』、Ｔは高木『訳解』を表す。I00 は石黒『訳解』の序、続いて、I00 - 2 は例言、I01 は第一節を示す。この作業は EmEditor を使って番号をつける。

（五）連番の後に半角の空白を入れる。これも EmEditor を使うと、効率がよい。

（六）ファイル名は石黒『訳解』に is、高木『訳解』に tk を付ける。すなわち、石黒『訳解』の序のファイル名は「is00-test1」、例言は「is00-2-test1」第一節は「is01-test1」である。同様の操作を繰り返して、他のファイルを作る。これに対して、高木『訳解』は「tk00-test1」、「tk00-2-test1」「tk01-test1」となる。ファイルの拡張子は txt とする。（以下は全部 is00 を例として説明する。）

以上の入力方針に基づき、入力が終わると、次の**図一**のようになる。

図一



二　データベース構築の手順

（一）文節リストの作成

perl プログラムと mojikiri プログラム（注二）とを使って、**図二**のように「perl mojikiri.pl is00-test1.txt is00-test02.txt」を実行して、**図三**のように「is00-test1 を区切りで文節リストを載せたファイルが作られる。ファイル名は is00-test2 とする。

図二

図三

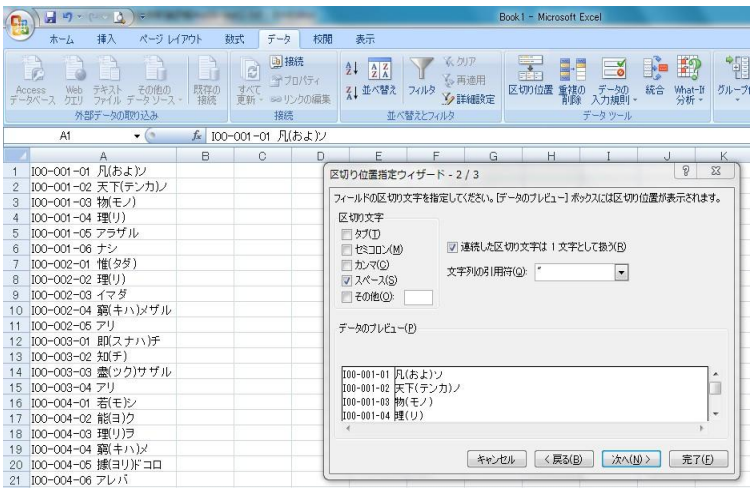
以上の作業で得られたデータを確認する。ミスを避けるために、割注の【　】は一文節になったかどうか、漢字表記語に振り仮名が付されているか否か、徹底の確認は必要である（注二）。

（二）　データ処理

（1）　is00-test2 のデータを番号と文字データに分離する作業

以下は文字データだけを処理するため、番号と文字データとを分離する作業が必要である。is00-test2のデータをエクセルのA欄にコピーする。「データ」の「区切り位置」をクリックすると「区切り位置指定ウィザード」が出てきて、次へ進んで、区切り文字のスペースを選ぶと、

図四

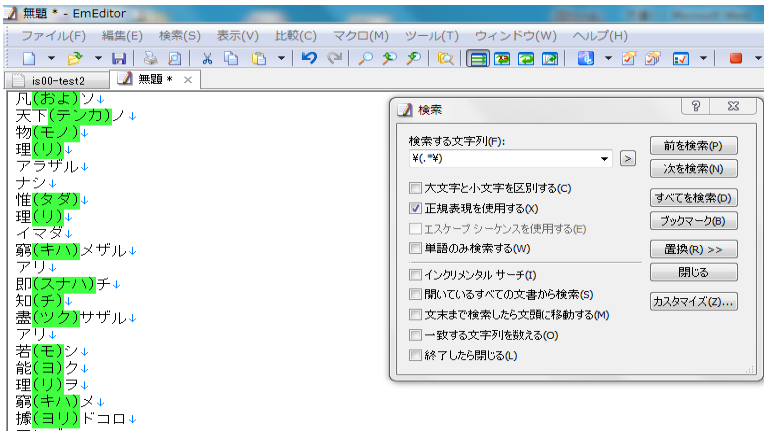


図四のように文字データはB欄になる。このファイルはis00-test3のファイル名で保存する。

（2）　書字形リストの作成

B欄のデータをコピーして、EmEditor にペーストする。「検索」の「検索文字列」に¥(.*¥)を入力して、正規表現を使って、検索すると次の**図五**のように緑色になる。それから、「置換」をクリックして、「置換後の

図五

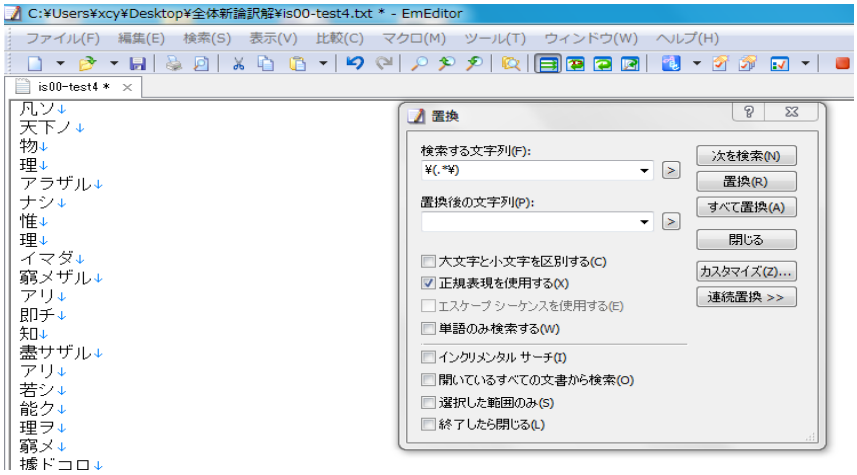


文字列」を空白にして、さらに、「すべて置換」をクリックして、**図六**のように（ ）と（ ）内の仮名が消されて原文どおりになる。**図六**のデータをコピーして、「書字形」のリストとして、**is00-test3** のエクセル C 欄にペーストする。

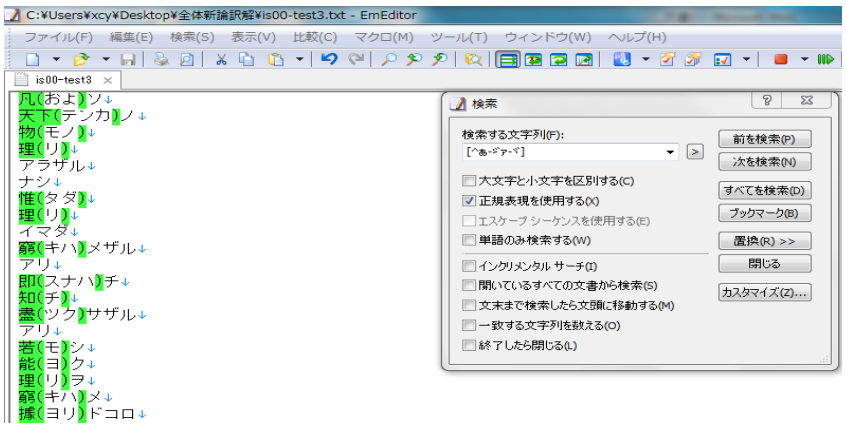
（3） 読みリストの作成

（2）の作業のように「検索文字列」に「(.*)」を入力して、正規表現を使って、検索すると次の**図七**のように緑色になる。それから、「置換」をクリックして、「置換後の文字列」を空白にして「すべて置換」

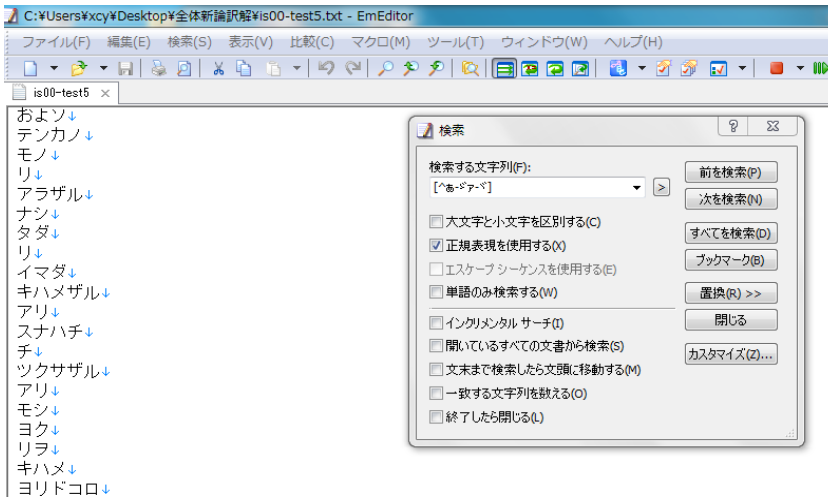
図六



図七

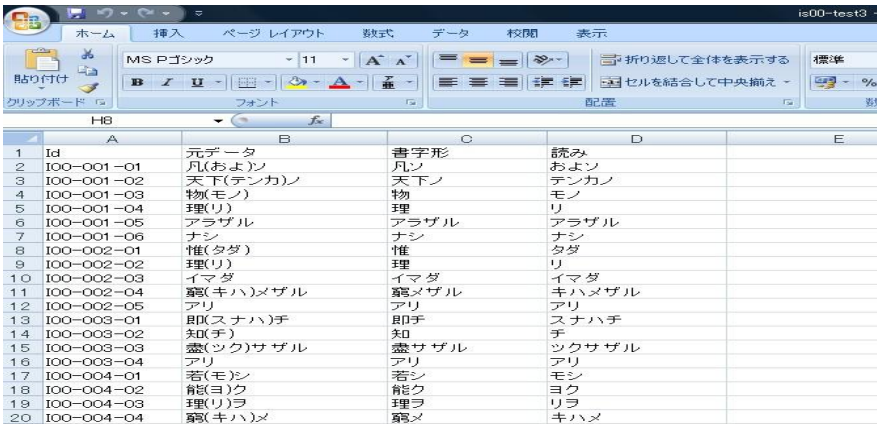


図八



をクリックして、**図八**のように読みのリストを作成する。この「読みリスト」をコピーして、is00-test3 のエクセル D 欄にペーストする。この際の is00-test3 は次の**図九**のようになる。

図九



	A	B	C	D	E
1	Id	元データ	書字形	読み	
2	I00−001−01	凡(およ)ソ	凡ソ	およソ	
3	I00−001−02	天下(テンカ)ノ	天下ノ	テンカノ	
4	I00−001−03	物(モノ)	物	モノ	
5	I00−001−04	理(リ)	理	リ	
6	I00−001−05	アラザル	アラザル	アラザル	
7	I00−001−06	ナシ	ナシ	ナシ	
8	I00−002−01	惟(タダ)	惟	タダ	
9	I00−002−02	理(リ)	理	リ	
10	I00−002−03	イマダ	イマダ	イマダ	
11	I00−002−04	窮(キハ)メザル	窮メザル	キハメザル	
12	I00−002−05	アリ	アリ	アリ	
13	I00−003−01	即(スナハ)チ	即チ	スナハチ	
14	I00−003−02	知(チ)	知	チ	
15	I00−003−03	盡(ツク)サザル	盡サザル	ツクサザル	
16	I00−003−04	アリ	アリ	アリ	
17	I00−004−01	若(モ)シ	若シ	モシ	
18	I00−004−02	能(ヨ)ク	能ク	ヨク	
19	I00−004−03	理(リ)ヲ	理ヲ	リヲ	
20	I00−004−04	窮(キハ)メ	窮メ	キハメ	

（4）原文の振り仮名と補読読みを数えるための前提作業

図九に、「およソ」のような補読の平仮名と送り仮名の片仮名との組み合わせるデータは単純に EmEditor を使って処理できないため、また、「アラザル」のような漢字のないデータは除外する必要があるため、**図九**の D 欄のデータを改めて処理する。D 欄のデータの漢字読みを抽出する作業である。すなわち、D 欄にも C 欄にも現れる同じ片仮名を D

図一〇　D 欄データの漢字読みを抽出する作業の命令

```
'''customer defined function
Function NoStr1CharInStr2(str1 As String, str2 As String) As String
    Dim str As String

     For i = 1 To Len(str2)
        j = Mid(str2, i, 1)
        If InStr(str1, j) = 0 Then str = str + j
     Next
     NoStr1CharInStr2 = str
End Function
'''customer defined function
Function NoRepeatConcate(str1 As String) As String
    Dim str2 As String

     For i = 1 To Len(str1)
        j = Mid(str1, i, 1)
        If InStr(str2, j) = 0 Then str2 = str2 + j
     Next
     NoRepeatConcate = str2
End Function
```

欄から除外する作業である。

この結果を得るために、マクロの記録の作業を行う。エクセルの「表示」から「マクロの記録」を開くと、マクロ名を入れる。「ok」を押してから、もう一度「マクロ」に入って、「マクロの表示」の「編集」をクリックする。前頁と本頁の左側からの**図一〇**の命令を入力する。

```
'"register customer functions
Sub RegUDF()

    Dim FuncName As String          'function name
    Dim FuncDesc As String          'function description
    Dim Category As String          'function category
    Dim ArgDesc(1) As String        'function parameters description

    FuncName = "NoRepeatConcate"
    FuncDesc = "Return No Repeat Character String"
    Category = "Customer Defined Functions"
    ArgDesc(0) = "Function Parameter 1"

    Call Application.MacroOptions(Macro:=FuncName, Description:=FuncDesc,
Category:=Category, ArgumentDescriptions:=ArgDesc)

    FuncName = "NoStr1CharInStr2"
    FuncDesc = "Return Str2 Filter out chatacters in Str1"
    Category = "Customer Defined Functions"
    ArgDesc(0) = "Function Parameter 1"
    ArgDesc(1) = "Function Parameter 2"

    Call Application.MacroOptions(Macro:=FuncName, Description:=FuncDesc,
Category:=Category, ArgumentDescriptions:=ArgDesc)
End Sub
```

以上の命令を「sub／ユーザーファームの実行」で運行する。出てくるダイアログボックスを閉じる。is00-test3 を開いて、「関数の挿入」のところに =NoStr1CharInStr2(C1,D1)を入力して、E 欄の E1 をクリックして、またフィルハンドルを下へドラッグすると、漢字読みリストが作成される。E1 と同じデータが出てくる場合は「数式」の「計算方法の設定」にある「手動」に変更する必要がある。

保存する場合は「Excel マクロ有効テンプレート」で保存する。

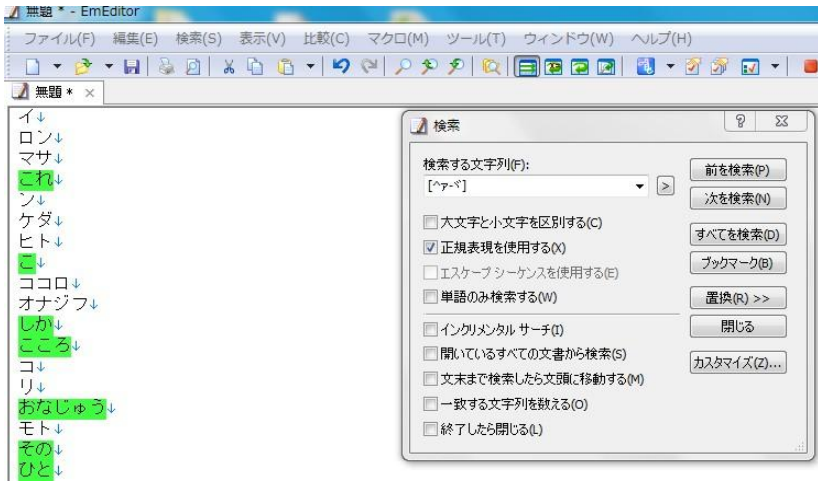
以上の作業を繰り返しする必要はないが、保存したファイルを底本として、それ以外のファイルの C 欄と D 欄のデータをこのファイルにコピーして、自動的に E 欄のデータになる。このデータを元のファイルにペーストして作業が終わる。注意するのは、得られた E 欄のデータを元のファイルにコピーする場合、「貼り付け」の「値の貼り付け」で変換する。さらに、EmEditor にコピーしたデータを利用して、次の（5）（6）の作業を行う。

（5） EmEditor にコピーされた E 欄データの処理による振り仮名リストの作成

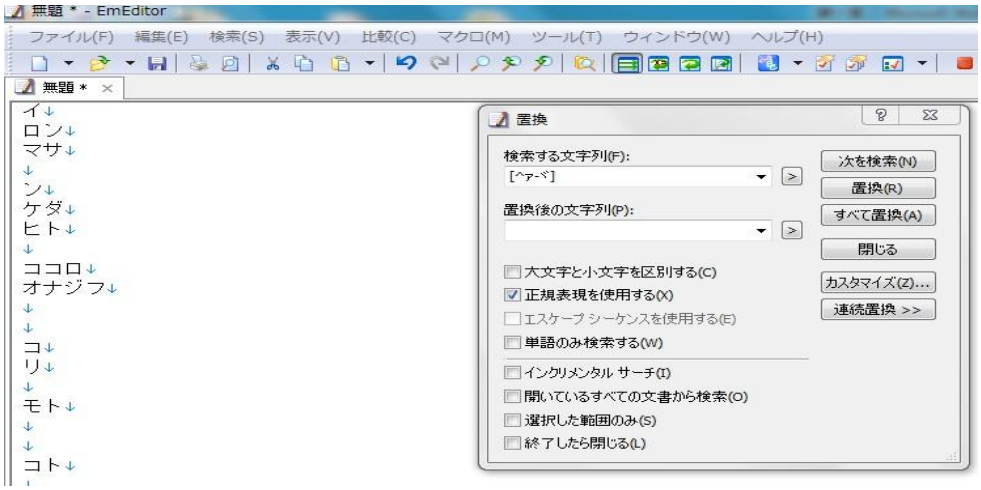
次の**図一一**のように E 欄データに対して、「検索する文字列」に[ァ-ヾ]を入れて、さらに、「置換」の文字列に空白を入れると、**図一二**のように片仮名読み、すなわち原本の振り仮名リストになる。このデータ

を is00-test3 のエクセル F 欄にペーストする。

図ーー



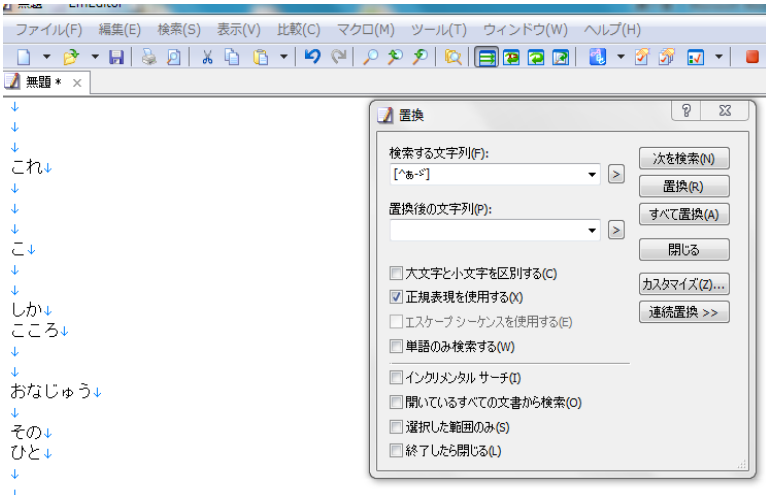
図ーニ



（6）　EmEditor にコピーされたE欄データの処理による平仮名リストの作成

（5）の**図一一**のようにE欄データに対して、「検索する文字列」に[ぁ-ゞ]を入れて、さらに、「置換」の文字列に空白を入れると、**図一三**のように補読した平仮名リストになる。このデータをis00-test3 のエクセルG欄にペーストする。

図一三



（7）　is00-test3 エクセルデータの統計

以上の作業で得られたis00-test3 エクセルのデータをファイルの最後の行にCOUNTA 関数を使って、データの数を数える。このように、振り仮名の数および補読読みすなわち振り仮名の付されていない漢字表記語の数がわかる。

第三節　データベースの構築による振り仮名の分析

一　データベースの項目

以上の作業をまとめ、各項目を説明する。データ処理に際して、自立語の数を計算するため、文を文節で区切り、半角のコンマを入れる。漢字表記語に振り仮名の有無を把握するため、振り仮名があるものは原文のまま片仮名で表し、振り仮名がないものには推定した読みを平仮名で付す。この平仮名を「補助読み」と呼ぶ。

さらに、『訳解』二種の序の一文目を次の**表一**と**表二**のように分類し、データベースを構築する。**表一**のI00-001-01 は石黒『訳解』序の一文目の一語目の所在を表す。「元データ」は文を文節で区切ったデータである。「書字形」は振り仮名を除いた原文文章のみを表す。「読み」は文節の読み方を示すものである。「漢字読み」は振り仮名読みと補助読みのどちら

かが付される漢字表記語の読み方を示すものである。

表一　石黒『訳解』I00-001 の例

ID	元データ	書字形	読み	漢字読み	振り仮名読み	補助読み
I00-001-01	凡(およ)ソ	凡ソ	およソ	およ		およ
I00-001-02	天下(テンカ)ノ	天下ノ	テンカノ	テンカ	テンカ	
I00-001-03	物(モノ)	物	モノ	モノ	モノ	
I00-001-04	理(リ)	理	リ	リ	リ	
I00-001-05	アラザル	アラザル	アラザル			
I00-001-06	ナシ	ナシ	ナシ			

表二　高木『訳解』T00-001 の例

ID	元データ	書字形	読み	漢字読み	振り仮名読み	補助読み
T00-001-01	凡(オヨ)ソ	凡ソ	オヨソ	オヨ	オヨ	
T00-001-02	天下(テンカ)ノ	天下ノ	テンカノ	テンカ	テンカ	
T00-001-03	物(モノ)ハ	物ハ	モノハ	モノ	モノ	
T00-001-04	理(リ)	理	リ	リ	リ	
T00-001-05	アラザル	アラザル	アラザル			
T00-001-06	モノ	モノ	モノ			
T00-001-07	ナシ	ナシ	ナシ			

二　振り仮名の統計

次の**表三**と**表四**は、二種の『訳解』の序、例言および先頭から八節分のデータを集計したものである。表内の「文節数」は文節の数、すなわち、自立語の数を表す。「漢字表記語」は**表一**、**表二**の「漢字読み」に当たる。「交じり読み」は語の一部に振り仮名が付されていない漢字に「補助読み」をつける漢字表記語の読みを指す。

表三に示すように、石黒『訳解』では漢字表記語は自立語（文節）の約九割を占める。また、漢字表記語の約二割強に振り仮名がある。振り仮名は序に一番多く、次第にその比率がさがる。漢字表記語の初出に振り仮名を付して、その後に現れる同一語には付さず、重複を避ける傾向が見られる。振り仮名が付されなかった漢字表記語（補助読み）は七割強を占める。

一方、**表四**の示すように、高木『訳解』には自立語が石黒『訳解』より多い。漢字表記語は自立語の九割を占め、石黒『訳解』と近い比率である。振り仮名は八割の漢字表記語に付され、特に、序から正文にかけての漢字表記語で、比率が高い。残りの一割強を占める振り仮名が付されていない漢字表記語にも、その読みを示す振り仮名が語の前後に現れたものが多く見られる。

表三　石黒『訳解』の文節と振り仮名※比率Ⅰは文節数、比率Ⅱは漢字表記語に占める割合を(%)で表す

所在	文節数	漢字表記語 (比率Ⅰ)	振り仮名読み (比率Ⅱ)	補助読み (比率Ⅱ)	交じり読み (比率Ⅱ)	右側振り仮名	左右両側振り仮名	左側振り仮名
序	237	217(91.6)	153(70.5)	63(29.0)	1(0.5)	136	18	0
例言	347	331(95.4)	210(63.4)	117(35.3)	4(1.2)	190	24	0
第１節	292	252(86.3)	92(36.5)	155(61.5)	5(2.0)	77	11	9
第２節	902	831(92.1)	193(23.2)	600(72.2)	38(4.6)	187	22	22
第３節	307	280(91.2)	60(21.4)	212(75.7)	8(2.9)	60	4	4
第４節	734	666(90.7)	153(23.0)	494(74.2)	19(2.9)	157	7	8
第５節	245	227(92.7)	52(22.9)	168(74.0)	7(3.1)	40	12	7
第６節	921	857(93.1)	189(22.1)	636(74.2)	32(3.7)	171	27	23
第７節	682	614(90.0)	91(14.8)	516(84.0)	7(1.1)	88	8	2
第８節	1,740	1,581(90.9)	232(14.7)	1,330(84.1)	19(1.2)	232	12	7
合計	6,407	5,856(91.4)	1,425(24.3)	4,291(73.3)	140(2.4)	1,338	145	82

表四　高木『訳解』の文節と振り仮名※比率Ⅰは文節数、比率Ⅱは漢字表記語に占める割合を(%)で表す

所在	文節数	漢字表記語 (比率Ⅰ)	振り仮名読み (比率Ⅱ)	補助読み (比率Ⅱ)	交じり読み (比率Ⅱ)	右側振り仮名	左右両側振り仮名	左側振り仮名
序	285	250(87.7)	223(89.2)	25(10.0)	2(0.8)	225	0	0
例言	443	425(95.9)	264(62.1)	152(35.8)	9(2.1)	271	2	0
第１節	342	317(92.7)	246(77.6)	68(21.5)	3(0.9)	183	66	0
第２節	883	812(92.0)	649(79.9)	129(15.9)	34(4.2)	638	44	1
第３節	322	302(93.8)	251(83.1)	34(11.3)	17(5.6)	267	1	0
第４節	765	702(91.8)	578(82.3)	109(15.5)	15(2.1)	589	4	0
第５節	252	232(92.1)	173(74.6)	47(20.3)	12(5.2)	182	2	1
第６節	1,008	929(92.2)	823(88.6)	90(9.7)	16(1.7)	832	7	0
第７節	710	649(91.4)	556(85.7)	85(13.1)	8(1.2)	562	2	0
第８節	1,847	1,695(91.8)	1,538(90.7)	135(8.0)	22(1.3)	1,559	1	0
合計	6,857	6,313(92.1)	5,301(84.0)	874(13.8)	138(2.2)	5,308	129	2

右側振り仮名は難字、難語だけではなく、代名詞や連体詞のような語にも振り仮名を付し、重複の語にも大量に付している。

二種の『訳解』の基本的な振り仮名はともに右側振り仮名である。左右両側振り仮名は少数あり、左側振り仮名は非常に少ない。

三　右側振り仮名の音・訓読みの統計

二種の『訳解』に現れた振り仮名のうち、その多くを占める右側振り仮名の音・訓読みの数を次の**表五**と**表六**に示す。音・訓読みは各節の右側振り仮名の占める割合を括弧内にパーセントで示す。

二種の『訳解』とも、音・訓読みと少数の例外がある。音読みについては、序において両者の差が一番小さいが、第5節のような差が大きい節もある。

訓読みは、高木『訳解』には石黒『訳解』に比べ、非常に多く見られる。石黒『訳解』では序、例言には漢字表記語の半分以上に訓読みの振り仮名が付される。一方で正文に入ると、音読みが約六割に及ぶ。音・訓読み以外の音訳語と音訓読みの混じり語はわずか五語である。高木『訳解』では訓読みが平均で七割以上を占める。訓読みを中心に振り仮名を付すことが見られる。また、音訳語の二語以外に、音訓読みの混じり語が石黒『訳解』より多く見られる。

つまり、序では二種とも訓読みに片寄るが、正文では石黒『訳解』は音読み、高木『訳解』は訓読みに片寄るという特徴が見られる。

表五　石黒『訳解』の音・訓読み

	音	訓	その他	合計
序	52(38.2)	83(61.0)	1(0.7)	136
例言	89(46.8)	101(53.2)	0(0.0)	190
第1節	51(66.2)	26(33.8)	0(0.0)	77
第2節	107(57.2)	78(41.7)	2(1.1)	187
第3節	39(65.0)	20(33.3)	1(1.7)	60
第4節	102(65.0)	55(35.0)	0(0.0)	157
第5節	30(75.0)	10(25.0)	0(0.0)	40
第6節	100(58.5)	71(41.5)	0(0.0)	171
第7節	57(64.8)	31(35.2)	0(0.0)	88
第8節	138(59.5)	93(40.1)	1(0.4)	232
合計	765(57.2)	568(42.5)	5(0.4)	1,338

表六　高木『訳解』の音・訓読み

音	訓	その他	合計
55(24.4)	167(74.2)	3(1.3)	225
79(29.2)	186(68.6)	6(2.2)	271
58(31.7)	120(65.6)	5(2.7)	183
226(35.4)	399(62.5)	13(2.0)	638
31(11.6)	217(81.3)	19(7.1)	267
74(12.6)	494(83.9)	21(3.6)	589
21(11.5)	158(86.8)	3(1.6)	182
156(18.8)	652(78.4)	24(2.9)	832
129(23.0)	405(72.1)	28(5.0)	562
301(19.3)	1,204(77.2)	54(3.5)	1,559
1,130(21.3)	4,002(75.4)	176(3.3)	5,308

四　右側振り仮名の品詞統計

右側振り仮名の品詞を集計し、その結果を次の**表七**と**表八**に示す。さらに、音読みと訓読みの漢字表記語双方（音訓読みの混じり語と音訳語を除き）の品詞を調べ、次の**表九**と**表十**にまとめる。各品詞の比率は、**表七**と**表八**では合計**表九**と**表十**では音訓合計に占める割合を括弧内にパーセントで示す。

二種の『訳解』とも、各品詞では、名詞が一番多く、ついで動詞が多い。音読みの品詞も両者ともに名詞が一番多く、次に動詞が多い。一方、訓読みでは、両者とも、名詞、動詞、副詞が多いが、量の多寡において名詞と動詞の順序が異なる。石黒『訳解』は動詞、名詞の順に多いが、高木『訳解』は名詞、動詞の順に多い。

表七　石黒『訳解』の品詞の内訳　　※形容詞：形容動詞を含む

	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計
序	55(40.7)	41(30.4)	11(8.1)	14(10.4)	14(10.4)	135
例言	84(44.2)	64(33.7)	11(5.8)	26(13.7)	5(2.6)	190
第１節	45(58.4)	23(29.9)	5(6.5)	4(5.2)	0(0.0)	77
第２節	89(48.1)	59(31.9)	23(12.4)	13(7.0)	1(0.5)	185
第３節	37(62.7)	18(30.5)	2(3.4)	2(3.4)	0(0.0)	59
第４節	75(47.8)	62(39.5)	9(5.7)	8(5.1)	3(1.9)	157
第５節	25(62.5)	10(25.0)	5(12.5)	0(0.0)	0(0.0)	40
第６節	96(56.1)	49(28.7)	15(8.8)	9(5.3)	2(1.2)	171
第７節	36(40.9)	45(51.1)	4(4.5)	3(3.4)	0(0.0)	88
第８節	103(44.6)	82(35.5)	17(7.4)	20(8.7)	9(3.9)	231
合計	645(48.4)	453(34.0)	102(7.7)	99(7.4)	34(2.6)	1,333

表八　高木『訳解』の品詞の内訳　　※形容詞：形容動詞を含む

	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計
序	90(40.5)	57(25.7)	16(7.2)	20(9.0)	39(17.6)	222
例言	101(38.1)	88(33.2)	18(6.8)	38(14.3)	20(7.5)	265
第１節	79(44.4)	46(25.8)	12(6.7)	19(10.7)	22(12.4)	178
第２節	337(53.9)	156(25.0)	30(4.8)	44(7.0)	58(9.3)	625
第３節	142(57.3)	59(23.8)	14(5.6)	8(3.2)	25(10.1)	248
第４節	265(46.7)	155(27.3)	38(6.7)	44(7.7)	66(11.6)	568
第５節	102(57.0)	40(22.3)	16(8.9)	10(5.6)	11(6.1)	179
第６節	413(51.1)	197(24.4)	62(7.7)	51(6.3)	85(10.5)	808
第７節	233(43.6)	165(30.9)	29(5.4)	44(8.2)	63(11.8)	534
第８節	673(44.7)	423(28.1)	77(5.1)	140(9.3)	192(12.8)	1,505
合計	2,435(47.4)	1,386(27.0)	312(6.1)	418(8.1)	581(11.3)	5,132

表九　石黒『訳解』の音・訓読みの品詞の内訳　　※形容詞：形容動詞を含む

	音読み						訓読み						音訓
	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計	合計
序	43(31.9)	7(5.2)	0(0.0)	0(0.0)	2(1.5)	52(38.5)	12(8.9)	34(25.2)	11(8.1)	14(10.4)	12(8.9)	83(61.5)	135
例言	66(34.7)	17(8.9)	4(2.1)	2(1.1)	0(0.0)	89(46.8)	18(9.5)	47(24.7)	7(3.7)	24(12.6)	5(2.6)	101(53.2)	190
第１節	37(48.1)	13(16.9)	1(1.3)	0(0.0)	0(0.0)	51(66.2)	8(10.4)	10(13.0)	4(5.2)	4(5.2)	0(0.0)	26(33.8)	77
第２節	73(39.5)	24(13.0)	10(5.4)	0(0.0)	0(0.0)	107(57.8)	16(8.6)	35(18.9)	13(7.0)	13(7.0)	1(0.5)	78(42.2)	185
第３節	31(52.5)	8(13.6)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	39(66.1)	6(10.2)	10(16.9)	2(3.4)	2(3.4)	0(0.0)	20(33.9)	59
第４節	62(39.5)	37(23.6)	3(1.9)	0(0.0)	0(0.0)	102(65.0)	13(8.3)	25(15.9)	6(3.8)	8(5.1)	3(1.9)	55(35.0)	157
第５節	23(57.5)	5(12.5)	2(5.0)	0(0.0)	0(0.0)	30(75.0)	2(5.0)	5(12.5)	3(7.5)	0(0.0)	0(0.0)	10(25.0)	40
第６節	75(43.9)	23(13.5)	2(1.2)	0(0.0)	0(0.0)	100(58.5)	21(12.3)	26(15.2)	13(7.6)	9(5.3)	2(1.2)	71(41.5)	171
第７節	34(38.6)	21(23.9)	2(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	57(64.8)	2(2.3)	24(27.3)	2(2.3)	3(3.4)	0(0.0)	31(35.2)	88
第８節	86(37.2)	41(17.7)	11(4.8)	0(0.0)	0(0.0)	138(59.7)	17(7.4)	41(17.7)	6(2.6)	20(8.7)	9(3.9)	93(40.3)	231
合計	530(39.8)	196(14.7)	35(2.6)	2(0.2)	2 (0.2)	765(57.4)	115(8.6)	257(19.3)	67(5.0)	97(7.3)	32(2.4)	568(42.6)	1,333

表十　高木『訳解』の音・訓読みの品詞の内訳　　※形容詞：形容動詞を含む

	音読み						訓読み						音訓
	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計	名詞	動詞	形容詞	副詞	その他	合計	合計
序	49(22.1)	6(2.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	55(24.8)	41(18.5)	51(23.0)	16(7.2)	20(9.0)	39(17.6)	167(75.2)	222
例言	61(23.0)	15(5.7)	2(0.8)	1(0.4)	0(0.0)	79(29.8)	40(15.1)	73(27.5)	16(6.0)	37(14.0)	20(7.5)	186(70.2)	265
第１節	49(27.5)	8(4.5)	0(0.0)	1(0.6)	0(0.0)	58(32.6)	30(16.9)	38(21.3)	12(6.7)	18(10.1)	22(12.4)	120(67.4)	178
第２節	181(29.0)	37(5.9)	5(0.8)	3(0.5)	0(0.0)	226(36.2)	156(25.0)	119(19.0)	25(4.0)	41(6.6)	58(9.3)	399(63.8)	625
第３節	25(10.1)	6(2.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	31(12.5)	117(47.2)	53(21.4)	14(5.6)	8(3.2)	25(10.1)	217(87.5)	248
第４節	55(9.7)	14(2.5)	4(0.7)	1(0.2)	0(0.0)	74(13.0)	210(37.0)	141(24.8)	34(6.0)	43(7.6)	66(11.6)	494(87.0)	568
第５節	14(7.8)	7(3.9)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	21(11.7)	88(49.2)	33(18.4)	16(8.9)	10(5.6)	11(6.1)	158(88.3)	179
第６節	118(14.6)	25(3.1)	6(0.7)	7(0.9)	0(0.0)	156(19.3)	295(36.5)	172(21.3)	56(6.9)	44(5.4)	85(10.5)	652(80.7)	808
第７節	105(19.7)	20(3.7)	3(0.6)	1(0.2)	0(0.0)	129(24.2)	128(24.0)	145(27.2)	26(4.9)	43(8.1)	63(11.8)	405(75.8)	534
第８節	228(15.1)	65(4.3)	4(0.3)	3(0.2)	1(0.1)	301(20.0)	445(29.6)	358(23.8)	73(4.9)	137(9.1)	191 (12.7)	1,204(80.0)	1,505
合計	885	203	24	17	1	1,130	1,550	1,183	288	401	580	4,002	5,132
	(17.2)	(4.0)	(0.5)	(0.3)	(0.0)	(22.0)	(30.2)	(23.1)	(5.6)	(7.8)	(11.3)	(78.0)	

表九と**表十**とを比べると、二種の『訳解』で訓読みは副詞、形容詞・形容動詞を除き、名詞、動詞、その他（接続詞）について、品詞構成比率の差が明らかである。音読みも訓読みほど顕著ではないが、品詞構成比率に差がある。音読みの場合、特に名詞と動詞について品詞構成比率の差が大きい。

五　左右両側振り仮名と左側振り仮名

前述の通り、両書において右側振り仮名が基本である。また、ともに左右両側振り仮名があるという共通点がある。そこで、次に二種の『訳解』の序、例言と全三九節の正文にある左右両側振り仮名と左側振り仮名の数を調べた（**表一一**）。石黒『訳解』には高木『訳解』に比べ、左右両側振り仮名と左側振り仮名が非常に多い。左右両側振り仮名の分布について概観すると、石黒『訳解』では第16節のみに一つもないものの、高木『訳解』では半分以上の節に一つもない。また、高木『訳解』では左右両側振り仮名は第1節と第2節に集中し、計一一〇語ある。一方、石黒『訳解』では第1節と第2節において、左右両側振り仮名が付されているのは三三語しかない。

高木『訳解』は、**表六**に示すように、訓読みの比率が第3節

表一一　二種の『訳解』の左右両側振り仮名と左側振り仮名※両：左右両側振り仮名、左：左側振り仮名

	石黒		高木			石黒		高木			石黒		高木	
所在	両	左	両	左	所在	両	左	両	左	所在	両	左	両	左
序	18	0	0	0	第13節	16	1	2	0	第27節	5	0	0	0
例言	24	0	2	0	第14節	13	3	0	0	第28節	4	0	0	0
第1節	11	9	66	0	第15節	5	0	0	0	第29節	1	0	0	0
第2節	22	22	44	1	第16節	0	0	0	0	第30節	2	0	0	0
第3節	4	4	1	0	第17節	4	0	1	0	第31節	5	0	0	0
第4節	7	8	4	0	第18節	3	0	0	0	第32節	1	0	0	0
第5節	12	7	2	1	第19節	2	0	0	0	第33節	4	0	0	0
第6節	27	23	7	0	第20節	5	0	0	0	第34節	5	0	0	0
第7節	8	2	2	0	第21節	4	4	2	0	第35節	6	0	0	0
第8節	12	7	1	0	第22節	4	0	0	0	第36節	3	1	0	0
第9節	11	15	0	0	第23節	10	1	1	0	第37節	2	0	0	0
第10節	8	0	0	0	第24節	9	0	0	0	第38節	6	1	0	0
第11節	15	4	0	0	第25節	1	0	0	0	第39節	1	0	0	0
第12節	33	3	4	0	第26節	26	1	3	0	**合計**	359	116	142	2

以降が第1節と第2節より上がっている。したがって、音読みは第3節以降で減少している。また、**表三**の左右両側振り仮名が第1節と第2節に集中していることから見ると、高木『訳解』の振り仮名を付す方針が変わったことがわかる。この方針により、もともと左側にあるはずの訓読みが右側に付され、訓読みを大量に生み出している。さらに、**例三**「反展(ソリノビ)テ」のように振り仮名は地の文に滑らかに続くが、漢字には一種の「振り漢字」と呼ぶべき用法もある(注三)。これは、高木『訳解』の訳述方法の変更に伴い、振り仮名の付け方も変化した結果であると考えられる。

ここで、両書にある左右両側振り仮名の特徴について具体例を示しながら述べる。**例二**「現露シ」の左右両側振り仮名では、石黒『訳解』は右に「ケンロ」、左に「アラハレ」を付す。高木『訳解』は右に「ゲンロ」、左に「アラハレ」を付す。両書において、このような同じ漢字表記語に左右両側振り仮名が付される例はわずか一六語である。つまり、石黒『訳解』と高木『訳解』では難字・難語を判断する基準に非常に大きな相違があるということである。また、同じ漢字表記語であっても、右側の音読みが同じで、左側の振り仮名が異なるものがほとんどである。しかし、「聒顙」のように、石黒『訳解』には「カツキ・ヲロカ」、高木『訳解』には「カツクワイ・ミミシヒウナタル」を付すという例外がある。「顙」について、『標註訂正康熙字典』によれば、『広韻』『集韻』に「魚既切音毅」の音は『玉篇』に「痴顙不聰明也」という意味で載せてある。また、『広韻』『集韻』に「五怪切音聵義同」とあるということである。すなわち、『康熙字典』では音「キ」と音「クワイ」の両方は同じく「痴顙不聰明也」の意味である。しかし、なぜ高木『訳解』と石黒『訳解』の解釈が異なるのか問題がある。まず、「聒」の意味を見よう。「聒」について『康熙字典』では『集韻』牛轄切苅音鎋『廣韻』聒顙無所聞也」のように解釈している。石黒『訳解』はこのうち「顙」の意味をとり、高木『訳解』は「聒」の「みみしい」の意味をとっているのではないかと推測される。また、「聒顙」の前後の文脈を見ると、高木『訳解』の「みみしい」の意味が一致していることがわかった。高木『訳解』は文脈を考え、相応しい意味の振り仮名を付したのではないかと考えられる。

以上より、両書の左右両側振り仮名は右側が音読み、左側が訓読みを原則とすることがわかった。しかし、例外もある。石黒『訳解』には次の例がある。（「・カナ」は左側振り仮名を示す）

① 優伶　イウレイ・ガクニン　（北大本石黒『訳解』巻一　十一オ）

② 声価　セイカ・ヒヤウバン　（北大本石黒『訳解』巻二　二十ウ）

③ 宇宙　ウチウ・セカイ　（北大本石黒『訳解』巻三　九オ）

④　寒暑鍼　カンショシン・カンダンケイ
（北大本石黒『訳解』巻三　十八オ）

⑤　穏婆　オンハ・サンバ（北大本石黒『訳解』巻三　三一ウ）

①から⑤までの漢字表記語は、右側に音読み、左側に同義の別の音読みが示されている。左側の振り仮名で表す漢語はすでに社会に定着し通じやすかった一般語であると思われる。①と⑤は漢字表記語が日本語に存在しないため、当時の人々にわかりやすい同義語で解釈している。②③④は漢字表記語と左側の漢語は両方存在しているが、左側の振り仮名で示した漢語の役割が異なる。

②について、明治期に両方の音が存在することは『日国』で確認できる。「評判」で「声価」を解釈することは当時漢語「評判」が「声価」より通じやすかったことを示している。

③について、『日国』の「宇宙」に関する語誌には「中世になると、通俗辞書の類で『宇宙』にウチウの読みと共に、オホゾラ・アメノシタ・アメガシタなどの訓が付けられるが、『日葡辞書』に「文書語」とあるように、まだ日常的な語ではなかったと思われる」と記述されている。「セカイ」で「宇宙」を説明する理由としては明治初期にも「宇宙」が一般語ではなかったからと考えられる。

④について、「寒暖計」は江戸末期にオランダ語 Hygrometer の訳語として現れ、のちに幕末期に英語の Thermometer の訳語となる。筆者の調査によれば、明治初期の物理教科書を見ると、「寒暑針（鍼）」と「寒暖計」はどちらも世間一般に使われていた語であるが、「寒暖計」の方が圧倒的に多用されていたことがわかった(注四)。石黒『訳解』において、左側振り仮名「カンダンケイ」を付して、「寒暑鍼」を解釈するのは「カンショシン」より一般的であったことを反映していると言える。

一方、高木『訳解』には、左右両側振り仮名に次のような例がある。

①　縷述　ルジユツ・一一イトノ如クノブ
（国会本高木『訳解』例言　二ウ）

②　字典　シテン・コウキジテン
（国会本高木『訳解』巻一　二オ）

③　血管　ケツクハン・チノクダ
（国会本高木『訳解』巻一　二ウ）

④　始生　シセイ・シユツセウ
（国会本高木『訳解』巻一　三ウ）

①は左側の振り仮名が句の形で、「縷述」の意味を説明する。特に「縷」

字について細かに説明する。②はどんな「字典」であるのかを説明する。③は左側振り仮名で各漢字の訓読みが示されている。④は同義語の音読みを付す。以上の例が示すように、左側の振り仮名は多様で、難字や難語を説明し、両『訳解』の文章で重要な役割を果していると言える。

以上のことから、両書にある左右両側振り仮名を通して、明治期の漢字表記語の使用状況とその定着を推測できると考えられる。振り仮名と和語・漢語との関係の一端を窺う資料として、今後も調査したい。

第四節　訳述方法の差異による振り仮名の特徴差

第二章では、和刻本『全体新論』と二種の『訳解』の序と本文の一部とを対照した。その結果、両書の訳述方法に差異が存在することがわかった。

石黒『訳解』は、和刻本『全体新論』の訓点に基づいた訓読文である。市來（二〇〇八）の指摘するように、書き下し文は「原文漢字を保存する」という点で、「中間段階の翻訳文」である。

一方、高木『訳解』は原文の書き下しにとどまらず、『全体新論』の原文の内容を展開した漢文訓読調の文体になっている。第二章の**例二**のように『全体新論』の原本にない語を書き加えており、**例三**のように原本にある語を別の語に変更を行っており、これらの変更を通して訓読文をわかりやすくしている。これは現代日本語翻訳の先駆となり、外国語を「自言語」で解釈する広義の翻訳と言えるだろう。

つまり、両『訳解』は翻訳方法が異なるだけでなく、採用した文体にも違いが見られるのである。石黒『訳解』が漢文訓読文であるのに対して、高木『訳解』は新たな翻訳文を模索しようとするものであると考えられる。

このように、ほぼ同時期に出版された二種の『訳解』はその訳述方法に違いがある。石黒『訳解』は漢文訓読文であるのに対して、高木『訳解』は漢文訓読にとどまらず、語レベルの翻訳もしており、単なる漢文訓読文とは異なる。この違いにより、両書の振り仮名の付け方にも相違が見られる。両書の共通点と相違点をまとめると、次の通りである。

（1）　石黒『訳解』は音読みに片寄って振り仮名を付すが、高木『訳解』は訓読みに片寄って振り仮名を付す。

（2）　石黒『訳解』の音読みの品詞の量は名詞、動詞の順、訓読みは動詞、名詞、副詞の順に多い。高木『訳解』の音読みは名詞、動詞の順に多く、訓読みは名詞、動詞、副詞の順に多い。訓読みの方に品詞構成比率に差が顕著であるが、音読みでも品詞構成比率に差はある。

（3）　二種の『訳解』では共通して難字、難語の左右両側に振り仮名を付し、右に音読み、左に訓読みの語や句で付す。しかし、高木『訳解』の第1節と第2節では左右両側振り仮名が大量に付されるが、第3節以降、そのほとんどが右側振り仮名に統一されている。本来左側振り仮名は訓読みを示すが、この変更により、訓読みの振り仮名もすべて右側に付されている。

第五節　まとめ

以上、両書の訳述方法の差から振り仮名の特徴と差異を分析してきた。石黒『訳解』では振り仮名はすべて付されているのではなく、必要な部分にのみ付される。ところが、高木『訳解』に振り仮名が付されていないものは非常に少なく、ほとんどの漢字表記語の読み方が振り仮名を通してわかるようになっている。結果として、高木『訳解』は振り仮名が多種多様であるため、飛田（一九七三）の指摘するように、近代語を考察する際に有効な資料として使うことができると言えよう。

本章では全文データベースの構築を通して、振り仮名の量的調査を行った。そして、これらのデータを使い、二種の『訳解』の振り仮名の特徴差についての分析を試みた。

一方、振り仮名は漢字音すなわち漢音と呉音の実態を反映する資料としても有益であるため、次章では振り仮名が付された漢字音の分類を通して、明治初期における漢音と呉音の揺れ状態を考察する。

【注】

（注一）　データベース構築の基本方法は指導教員池田証壽先生の言語情報学特殊講義資料によるものである。希望のデータベースに合わせて修正したところがある。また、mojikiri プログラムは指導教員池田証壽先生にいただいたプログラムである。コマンドプロンプト上で操作すると、文節切りの作業ができる。

（注二）　本論文では漢字で表記されている語を「漢字表記語」と定義する。語種と漢字の字数に限らず、漢字が含まれる語をすべて「漢字表記語」とする。

（注三）　「振り漢字」について、石井（二〇一二）は「振り漢字というのは、本行部分のひらがなに対し、右ないし左につけられた漢字のことをいう」と述べている。また、「振り漢字も振り仮名の一つのバリエーションとして扱うことにする」とも指摘している。「反展（ソリノヒ）テ」の例について、振り仮名「ソリノヒ」と送り仮名「テ」は地の文（本行部分）になって、「反展」は付けられた漢字のようになる。

（注四）　筆者の二〇一一年度の修士論文（「明治期における近代漢語―物理教科書に現れた学術漢語を中心に―」〈北海道教育大学〉）において、「カンダンケイ」について物理教科書の使用状況を調べた。『日本国語大辞典』（第二版）の「寒暖計」に関する語誌を見ると、英語の Thermometer の訳語として、近世末期から明治前期にかけて「験温器（管・儀）」「寒暑規（鍼・針・表・計）」「寒暖計（器）」「熱計」などさまざまな語が造られたと記述されている。『物理階梯』では、「験温器ハ大氣及ヒ他物ノ温度ヲ験スルモノニシテ（中略）以テ寒暖ノ度ヲ定ム、故ニ世俗之ヲ寒暑鍼ト名ケ、又寒暖計ト呼ヒ」と述べる。調べた①～⑨の九種の物理教科書の中で、『博物新編訳解』では「寒暖針」に「カンダンケイ」と振り仮名が付される。それ以外の八種の物理教科書に「寒暖計」が用いられている。

①『訓蒙窮理図解』　福沢諭吉著　一八六八年
②『博物新編訳解』　ホブソン著　大森秀三訳　一八六八年～一八七〇年
③『物理階梯』　片山淳吉訳編　一八七二年
④『物理小誌』　宇田川準一訳編　一八八一年
⑤『小学校生徒用物理書』　後藤牧太他著　一八八五年
⑥『小学理科書』　小野太郎著　一八八七年
⑦『小学理科新書　甲種』　学海指針社編　一八九二年
⑧『小学理科教科書』　棚橋源太郎・樋口勘次郎著　一九〇〇年
⑨『尋常小学理科書』　一九一〇年

第五章　『全体新論訳解』二種の漢字音

第一節　明治初期の漢字音に関する先行研究

二種の『訳解』に振り仮名が付されるのは共通しており、第四章では振り仮名の特徴差を分析した。両書の振り仮名は漢字の発音を表しており、振り仮名を通して漢字音を考察することができる。すでに、第二章では二種の『訳解』の言語学的資料価値を紹介する際に、両書に同じ漢語に異なる漢字音の振り仮名が付される例を挙げている。たとえば、「結成」を石黒『訳解』ではケツセイ、高木『訳解』ではケツジヤウと付している。このような同じ漢字に異なる漢字音を付す例は多数存在している。

現在の漢語は一つの音で読まれ固定されることがほとんどである。しかし、明治時代の漢語は現在通用の語と比べ、同一漢字で構成される漢語が同じ意味を表すか否かと関係なく、いくつかの異なる音が併存することが多かった。漢字音の併存は規範のない揺れ状態を示している。その後、漢字音は漢音から呉音へ、呉音から漢音への交替が生じた。この揺れと交替は明治期の前半に珍しくない現象であることが先行研究の指摘からわかるようになった。

近世以降、明治期の漢字音の交替については、佐藤（一九六二）、飛田（一九六八）と、松井栄一（一九九三）の研究成果が挙げられる。佐藤（一九六二）は明治以降にもかなり多くの漢語に語形変化が見られ、漢音呉音の移動によるもの、連濁の変化によるもの、音便の退化によるもののあることを指摘する。この研究成果を受け継ぎ、飛田（一九六八）は明治期一四種類と大正期四種類の辞書類を対象に、その中の漢字音における漢音呉音の交替を考察している。交替としては、呉音から漢音への交替は漢音から呉音への交替より圧倒的に多く、しかもこの現象は明治二〇年代前後に多く生じていたことが明らかにされた。漢字音の交替現象を解明しようとする松井（一九九三）の研究も挙げられる。飛田（一九六八）は辞書類の見出し語を対象にしたが、松井（一九九三）は明治六年（一八七三）から明治二八年（一八九五）までに出版された文学作品三八作品に現れた漢字音と明治二〇年前後の辞書の見出し語と対照し、漢字音の交替が辞書の見出しにどのように反映されるかについて論じている。

また、明治初期の漢語辞書には一つの漢語に漢音と呉音が併存するという現象を考察するのは松井利彦（一九六九）である。資料としては漢語辞書以外に『太政官日誌』も扱っている。まず、『太政官日誌』には二六語の漢語に漢音と呉音との両方の漢字音が併記され、明治初期における漢字音は統一的・固定的でなかったことを明らかにしている。また、

慶応四年（一八六八）に出版された『新令字解』と明治に出版された同一系統の三種類の漢語辞書を比較し、学問的な改まった音である漢音、通俗的な音である呉音というように位相的に区別していたことと、漢音と呉音が文体の違いによって使い分けられていたことを指摘している。さらに、松井（二〇〇二）も文体要素から漢音と呉音の位相的な区別を論じている。

漢字音の揺れから定着への漢字音の動きについては田島（一九九八）の研究が挙げられる。『政治小説雪中梅』の一作品を対象に、その初版と訂正増補版を資料としている。初版における漢字音の揺れ、初版と訂正増補版における漢字音の異同から漢字音の揺れから定着への実態を考察し、一作品を対象に明治二〇年代前後に漢字音の交替が急激に生じた時期であったことを明らかにした。特に、揺れが生じた過程を次のように述べている。

① 位相を異にして以前から使用されていた二音が、位相の区別なく併用されるようになった。

② 以前は一方の音でしか使用されていなかったものが、新しく別の音でも読まれるようになった。

③ 新しく使用されるようになった漢語であるために、漢字音が決っておらず複数の音で読まれていた。

また、②はさらに次の二つの場合に分けていた。

a 以前から使用されていた音がそのまま定着した。新しい音は漢語の流行・氾濫によって一時的に出現したに過ぎない。

b 新しく出現した音が定着した。併用期は、漢字音交替の重要な時期にあたる。

この田島（一九九八）において古語と新語の観点から、その漢字音の定着について論じている点は本研究と関係深い。

以上の研究は明治時代には漢字音の揺れや漢音と呉音の交替が生じたことを明らかにした。漢音と呉音の位相差と文体の差異による揺れの現象を文芸作品や字典類、特に漢語辞典類において確認できた。さらに漢字音の揺れから定着までの過程は併用や競合もあって均一ではなかったことが明らかとなった。このように、明治初期における漢字音の研究成果が先学によって蓄積されてきた。

前述したように、明治期は日本が近代化への道を歩み始め、積極的に西洋化を推進した時代である。この近代化にともない日本語にも変化が

もたらされた。その結果、明治期には各分野特に技術や文化などに関する資料が多く生み出された。そのような専門分野の資料に対する漢字音の研究はまだ十分になされていないと考えられる。明治期には新漢語が数多く生じたので、それに対してどんな漢字音を与えたのかについて検討する必要がある。

よって、本章は二種の『訳解』を対象に漢字音の特徴を分析する。その理由は二つある。一つは資料の性格が特殊であるからである。二種の『訳解』は漢訳洋書『全体新論』の和訳書であるが、石黒『訳解』は漢文訓読文であり、高木『訳解』は漢文訓読調の文体であると言える。もう一つは両書には振り仮名が数多く付されているからである。振り仮名は漢字音研究に重要な手掛かりとなる。明治期に専門術語集が数多く出版されたが、読み方が示されていないものがほとんどである。『全体新論訳解』のような和訳書には漢字の音が示されるので、新語にどんな漢字音が与えられたのかについて考察する価値があると考えられる。

第二節　『全体新論訳解』二種の異なる漢字音の収集

前章（第三章）における振り仮名の抽出作業と両書全文の索引の作成に従い、漢字音を検索することは可能である。そこで、本章では両書に見られる両書において不一致なものを抽出し考察する。

一　収集の方法

まず、石黒『訳解』と高木『訳解』の両書における同一漢語の内に現れる二つ以上の漢字音を持つ漢字を収集する。また、全体の漢字音を考察するため、その漢字で構成されるすべての漢語を集める。ただし、清濁による漢音・呉音の違いは確定しにくいことが多いため除外する。また、両書の歴史的仮名遣いは確定できないものが多数ある。たとえば、「労」の漢音は「ラウ」、呉音は「ロウ」のような例がある。これらの例を除外する。

漢字音の判断基準は佐藤進ほか編『漢辞海』による。佐々木（二〇一一）では『漢辞海』は「日本の古文献に記入されている漢字音による実証的な方法を採る」と述べている。ただし、「残存資料から、掲出字の漢音を見出せないものも存する」と指摘している。これを考え、諸橋轍次著『大漢和辞典』を参考として使うことにする。呉音については、小倉肇著『日本呉音の研究　資料編』を参照する（注二）。

収集した漢字音は漢音と呉音に揺れがあるものとそれ以外のものを二部分に分けて次の表にまとめる。

二　収集の結果

次の表に現れる漢字の配列は部首順に従い、用例の配列は出現順に従うことにする。漢語に付ける標記について、同書に異なる漢字音を持つものに「内側」のように「文字の網かけ」をつける。両書に一方が漢音で、他方が呉音のものに「人類」のように「囲み線」をつける。以上二種の状況が現れる場合は「内側」のようにつける。また、一字語については、できるだけ前接部・後接部を付して括弧に示す。

表一　漢語と呉音の揺れ

漢字			
漢字音		石黒『訳解』	高木『訳解』
人	漢音ジン	庸人、瞳人、人目、肥人、痩人、聾人、残人、全人、人類、人性、人霊、貧人、華人、壮人、常人、国人	人身、婦人、人骨、古人、洋人、老人、仁人、貧人、人命、今人
	呉音ニン	人形、人中	人形、人頭、人畜、人類、女人、本人、全人、人望、千万人、病人、数人、他人
会	漢音クワイ	廻血会管、省会	会合、機会、会厭
	呉音エ	会得、会厭	会得

漢字	内		力		化		右		和		妄	
漢字音	漢音ダイ	呉音ナイ	漢音リョク	呉音リキ	漢音クワ	呉音ケ	漢音イウ	呉音ウ	漢音クワ	呉音ワ	漢音バウ	呉音マウ
石黒『訳解』	窩内、盤内、内側	内層、額内、内側、内嚢、器内、内旁、胞内、内傷、内腎、内底、内水、内皮、蒂内、内膜	目力、餘力		造化、化工、消化、化ス、搾化、過化、化醇、化育		右胯骨、左右、右肝	右房、右上房	和勻、調和、中和、滾和		妄行、妄動	
高木『訳解』	碗内、内鼻孔	耳内竅、脳内、内外、図内、内傷、内腎、珠内、胎内	気力、心力	目力、餘力、精力	消化、化ス、化育、化生、変化	消化、銷化	右房		中和、和ス	滾和、和ス	妄行、妄意	

漢字	定		対		工		形		役	
	漢音テイ	呉音ヂヤウ	漢音タイ	呉音ツイ	漢音コウ	呉音ク	漢音ケイ	呉音ギヤウ	漢音エキ	呉音ヤク
石黒『訳解』	定論、定位、究定、扶定、認定、穏定、定至		校対、数対、対合、対挿、対座、対面		工夫、傭工、工芸、化工、造化工、工妙		図形、、形図、弓月形、仰甲月形、両角形、箭形、蛋形、無形、胚形、受形	人形	役	
高木『訳解』	一定、定論、穏定	定位	対坐、対面、対ス	数対、対合	工藝、工妙	工夫	形容、形式	人形、図形、形状、無形		役

漢字	性		成		文		月		望	
	漢音セイ	呉音シヤウ	漢音セイ	呉音ジヤウ	漢音ブン	呉音モン	漢音ゲツ	呉音ガツ	漢音バウ	呉音マウ
石黒『訳解』	人性、（水銀ノ）性、心性	性情	結成、砌成、造成、成丁、成孕		華文、文理、唐文、文意、文辞		弓月形、月信、月水		観望、望聞問切、望聞	
高木『訳解』	（人ノ）性	性、肉性、本性、心性、性情、性根	成長	結成、生成	下文、原文、文意、文理	文辞	数月、正月、半月、月水	月水	人望	観望

漢字	油		流		然		牙	
	漢音イウ	呉音ユ	漢音リウ	呉音ル	漢音ゼン	呉音ネン	漢音ガ	呉音ゲ
石黒『訳解』	油膩	黒油衣、黒油、膏油、油膩	流行、流佈、輸流、滙流、分流、通流		了然、自然、昏然、乍然、巉然、偶然、混然、蠢然、茫然、顕然、脱然		牙歯、上牙床、牙窩、牙閉、門牙、齦牙、大牙、乳牙、牙較、下牙床、牙	
高木『訳解』	油衣、黒油衣		流傳、流行、上流	流佈、流散	自然、蠢然、了然、巉然、雅然、悠然、攸然、脱然、混然、判然	自然、天然	歯牙、門牙、齦牙、大牙	歯牙

漢字	物		貓		百		盲		省		納	
	漢音ブツ	呉音モツ	漢音ベウ	呉音メウ	漢音ハク	呉音ヒヤク	漢音バウ	呉音マウ	漢音セイ	呉音シヤウ	漢音ダフ	呉音ナフ
石黒『訳解』	格物、万物、物像、物影、微物、物具、造物主、軟物、堅物、嫩物、肥物、鹵物、博物、死物、無物、物象、造物			貓虎				青盲、夜盲、盲	省セス、省覚、省会	粤省	出納	出納
高木『訳解』	万物、外物、物象、各物、死物、一物、数物、博物、活物、無物	他物、万物、穀物、食物	貓虎、貓、虦貓		百体	百体、百管、百度	青盲		省覚、中書省、粤省			出納

漢字	経		聞		膜		膠	
	漢音ケイ	呉音キヤウ	漢音ブン	呉音モン	漢音バク・ボ	呉音マク・モ	漢音コウ	呉音キヨウ
石黒『訳解』	（主使ノ）経、経緯、精経	難経	声聞、見聞、嗅聞、創聞、聞聴、耳聞	望聞問切	脂膜（ボ）	胞膜、膜、薄膜、眼膜、耳膜、柔膜、底膜、網膜、夾膜、脇膜、足膜、膈膜、膜沫、靭膜、筋膜、単膜、連膜、内膜	明膠、稀膠	膠涎、膠液、膠粒
高木『訳解』	経絡、（主使ノ）経、聖経、一経、書経、心経、三焦経、精経、腎経	詩経、心経、難経		創聞	脂膜、（ボ）胞膜、（ボ）胞膜、（バク）脇膜、（バク）夾膜、（バク）膈膜、（バク）	皮膜（マク）	膠液	

漢字	若		衣		解		言		語		象	
	漢音ジヤク	呉音ニヤ	漢音イ	呉音エ	漢音カイ	呉音ゲ	漢音ゲン	呉音ゴン	漢音ギヨ	呉音ゴ	漢音シヤウ	呉音ザウ
石黒『訳解』	蘭若		包衣、黒油衣、薄衣、脳筋衣、胎衣、湿衣、胞衣		分解、解開、註解、解ヲ		列言、詳言、言詞、語言、言語、一言、喩言、略言			数語、細語、語言、詞語、言語、笑語、奇語	（二十六字母ノ）象	物象
高木『訳解』	至若	蘭若	脳筋衣、黒油衣、（此ノ）衣、胎衣、明衣	骨衣、油衣	註解、解ス	解ス	言語、語言、喩言	言語	言語	数語、（断ヘ続キ）語、言語、語言、論語	物象、万象	

漢字	貪		音		頸		頭		食	
漢字音	漢音タン	呉音トン	漢音イン	呉音オン	漢音ケイ	呉音キヤウ	漢音トウ	呉音ヅ	漢音ショク	呉音ジキ
石黒『訳解』	貪饕	貪人、貪欲、貪得、貪ト	佳音	反切音、音容	頸骨、頸膊、頸窩、馬頸、頸		犂頭骨、杵頭、気管頭、眉頭、両頭、乳頭	頭骨、頭顱、頭、頭脳	攫食、採食、蠶食、食、食後、食喉、食管	
高木『訳解』	貪饕、貪人	貪欲、貪ト	声音	声音、福音、音	頸窩、杵頸、頸	頸骨	頭身、頭骨、犂頭、杵頭、頭顱、両頭、亀頭	頭骨、頭脳、頭目、頭上、頭痛、頭底、頭頂、人頭、	飲食、食喉、食、食後、蠶食、食物、肉食	飲食

表二　漢音と呉音以外の揺れ

漢字	作		促		保		参		夫		差		抖	
漢字音	漢・呉サク	漢・呉サ	呉ソク	呉音サク	漢・呉音ハウ	呉音ホ	漢・呉サン	漢シン	漢・呉フ	慣用音フウ	漢・呉サ	漢・呉シ	漢トウ	慣用音ト
石黒『訳解』		動作	短促		保護、保固、保顧		参互、参考	参差シ	工夫（コウ）			参差		抖擻
高木『訳解』	動作			短促		保護	参差サ	参差シ	農夫	工夫（ク）、夫婦	参差、差別	参差	抖擻	

漢字	掩		穢		立		聚		頴		麗	
		漢・呉アン		呉音エ		漢・呉リフ		呉シユ		漢音クワイ		漢レイ	漢・呉リ
石黒『訳解』	踏掩、遮掩		穢骨		直立、坐立行走			収聚、束聚、聚集、凝聚、濃聚、蔵聚	聒頴		附麗	
高木『訳解』			穢骨		直立		蔵聚				附麗	聒頴

以上のまとめを数字で示すと、両書に現れる同一漢語が異なる漢字音を持つ漢字は五六字あり、うち、漢音と呉音の揺れは四三字であり、約八割を占めている。そのうち、石黒『訳解』には、一字に呉音と漢音の両方が見られる例は一七字ある。漢字音が付されていない漢字は一字ある。ほかに、二二字は漢音のみ、三字は呉音のみを示している。高木『訳解』には、一字に呉音と漢音の両方が見られるのは三二字ある。ほかに、漢音のみは七字あり、呉音のみは四字ある。つまり、以上の数字から二つのことがわかる。一つは高木『訳解』には漢音と呉音の両方が見られる例は石黒『訳解』より多く、漢音と呉音の揺れは高木『訳解』の方が激しいことである。もう一つは石黒『訳解』は漢音のみが高木『訳解』より多いことである。

漢音と呉音の揺れ以外に、正音と慣用音のような揺れを生じた漢字は一三字である。ただし、漢音と呉音以外の揺れは多様であるという特色がある。たとえば、一字に二音の漢音が併存する際に、意味に「胞膜」のハウボとホウバクのような同義のものもあり、一方「聒頴」のカツクワイとカツキのように異なる意味の左側振り仮名が付されるものもある。これ以外に一字に漢音呉音の同一なものも併存する例が見られる。たとえば、「遮掩」のシヤアンの「アン」とシヤエンの「エン」はともに漢音であり呉音である。

第三節　『全体新論訳解』各書の同一漢語の異なる漢字音

本節は石黒『訳解』と高木『訳解』の同一漢語に対する漢字音を分類しその相違を考察する。

まず、両書に異なる漢字音を持つ同一漢語をまとめる。漢字音の頻度を考察するため、該当の漢語の振り仮名が現れる回数を漢字音の下の括弧に示す。「消化」のように「ショウゲ」、「セウゲ」のような異なる仮名遣いが現れる場合は一つの漢字音のみで示すが、回数は合わせて数える。また、両書の漢語を挙げる際に、もう一方の『訳解』にもある場合、その漢字音を括弧「」にカタカナで示す。用例に該当の漢語の左右両側振り仮名を括弧に（右側振り仮名・左側振り仮名）のように示す。漢字音の配列は右側に漢音、左側に呉音とする。漢音と呉音以外の揺れは**表一**の順番どおりである。

（一）　石黒『訳解』の同一漢語の異なる漢字音

①内側　タイソク（1）形チ水泡ニ似タリ鼻孔内側ノ下ニアリテ(注二)
　ナイソク（1）両核ハ下牙床ノ内側ニ在リ

②油膩　イウジ（1）若シ油膩膠涎膿血甜味アル倶ニ病溺トス
　ユシ（1）内ルルニ腌実油膩(ユシ・アブラケ)ノ物ヲ以テス

③出納　スイドウ（1）心房ノ出納ハ常ニ血アリ
　スイナフ（2）口ハ出納ノ官ト爲ス

「高木『訳解』にはスイナフ」

④遮掩　シヤアン（1）其用ハ鼻底ノ両孔ヲ遮掩（シヤアン・サヘギリオホヒ）シテ
　シヤエン（1）銭ヲシテ碗辺ニ遮掩（シヤエン・サヘキリオホフ）セシム

石黒『訳解』で同一漢語が異なる漢字音を持つものは以上のわずか四例である。そのうち、漢語と呉音の揺れを示すのは①から③までの三例である。以上の四例の読みは「スイナフ」の例を除けば一度のみ現れる。

「内側」について、「内」の漢音タイと呉音ナイの両方が石黒『訳解』と高木『訳解』に現れる。石黒『訳解』には「内」を漢音で読む漢語は三語あるが、呉音で読む漢語は一四語ある。一方、高木『訳解』には呉音で読むのは八語あるが、漢語で読むのは二例しかない。辞書類での「内」の読み方を見よう。『言海』では呉音ナイで読まれる漢語は五四語あるが、漢音ダイは「内裏」しかない。『和英語林集成』の初版には「内裏」を漢音で読む漢語はこれ一つしかないが、再版と三版はこれもなくなる。一方、呉音ナイで読む漢語は初版で二五語、再版で三二語、三版では五〇語に達している。『和英語林集成』と『言海』には呉音ナイの方に傾

斜している。このように、石黒『訳解』と高木『訳解』に「内」の字は漢音と呉音の揺れが見られるが、『和英語林集成』と『言海』のように呉音で読む場合が多いことがわかった。

（二）　高木『訳解』における同一漢字の不一致の漢字音

①消化　ショウクワ（1）其ノ他腸胃ノ消化ノ如キモ
ショウゲ（10）人ヲ養フニ次第ニ消化スルノ妙アリ
「石黒『訳解』にはショウクワ」

②和　クワ（1）物ノ生育スルニ因リテ其ノ気ノ和ヲ驗ム
ワ（3）水ニ潮ナケレハ則チ死ル気モ風ナケレハ則チ和セス

③性　セイ（3）生命ヲ養フ然レトモ漸ク行レテ漸ク其ノ性ヲ改ム
シヤウ（6）故ニ世間ニ他物ノ性肉ト同シカル可キ
「石黒『訳解』にはセイ」

④月水　ゲツスイ（1）月水ヲ通ヒ流ス
グワツスイ（1）月水ハ乃チ子宮ニ生スル
「石黒『訳解』にはゲツスイ」

⑤自然　シセン（1）未タ合サルニ久シケレハ自然ニ生合シ
ジネン（1）此レ自然ノ理ナリ惟眼モ亦タ然リ

⑥歯牙　シガ（1）将ニ歯牙ヲ出サントシテ
シゲ（1）另ニ歯牙(シゲ・ハキバ)三十二枚アリトス

⑦万物　ハンブツ（4）世界ノ萬物ニテハ人身ヲ以テ最モ神奇トス
ハンモツ（3）其ノ光ヲ透シテ万物ヲ見ル所以ノモノハ
「石黒『訳解』にはハンブツ」

⑧百体　ハクタイ（1）人身ノ百体モ血ニ頼リ以テ生キ生々トシテ
ヒヤクタイ（11）人身ノ百体ハ日ニ消ルモノ有リ

⑨心経　シンケイ（3）乃チ心経ヨリ血ノ勢ヒヲ逼シ
シンキヨウ（1）其ノ明ナル驗シナリ心経ハ君火ノ主タリ

⑩（黒）油衣　コクユウイ（2）四圍ニ黒油衣アリテ
油衣　ユウエ（1）血絡ノ黒キ油衣ソノ位ハ眼白穀ノ内ニアリ

⑪解ス　カイ（1）ソノ理云何ント問ハバ則チ予ノ能ク解スル所ニ非ズ
ゲ（1）之ヲ唐文ニ繙スレハ甚解スルコトヲ求メ難シ

⑫言語　ゲンギヨ(1) 舌ニ肉アリ四對相合フテ以テ言語飲食ヲ助ク
ゴンゴ（2）言語ヲ助ケ発ラクコレ三ツナリ
「石黒『訳解』にはゲンゴ」

⑬声音　セイイン（1）聲音ハ乃チ実處ニヨルハ更ニ傳シ
セイヲン（1）一支ハ耳内ニ入リ聲音ヲ聴クコトヲ司ル

⑭頭骨　トウコツ（2）頭部ハ則チ頭骨(トウコツ・アタマ〇)面骨ノ二者ヲ分ツ

ヅコツ（2）血脈管ニ透リテ頭骨ノ内層及ヒ脳ノ包衣ヲ護養スルナリ

「石黒『訳解』にはヅコツ」

⑮飲食　インショク（9）必ズ飲食ニ頼リテ以テ之ヲ生長サスヘシ

インジキ（2）年老ヒ衰弱ナルハ必ス飲食ニ頼リテ之ヲ培フ

⑯参差　サンサ（1）其ノ形式参差(サンサ)トシテ

シンシ（1）聯串シテ文ヲ成ス参差トシテ連貫シ

「石黒『訳解』にはシンシ」

⑰直立　チョクリウ（1）勢ヒ直立ニ非ザレバ能ハズ

チョクリツ（1）故ニ人ノ只両足ニテ直立シテ行カ如ク能ハス

「石黒『訳解』にはチョクリウ」

⑱附麗　フレイ（1）動肉ヲ輔佐シ相ヒ附麗(フレイ・ツキツキ)スル所ロ有ラシムルナリ

フリ（3）餘ノ三脇ハ則チ其ノ前端ハ并ニ附麗(フリ・ヒツツキ)スル所無シ

「石黒『訳解』にはフリ」

高木『訳解』には同一漢語に異なる漢字音を示す例は一八例ある。そのうち、①から⑮は漢語と呉音の違いである。⑯の「参差」の二文字はそれぞれ異なる漢字音を持っている。⑰の「リウ」は漢音呉音の同一なものであるが、「リツ」は慣用音である。⑱「麗」は『大漢和辞典』には一字に二音あるものである。「レイ」はその一音の漢音であるが、「リ」はもう一つの漢音呉音の同一なものである。

高木『訳解』には前掲の同一漢語の異なる漢字音を持つ一八例のうち、漢音と呉音の揺れが一五例であり、石黒『訳解』の三例より多く存在していることがわかった。使用頻度を見ると、高木『訳解』に回数の差が大きいのは「消化」「百体」と「飲食」の三語である。

「消化」は「シヨウクワ」一回のみで、「シヨウゲ」は九回と「シヨウケ」一回現れた。ほかに、「銷化」は次のような四箇所ある。

① 食物至レハ則チ津液漸ク生シテ以テ之ヲ銷化ス

② 蓋シ胃津ノ力能ク死物ヲ消化シ而シテ生物ヲ銷化スル能ハザルナリ

③ 肉食ハ其ノヤキケルモノハ焓スルモノヨリケカシ易シ

④ ソノ煎ル者ハ炒ル者ヨリ銷化シ易キナリ

「銷化」は「シヨウゲ」と読み、「消化」と同じ意味である。『和英語林集成』の初版、再版、三版と『言海』には「しょうか」があるが、

「しょうけ」「しょうげ」の音は掲出されていない。また、高木『訳解』には「化」を「ゲ」と読む漢語は「消化」と「銷化」しかない。それ以外の「化」で構成する漢語は「カ」と読む。「消化」を「ショウケ」と読むのは次に挙げる『日国』において『日葡辞書』の出典が掲載されている。

しょう-け［セウ：］【消化】『名』（「け」は「化」の呉音）「しょうか（消化）」に同じ。＊日葡辞書〔１６０３～０４〕「Xŏqe（ショウケ）。キエヘンズル。例、ショクブツヲ xŏqe（ショウケ）スル〈訳〉食物を消化する」

「化」を呉音の「ケ」と読むものが辞書類に掲出されているが、「化」を「ゲ」と読むものが管見の限りまだ見つからないのである。「ケ」を「ゲ」と濁って読んでいた可能性があると考えられる。

前述のように、高木『訳解』における「消化」と「銷化」を「ショウゲ」と読む例を除き、「化」で構成される漢語は「カ」と読んでいた例が多い。一方で、石黒『訳解』では「化」で構成される漢語はすべて「か」と読み「げ」の発音は一つもない。このように、石黒『訳解』と高木『訳解』は「化」を漢音で読む漢語が多いが、「消化」の一語に大きな違いが存する。すなわち、「消化」は石黒『訳解』は単純に漢音であるが、高木『訳解』は漢音と呉音の両方があり、呉音「ケ」の濁音「ゲ」の方が圧倒的に多く一般的に使っていたようである。明治初期の辞書類には漢音の方が多く掲出されているが、高木『訳解』が呉音に傾斜している。

また、高木『訳解』に見られる「百体」について、「ヒヤクタイ」一一回と「ハクタイ」一回が現れる。「ヒヤクタイ」は『和英語林集成』の三版に掲出されている。しかし、『言海』、『漢語字類』、『新編漢語辞林』の漢語辞典には掲出されていない。しかも「百」を「ハク」で読むのは「百体」以外に「百管」と「百度」もある。ただし、「百」で始まる漢語を「ハク」で読む漢語は以上の辞典に一つも掲出されていない。

「飲食」について、高木『訳解』には「インショク」が九回、「インジキ」が二回現れる。石黒『訳解』にはこの漢語に振り仮名が付されていない。現在「飲食」は主に「飲食街」「飲食業」「飲食税」「飲食店」など「いんしょく」で構成される複合語として一般的に使われている。しかし『日国』には「いんし」「いんしい」「いんしょく」「いんじき」「おんじき」の五つの漢字音が掲出されている。「いんしい」の語誌にこれらの漢字音の関係を述べている。

(1)インシイはインシの転訛形。「飲食」は、古くから呉音でオンジキと読まれたが、中世頃から、ほかに漢音のインショク・インシ・インシイの語形も見られるようになる。

(2)室町末頃のキリシタン文献では、主としてオンジキを掲げるものが多く、この語形が広く行なわれていたことをうかがわせるが、「落葉集」にヲンジキのほかにインシイが見え、他のキリシタン文献にもこの語形が散見されるところから、このころにはインシイとオンジキが併用されたかと思われる。

(3)一三〇六年頃成立した「聚分韻略」では、インシが飲食する物、インショクが飲食することだと説いている。しかし、室町から近世にかけて必ずしもこの区別がなされたとは言い難い。

この記述から見ると、「飲食」の漢字音は使用時期、出典資料、使用頻度、使用意味などによって併用あるいは区別して使われたことがあることがわかった。しかし、この語誌では「インジキ」を説明していないため、「インジキ」についてまだ不明である。

『和英語林集成』の初版から「インショク」が掲出されているが、「インジキ」などの語形は掲出されていない。『言海』には

おんじき　（名）　飲食　ノミモノト、クヒモノト。「百味ノー」

いんしよく　（名）　飲食　飲ムト食フト。飲物（ノミモノ）ト食物（クヒモノ）ト。

「オンジキ」と「インショク」の両語形があり、漢音＋漢音と呉音＋呉音の単純な構成となる。

『新編漢語辞林』には「インショク」と「インシ」が収録されているが、「インジキ」が見られない。『日国』には

いん・じき【飲食】『名』「いんしょく（飲食）」に同じ。＊孔雀船〔１９０６〕〈伊良子清白〉淡路にて「白晶の皿をうけ鮮（あざら）け乳を灑（そそ）ぐ 六月の飲食（インジキ）にけたたまし虹走る」

といったように「インジキ」しか見られない。明治期には「飲食」を「インジキ」で読むこともあるが、まだ数少ないことがわかった。

以上の「消化」「百体」「飲食」の三語について、現在漢音「しょうか」と呉音の「ひゃくたい」が一般的に使われている。高木『訳解』では「消化」と「百体」の二例は漢音と呉音の両方の発音があるが、使用

頻度から言えば、「消化」と「百体」は現在の漢字音と比べ、異なるタイプとなる。さらに、複雑な語形がある「飲食」については、明治期に「インショク」と「インジキ」の使用例が確かに存在している。辞典の収録状況から見ると、「インショク」の語形が一般的であり、「インジキ」は明治期における漢音と呉音の揺れの中に生じた新しい語形ではないかと推測される。

第四節　『全体新論訳解』二種の同一漢語の異なる漢字音

両『訳解』の同一の漢語に異なる漢語と呉音の振り仮名が付されるものを抽出する。石黒『訳解』をA、高木『訳解』をBとする。

（一）石黒『訳解』に漢音、高木『訳解』に呉音となるもの

全人　Aゼンジン（1）残人ハ全人(ゼンジン・マツタキヒト)ヲ遜ス
　　Bゼンニン（1）残ネタル人ニシテ全人ニ遜ラズ

人類　Aジンルヰ（1）獨リ人類然ルコトヲ爲ザサルナリ
　　Bニンルイ（3）獨リ人類ノ然リト爲ルノミナラザルナリ

目力　Aモクリョク（1）名テ微絲血ト云フ目力ノ見ルニ及バズ
　　Bモクリキ（1）万類ノ目力ヲシテ各ソノ宜キヲ得セシム

餘力　Aヨリョク（1）脈管ハ其餘力ニ行リ漸ク擁スレバ漸ク盡ク
　　Bヨリキ（1）脈管其ノ餘力ヲ行フ漸ク擁カリ漸ク盡ルヲ悟トラザルナリ

滾和　Aコンクワ（1）混然トシテ滾和シ乃チ右房ヨリ肺ヲ過キ化シテ赤血ト爲リ
　　Bコンワ（1）混然トシテ滾和ス乃チ右房ヨリ肺ヲ過シテ赤血ト爲ル

妄行　Aハウカウ（1）人ノ抽搐ノ病ハ乃脳氣ノ氣緊急妄行シ
　　Bモウコウ（1）脳ノ筋ヂ潰亂ノ氣肉中ニ妄行スルモノニテ

定位　Aテイヰ（1）蓋シ中華ノ目科五輪八廓臓腑定位ノ説概憑トコロナキニ属ス
　　Bヂヨウイ（1）蓋シ中華ノ目科ハ五輪八廓臓腑定位ノ説概ネ憑ル所モ無キニ属ス

数対　Aスウタイ（1）另ニ動皮活肉ノ數對アリテ
　　Bスツイ（1）另ニ動皮活肉ノ數對アリテ

対合　Aタイガフ（1）両骨對合ノ處ニ遇ヘハ倶ニ墊隔アリ
　　Bツイガフ（1）両骨對合ノ處ニ遇バ倶ニ墊隔アリ

工夫　Aコウフ（1）夫レ醫学一道工夫甚タ鉅シ關繋輕キニ非ズ
　　Bクフウ（2）夫レ醫学ノ一道ハ工夫甚タ鉅大ニソノ關繋ス

ルコト輕キニ非ス

図形
A ツケイ（3）是書圖形初メ石版ニ就テ繪刷ス
B ヅギヤウ　是ノ書ノ圖形ハ初メハ石ノ版ニ就キテ繪刷タリ

無形
A ムゲイ（1）珠内ニ清水アリ初メ無物無形ヲ見ル
B ムギヨウ（1）珠ノ内ニ清水アリ初ハ無物無形ナルヲ見ル

役
A エキ（1）誠ニ須曳モ離ルベカラザルモノアリ然シテ既ニ身ヲ以テ形チノ役トス
B ヤク（1）誠ニ須曳モ離ル可カラザル者アリ然レトモ既ニ身ヲ以テ形チノ役ト爲ス

心性
A シンセイ（1）一ツハ覺悟ニ属シ一ツ心性ニ属ス
B シンシヨウ（2）一ハ覺悟ニ属シ一ハ心性ニ属ス

結成
A ケツセイ（1）下ハ則厚クシテ三角石ノ形ヲ結成ス
B ケツジヤウ（1）下ハ則チ厚ク三角石ノ形状ヲ結成ス

文辞
A ブンジ（1）故ニ文辞断続語多ク醇ナラズ
B モンジ（1）故ニ文辞ノ断ヘ続キ語多ク醇ナラス

観望
A クワンボウ（1）然レトモ亦其観望食ヲ覓ムルニ足ルノミ
B クワンモウ（1）然レドモ亦タ其ノ観望シテ食物ヲ覓ムルニ足ルノミ

流佈
A リウフ（1）血脈ノ總管ニ出テ週身ノ内ニ流佈シ
B ルフ（1）血脈ノ總管ヨリ出テ週身ノ内ニ流佈シ

創聞
A サウブン（1）以上ノ両症事實創聞脳及ヒ脊髄ノ機少モ損フ容ルルナキノ明證ナリ
B ソウモン（1）以上ノ両症ハ事實創聞ニシテ脳及ビ脊髄ノ機會少シノ損ジヲ容ルル無キコト洵ニ明證ナリ

蘭若
A ランジヤク（1）乃チ嶺頂ニ一ツノ蘭若ヲ建テ
B ランニヤ（1）乃チ嶺頂ニ于テ一ノ蘭若ヲ建テ

頸骨
A ケイコツ（1）脊骨ニ附テ而シテ上リ頸骨ノ第七節ニ至リ
B キヨウコツ（1）孔ノ外ノ両旁ニ凸節アリテ第一節ノ頸骨ヲ安放ス

以上の二一語の漢字音は石黒『訳解』に漢音、高木『訳解』に呉音となるものである。漢字音に傍線をつけるのは『日国』に掲出されているものである。一方、「目力」「滾和」「数対」「流佈」の四語は『日国』に掲出されていない。また、「人類」「定位」「工夫」「役」「心性」「無形」の六語が漢音・呉音の二つの読み方ともに掲出されている。ただし、「人類」のニンルイと「定位」のヂヨウイは古い語形として掲出されているので、現在と異なる漢字音にする。石黒『訳解』における「工夫」の漢字音「コウフ」は『日国』の「コウフ」と意味が違うため、現

在と異なる漢字音にする。結果として、石黒『訳解』において傍線部の「コウフ」を除き、一四語の漢音が現在にも使われている。一方、高木『訳解』において傍線部の「ニンルイ」と「ヂヨウイ」を除き、三語が呉音の語形で現在にも使われている。

（二）石黒『訳解』に呉音、高木『訳解』に漢音

会厭　Aエエン（1）且ツ気喉ノ口ニ蓋アルヲ会厭ト曰フ
　Bクワイエン（1）且ツ気喉ノ口蓋アリ會厭ト曰フ
右房　Aウバウ（1）之ヲ隔ツ故ニ称シテ左房右房トス
　Bユウホウ（1）之ヲ隔ツ故ニ称シテ左房右房ト爲ス
黒油衣Aコクユイ（1）血絡黒油衣位ハ眼白壳ノ内ニアリ
　Bコクユウイ（2）目根蒂ハ散ジテ黒油衣ノ上ニ貼ツク隔簾ニ至リテ而シテ止ム
貓虎　Aメウコ（2）各其用ヲ合セシム貓虎ノ類ノ如ク
　Bベウコ（1）各其ノ用ヲ合サシム貓虎ノ類ヒノ如キハ
青盲　Aセイマウ（1）身ヲ傷ルコト更ニ甚ダシ毎ニ青盲聾懵ノ症アリ
　Bセイボウ（1）此ノ衣モ一タビ壊レハ即チ青盲ノ病症アリトカヤ
粤省　Aエツシヤウ（1）粤省ノ地南離ニ處ス
　Bエツセイ（1）粤省ハ地南離ニ處レリ
夾膜　Aケウマク（1）腸後ノ夾膜ノ間ニ散佈シ
　Bケフバク（1）周リ圍メル夾膜アリテ之ヲ裹ム
脇膜　Aケウマク（1）即チ血水脇膜ノ裡ニ溢浸スルアリ
　Bケフバク（1）即チ血水ノ脇膜ノ裏ニ溢レ浸ミ
膈膜　Aカクマク（1）底ハ窩ニシテ而シテ濶ク膈膜ノ皮ニ貼乗ス
　Bカクバク（1）廻ミテ下ル弯リテ一拱ト作ル下モ膈膜ニ至リ
膠液　Aキヤウエキ（1）花蕊膠液ヲ出シ之ヲ以テ粘接ス
　Bカウエキ（1）骨節ニ膠液ヲ生シテ以テ屈ミ伸ブヲ利シ
言語　Aゲンゴ（1）耳聽ク所アレハ則意之カ為メニ聞ク言語モ亦之ノ如ク
　Bゲンギョ（1）舌ニ肉アリ四對相合フテ以テ言語飲食ヲ助ク
物象　Aブツゾウ（1）此水ハ目珠束聚ノ物象ヲ導引シ脳筋衣ニ至リ
　Bブツシヨウ（1）皆ナ物象ノ目ニ映射リテ目系ノ脳ニ達スルニ由リテナリ
貪人　Aトンジン（1）乃チ貪人ノ眼窠ナリ骨ノ形チ小ナリトイヘドモ貪欲厭クコトナシ

Bタンジン（1）乃チ貪人ノ眼窠骨ナリ骨ノ形チ小サシト雖トモ貪欲厭キ足ルナキ

頭顱　Aヅロ（1）或人問フ脳ハ頭顱ノ内ニ在リ何ソ能ク遍身ニ運用スルヤ

Bトウロ（1）或ヒト問フ脳ハ頭顱ノ内ニ在リ何ゾ能ク遍身ヲ運用スルヤ

石黒『訳解』に呉音、高木『訳解』に漢音は以上の一四語が挙げられる。『日国』に掲出されているのはわずか六語である。石黒『訳解』において三語の呉音が現在にも使われている。一方、高木『訳解』において二語の漢音が現在にも使われている。

石黒『訳解』と高木『訳解』において一方が漢音であり、一方が呉音である漢字音をまとめてみると、石黒『訳解』は現在と一致する読み方が多く、高木『訳解』は現在と異なる読み方が多く使われていることがわかった。

第五節　漢音と呉音の揺れの分類

第一節で紹介した田島（一九九八）における揺れの生じた過程に基づき、明治初期における漢音と呉音の揺れを次のように分類する。

（一）　古い音の位相の区別がなくなって併用するもの

（二）　古い音に新しい別の音を与えて併用するもの

（三）　新語に複数の音を併用するもの

（二）の分類は田島（一九九八）の論述と若干異なる。田島氏は「②以前は一方の音でしか使用されていなかったものが、新しく別の音でも読まれるようになった」と論じているが、実は古い音にもいくつかの語形が併用される場合がある。たとえば、前述した「飲食」について、最初は呉音「ヲンジキ」、中世頃から漢音の「インショク・インシ・インシイ」の語形、それから、キリシタン資料では「インシイ」と「オンジキ」の併用が確認できる。さらに、明治時代には「インジキ」が使われていた。このように、明治時代前にすでに複雑な語形が現れていたのである。そこで、（二）ではそれらを一括して「古い音」で表す。

また、（一）のように位相の区別がなくなって併用する例が少なくない。江戸時代まで、漢音と呉音の使用分野が違っていたことがすでに先行研究で指摘されている。明治時代に入ると漢音と呉音の使用分野の区別がなくなって併用するようになった。しかし、この変化は単純ではない。ときに（二）のように新しい音が現れる場合もある。たとえば、「言語」の例では、高木『訳解』において「ゲンゴ」と「ゴンゴ」の両方の

読み方が示されている。「言語」について、『日国』の語誌に

江戸時代までは漢音よみの「ゲンギョ」と呉音よみの「ゴンゴ」とが並行して用いられてきたが、明治初年に、両語形が混交して「ゲンゴ」が誕生した。「ゲンゴ」の一般化に伴って「ゲンギョ」は姿を消し、「ゴンゴ」は、「言語道断」などの特定の慣用表現に残った。

といったようにこの「言語」の三語形の変化について述べている。このように江戸時代まで、「ゲンギョ」と「ゴンゴ」は「古い音」であり、「ゲンゴ」が新しい読み方である。

『和英語林集成』の記述から「言語」の変化も窺える。

初版　Gongo ゴンゴ　言語　n. Words;　speech;　language.
再版　ゴンゴ　初版と同じ
　GEN-GIYO, ケンギョ, 言語, n. Same as Gon-go.
三版　ゴンゴ　初版と再版と同じ
　GEN-GYO,or GENGO ゲンギョ　言語　n.Same as gongo.

『和英語林集成』の初版から三版まで、「ゴンゴ」の呉音が優先して掲出されている。再版に「ゲンギョ」が初めて掲出された。三版には「ゲンゴ」が「GEN-GYO,or GENGO」のように、「ゲンギョ」の同義語として掲出されている。

『言海』には次のように記述されている。

げん - ぎょ（名）言語　コトバ。モノイヒ
げん - ご　（名）言語　げんぎょニ同ジ
ごん - ご　（名）言語　コトバ。ハナシ。言語（ゲンギョ）。「-ニ絶ス」

『言海』には「ゲンギョ」と「ゴンゴ」がほとんど同じ意味を示している。しかし、「ゲンゴ」は「げんぎょニ同ジ」のように解釈され、まだ一般的ではなかったことが示されている。

（三）について、両『訳解』は漢訳洋書の和訳書であり、当時日本語にない漢語、つまり「新語」が多数使用されている。このような漢語にどんな音を与えるかに関して、漢字音の揺れが見られる。たとえば、「膜」について、現在は医学用語に多く使われているが、両『訳解』には多数の読み方が現れる。「膜」は『大漢和辞典』には「㊀漢語バク・呉音マク㊁漢音ボ・呉音モ」が掲出されている。石黒『訳解』には「脂膜」の膜を「ボ」に、「脂膜」以外に「胞膜」などをすべて「マク」と読んで

いる。高木『訳解』には「脂膜」を「ボ」に、「胞膜」を「ボ」と「バク」の二種類、「皮膜」を「マク」に、それ以外の「膜」を「バク」にする。このように新語に対して複数の音を与えているのである。

第六節　まとめ

本章では漢字音に関する調査を通して、両『訳解』における漢字音の揺れの状態が確認できた。方法としては、現在と異なる漢字音を最初に抽出し、その字で構成される漢語をすべて集めた。また、両書にある同一漢語に異なる漢字音をあてているものも集め、一方が漢音で他方が呉音のように分類をした。

その結果、両書において漢音と呉音の揺れが一番多く、そのような揺れは高木『訳解』の方が石黒『訳解』より激しいことがわかった。また、呉音と漢音の以外に漢音と漢音、漢音と慣用音など多用な揺れも両『訳解』に見られる。

最後に、両『訳解』に見られる漢字音の揺れについて、以下のように分類した。

（一）　古い音の位相の区別がなくなって併用するもの

（二）　古い音に新しい別の音を与えて併用するもの

（三）　新語に複数の音が併用するもの

この三分類は単純ではなく、（一）と（二）が絡んでいたものがあることもわかった。

それに加えて、石黒『訳解』には「頭」で構成する漢語の意味によって漢音と呉音を区別して漢字音を与える例が見られる。人体部位の「頭」と関係するものを「ヅ」で読むが、物の端を表す漢語「気管頭」や「眉頭」などを「トウ」で読む例がある。このような例は漢音と呉音の揺れとの関係については今後の研究課題としたい。

【注】

（注一）　小倉肇著『日本呉音の研究』は法華経音義三三本、法華経字音点九本を資料として、呉音を蒐集・整理し、総合的な分析を行っている。

（注二）　掲出語と引用内容は旧字体にする。また、句読点を省略する。以下は同じである。

第六章　幕末明治期における漢訳洋書の受容

第一節　はじめに

第二章では『全体新論訳解』は『全体新論』の和訳書として書誌の情報を紹介しており、すなわち『全体新論』の日本受容の第一歩を踏み出したものであることを述べた。第三章では主に現存本調査を通して、『全体新論』と『全体新論訳解』の使用実態を分析してきた。これにより、『全体新論』の受容の理解がさらに深まった。第四章と第五章では『全体新論訳解』の振り仮名および振り仮名で反映する漢音と呉音の揺れという明治初期の日本語の実態を考察した。これは、『全体新論』の原本をどのように翻訳し受容したのかについての考察であった。以上の章を受けて本章では、さらに漢訳洋書の受容という視点から『訳解』を捉え、『全体新論』の受容を考察する。

明治時代は、日本が積極的に国家の組織から日常の生活様式まで、西洋化を推進した時代である。西洋の科学技術や文化を吸収する一つの手段として洋書の翻訳を行った。この翻訳は新事物や新概念を表す西洋語と対応できる日本語が存在しなかったため煩雑になった。そこで、日本人は新語を誕生させる工夫をした。その新語の造語法には三通りの方法があると飛田（二〇〇二）は指摘する。

新造語―日本人が新しく造語したもの。

借用語―中国で活躍した欧米人宣教師が行った洋書の中国語訳を、漢訳洋書や英華辞典から借用したもの。

転用語―日本語に存在する類義語に新しい意味を付加して転用したもの。

そのうち、借用語になる重要なルートの一つは漢訳洋書である。一九世紀初頭以来、日本周辺には出没する外国船の数が多くなり、開国を要求する西洋諸国の圧力が日々に増すという危機の中で、日本の知識人の間では、西洋に関する西洋地誌、西洋事情の知識が渇望されていた。そのような時期に、長崎に来港する中国の貿易船（唐船）が舶来した漢訳洋書は当然ながら日本の知識人に大いに注目され、歓迎された。

第二節　漢訳洋書について

漢訳洋書は当時一歩先に西洋文明を吸収する門戸を開いていた中国において、宣教師によって書かれた西洋文明を紹介する書物である。内容は漢訳聖書、漢文伝道書や科学書などである。飛田（一九八六）によれ

ば、一六世紀末以降に来華したカトリック宣教師による著述を初期漢訳洋書、一九世紀以降に来華したプロテスタント宣教師による著述を後期漢訳洋書と呼び分けている。

陳（一九九五）では、日本語への影響関係や時代性などから三期に分けている。

① 十六世紀後半から十九世紀の初頭までにカトリック教系の伝道者によるもの（約四二〇点）

② 一八〇七年からその末期までのプロテスタントの宣教師によるもの（約千百点）

③ 一八六二年以降に清朝廷の主導で設立された外国書翻訳機構から出版されたもの（約三百点）

一 初期漢訳洋書

本章では幕末明治初期における後期漢訳洋書を中心に考察する目的であるが、漢訳洋書の全体像、特に後期漢訳洋書との相違点を比較するため、ここでは、初期漢訳洋書についても簡単に紹介する。

陳（一九九五）の①に該当する書物は飛田（一九八六）の述べた初期漢訳洋書である。初期漢訳洋書は宣教師たち個人による恣意的な翻訳が多く、宗教関係の著書をはじめ、天文、地理、数学などの著書に偏っている。

日本では幕府の鎖国政策の制限で最初に入ってきた西洋の学術知識は断片的であった。八代将軍吉宗の時代になると、殖産興業政策の推進に従い、漢訳された西洋書に対する輸入制限が緩和され、一部のキリスト教関連書を除いて殖産興業に役立つ科学書などの書物が多く輸入されるようになった。漢訳西洋書の輸入に従い、各地で西洋書の内容研究とともに西洋書自体の翻訳作業が進められ、新しい学問としての発展を遂げ、蘭学の発展を推進した。

言い換えれば、初期漢訳洋書は蘭学者たちの基本参考書となったのである。代表的なものとして、飛田（一九八六）では『職方外紀』（艾儒略）、『西学凡』（同上）、『坤輿図説』（南懐仁）などが挙げられている。語彙継承の面から言えば、天文、地理、数学の関係語彙が中国では発達する一方で、日本では「赤道」、「天体」のような地理用語、「幾何」のような数学用語などが早く入っている（注二）。

二 後期漢訳洋書

一九世紀に輸入された著述を指し、陳（一九九五）の②と③にあたる。最初のプロテスタント宣教師であるロバート・モリソン（Robert E.Morrison, 一七八二～一八三四）が広州で活動を開始した一八〇七年

から十九世紀末期までに、宣教師による出版活動と清政府主導による宣教師の翻訳活動で出版した書物を指す。一九世紀初頭、百年以上の禁教が緩和され、布教活動が再開されたことにより、プロテスタント宣教師は文書伝道とともに宗教以外の著述の出版に力を入れた。その後、宣教師が清政府に雇われ、「洋務」のニーズに従い翻訳を行った。後期漢訳洋書は初期漢訳洋書よりさらに内容範囲は広く、内容記述はより専門的な書物となっている。

（1）宣教師たちの自らの出版活動によるもの

宣教師たちは個人的に、あるいは教会団体により、布教意向を中心に著述をした。また、アヘン戦争を境に、宣教師たちの活動の範囲と規模が相当異なる。

アヘン戦争までに、宣教師の布教活動が清政府に禁止されたため、南洋の「馬六甲、巴達維亜、新加坡」に基地を設立し、印刷所を設置した。熊月之（一九九四）『西学東漸与晩清社会』によると、一八一一年から一八四二年にかけ、出版された新聞・雑誌、洋学書は一三八種（字書類を含まない）にのぼっている。その内、宗教関係一〇六種、世界史、地理、科学知識関係のものは三二種である（注二）。

アヘン戦争後、香港が割譲され、広州、福州、廈門、寧波、上海の五つの港が開港した。この開国に従い、外国人の来訪、宣教師布教などの制限が緩和され、宣教師たちは布教の基地をこれらの都市に移転した。その後、上海墨海書館の成立によっては宣教師による出版事業が一層活発になった。宣教師と中国文化人の協力によって漢訳洋書の出版や再版が盛んに行われた。熊月之（一九九四）によると、アヘン戦争後から一八六〇年まで、漢訳洋書は約四三四種出版され、宗教関係が約三二九種、科学関係が一〇五種に達している。宣教師による出版は宗教関係が圧倒的に多いが、科学関係の書物も四分の一を占めている。西洋国家の政治や社会を紹介する内容もわずかながら見られる。

（2）「洋務派」主導の翻訳事業

一八六二年七月に北京で最初の官立洋学校である京師同文館が創立された。そこで一八六四年に『万国公法』が刊行され、洋書の翻訳が幕を開けた。テキストとして教師と学生ら向けに漢訳あるいは編集したものと教師個人の著述からなる書物は、合わせて三〇種類に達している。内容としては法律、天文、数学などが含まれ、国際法が多い点が特徴である（注三）。

一八六三年になると、上海広方言館に翻訳館が設置され、一八六九年に広方言館の名称で江南製造館翻訳館の一部になった（注四）。江南製造館

翻訳館は一八六八年に成立された。この時から、清政府は本格的に西洋技術などを翻訳し始める。江南製造局翻訳館は一九世紀の中国において最大の洋書を翻訳する官営翻訳機構であったという(注五)。宣教師の口述と中国文化人の筆録という共同翻訳により、大量の西洋書物の翻訳を完成した。王(一九九五)の統計によれば、一九一二年までに二四一種(四〇種の未刊)の洋書が訳出された。翻訳内容は洋務派官僚の意向に従い、応用技術、製造関係、自然科学の図書が中心となり、西洋の政治、歴史と外交にも関わっている。江南製造局翻訳館における翻訳書物の質と量は高く評価されている。『万国公法』、『化学鑑原』などの著書は日本に大きな影響を与えた代表的な書物として挙げられる。

(3) 漢訳洋書の日本流入

一九世紀の前半まで、日本人はオランダ語の書籍を通して西洋文化科学を学んでいた。その後、日本の蘭学者がオランダ語の科学技術と医学などの書籍を翻訳したが、蘭学から得られる知識は限られている。日本は開国を迫られ、幕末の日本人が世界を知り西洋文化を学ぶことを熱望するようになった。またオランダ語は難解で、蘭学者が翻訳するのもかなり困難であり、訳文も難解でわかりにくかった。一方、中国では洋書がすでに宣教師によって数多く翻訳されていた。それに、漢文書籍は日本の知識人が閲覧し理解できる。そこで、漢訳洋書の伝来は、西洋の新知識を学びたい日本人にとって近道となった。もう一つの要因は、中国と日本との長い歴史はある文化交流を通して、生活習慣や社会組織などに対する共感を持ってきたため、中国の事情に合わせた漢訳洋書は日本人にとっても理解しやすいものであったからである。このように、日本は西洋文化を取り入れ始めた時、漢訳洋書に対する依存度が高かったのである。

それらの漢訳洋書の購入ルートは種々である。開国後、外国人が入国できるようになり、直接中国から持ち込まれたものもある。中国と貿易を通して、購入したルートもある。もう一つは政府の官人が視察する時に買い集めたルートである。陳(二〇〇〇)は日本外務省の高官である柳原前光が上海製造局翻訳館の漢訳洋書を購入したと述べている。購入後、それらを翻訳したり、訓点をつけて刊行したり、和訳したりして広く流布させた。原本刊行と和刻本刊行との時期が、極めて近いことからも、多くの人々が如何に西洋事情を渇望していたのかがわかる。

八耳「目録」に記載される漢訳洋書の出版情報を見ると、明治維新後に、中国の漢訳洋書に対する依存は減らず、和刻本と和訳書の刊行も続けられたことがわかった。幕末から明治初期にかけての日本近代の初期において、西洋事情の摂取には、漢訳洋書が大いに貢献したのである。

第三節　漢訳洋書の受容に関する先行研究

後期漢訳洋書は前期より専門分野が広く、訓点を付けて翻刻出版され、日本の近代化への啓蒙書として使われた。このような書物によって英語などの西洋語を直接読めなくても、漢文の素養の高い日本人は漢文を通して西洋を知ることができた。幕末から明治にかけて、文明開化のための啓蒙に与えた影響は少なくない。

また、後期漢訳洋書は中国語の近代新語の産出に大きな役割を果たした。それらが日本に伝わったことにより新事物や新概念を表す近代漢語語彙がそのまま日本語に受け入れられ、「新漢語」となる。日本近代語の成立もこうした中国経由の洋学受容に負うところが大である。幕末・明治初期において欧米の文献を漢訳した書物の流入が日本語の近代化に影響を与えた。

後期漢訳洋書の日本と中国と両方の近代語への影響を考え、本節では後期漢訳洋書を中心に取り扱うことにする。以下の漢訳洋書は特に後期漢訳洋書を指す。

本研究と深い関係を持つ先行研究はまず八耳俊文氏によって進められてきた漢訳洋書の基本的な資料調査である。氏の『19世紀漢訳洋書及び和刻本所在目録』には、一五六点の漢訳洋書の所在と書誌情報、漢訳洋書の和刻本や和訳本などが詳細に記録されている。理学が一番多く、次いで化学、定期刊行物、医学、地質地理などの科学関係書がほとんどであるが、『万国公法』など少数の科学関係以外の書物も含まれる。

幕末から明治にかけての日本における漢訳洋書の受容研究は多い。分野別には、荒川清秀氏の地理学に関する研究、沈国威氏の医学用語の研究がある。それに、陳力衛氏による一連の研究が挙げられる。

前述したように、陳（一九九五）は漢訳洋書の流入を三期に分ける。さらに、日本語研究のため、(1)中国で刊行された漢訳洋書のリフトアップ、(2)日本に持ち込まれたか、和刻されたかについての調査、(3)漢訳洋書に近代日本語の出自調査、のような不可欠の作業が三つあると述べる。

さらに、陳（二〇〇五）は『博物新編』における「加点本」、「和訳本」、「別本」、「字引」の基本四系統、各系統の版本の相互関係を述べている。さらに、新概念に関する日中間の受容相違についても述べている。

一方、陳（二〇一三）は近代日本語の形成と中国語への逆輸入の視点で、漢訳『万国公法』から和訳『国際法』への受容過程を論じている。この研究で注目すべきは、漢訳版『万国公法』とそれ以降の数多くの版本を四つのテキスト系統（漢訳版系統、原著の直接翻訳系統、非ホイートン（『万国公法』の著者）系統、ほかの関係書）にまとめ、各系統の訳

語特徴および相互の影響関係を論じる内容である。

陳力衛氏の研究は漢訳洋書の日本受容過程、特に代表の漢訳洋書における系統のまとめ、漢訳洋書に現れる語彙についての受容状態を述べる点が顕著な成果である。

以上のようにこれまで、漢訳洋書の研究は主に書誌的研究と漢語の受容についての研究成果が蓄積されている。しかし、日本伝来に従い、漢訳洋書はどのように読まれ、どのように利用されたのか、日本語の語彙、文法、文章の文体などがどういう影響を受けたのかといった受容過程についての系統的な研究はまだ整っていない。

そこで、次の第四節と第五節は漢訳洋書の受容をめぐって、次の二点から漢訳洋書の受容実態を考察する。一つは『全体新論』における医学用語の受容実態を考察する。もう一つは『全体新論』の受容に関する調査結果をまとめ、その受容過程を検討する。

第四節　『全体新論』における医学用語の受容

これまで述べたように、『全体新論』は西洋の解剖生理学を紹介したものであり、医学用語が多数用いられている。ホブソンは当時中国医学において解剖知識の不足や間違いなどに気付き、西洋の新たな医学知識を中国にもたらした。さらに相応しい医学用語を追求し、『全体新論』の医学用語の選用や創出を工夫した。用語について、『全体新論』の例言に次のような説明がある。（括弧に示す解釈は石黒『訳解』の例言によるものである。）

・是書全体名目甚多、其爲中土所無者間作以新名、務取名実相符、閲者望毋以生造見葉

（是書全体ノ名目甚ダ多シ。其中土ニ無キ所ノモノハ。間作ルニ新名ヲ以ス。務メテ名実相符フヲ取ル。閲覧望ムラクハ生造ヲ以テ棄テラルルコト毋レ）

・是書文意、其与中国医書暗合者、間或引用数語、其不合者不敢混入

（是書文意。其中国ノ医書ト暗合スル者ハ。間或ハ数語ヲ引用ス。其合ハザル者ハ敢テ混入セズ）

このようにホブソンは『全体新論』に人体に関する名称が多く存在し、そのうち、当時中国に存在しなかった名称をできる限り相応しい新たな名称で命名することを述べている。また、中国の従来の医学書にある既存の名称に該当する内容と一致したもののみを選び、「数語」を引用したとも述べている。

一　医学用語の抽出

本節ではホブソンが用いた用語を分析し、その用語の由来や特徴を分析する。そのため、「～骨」に関する名称を抽出したところ次の九〇語を認めることができた。（配列は出現順に従う。）

二字語（三八語）：
脆骨、交骨、頭骨、面骨、額骨、枕骨、顴骨、胸骨、頸骨、脊骨、背骨、腰骨、脇骨、横骨、臂骨、膸骨、手骨、肱骨、掌骨、腕骨、指骨、胯骨、坐骨、髀骨、臏骨、脝骨、踵骨、肘骨、足骨、趾骨、股骨、脚骨、肋骨、頷骨、尾骨、椎骨、砧骨、珠骨

三字語（四三語）：
跨盆骨、顱頂骨、耳門骨、蛱蝶骨（蝴蝶骨）、鎖子骨、馬乳骨、錐顖骨、水泡骨、鼻梁骨、涙管骨、犁頭骨、上膞骨、弔鐘骨、上柱骨、飯匙骨、肩胛骨、上臂骨、下頷骨、正肘骨、転肘骨、下臂骨、手腕骨、手掌骨、尾骶骨、尾閭骨、大腿骨、太腱骨、大髀骨、膝蓋骨、小腿骨、輔腿骨、労堂骨、足拗骨、脚跟骨、前掌骨、大趾骨、目窠骨、小珠骨、馬鐙骨、螺紋骨、眼窠骨、牙床骨、右胯骨

四字語（九語）：
上水泡骨、下牙床骨、鼻孔間骨、鼻孔底骨、上牙床骨、水泡上骨、下水泡骨、眼稜上骨、眼稜下骨

抽出したこれらの語彙がホブソンによる造語であるかどうかについて、『大漢和辞典』、『漢語大詞典』や中国の医学書『医宗金鑑』[注六]を調べ、結果をまとめると、次の用語が既存の語であることがわかった。

二字語（二八語）：脆骨、交骨、頭骨、面骨、額骨、枕骨、顴骨、胸骨、頸骨、脊骨、背骨、腰骨、横骨、臂骨、膸骨、掌骨、腕骨、指骨、胯骨、髀骨、臏骨、脝骨、足骨、股骨、肋骨、尾骨、肘骨、趾骨

三字語（一二語）：耳門骨、鎖子骨、鼻梁骨、膝蓋骨、肩胛骨、大腿骨、太腱骨、尾骶骨、尾閭骨、小腿骨、労堂骨、牙床骨

四字語（一語）：下牙床骨

ホブソンは、二字語について既存の用語を大量に採用し、漢方（中国医学）の伝統を尊重していることがわかった。一方、二字語にはホブソン自らによる造語がわずかにあるが、三字語以上を見ると、既存の二字語を基礎にし、三字語と四字語を大量に創出したことはホブソン造語の

特色の一つである。

典拠不明の用語は「坐骨、蛱蝶骨、犁頭骨、上臂骨」の四語であり、これらはホブソンの造語である可能性が高いと考えられる。中国医学には寛骨の後下部を占め、閉鎖孔を囲む部位の骨については独立した名称がなかったので、ホブソンは「此骨乗於椅上故名坐骨」というように、この骨に関してホブソンの『医学英華字釈』にある sitting bone を「坐骨」と直訳し命名している。「蛱蝶骨」という名称の下に割注「中土無名故云」とあり、すなわち、中国にこの骨の名前は存在していなかったことを示している。ホブソンはこの骨の名称を創出する前に、中国語に既に名前があるかどうかまず確認しており、中国の伝統的な用語を重んじたと思われる。「犁頭骨」という訳名は本文に「西国名之曰～、像其形也」のようにこの骨の名前の由来を述べる。「犁頭骨」は『医学英華字釈』により、英語 the vomer の訳語であることがわかり、現在「鋤骨」という。「上臂骨」をホブソンの造語と判断するのは「～古名臑骨又名肱骨」のようにひじの旧名である「臑骨」と「肱骨」を載せていることによる。ここから見ると、ホブソンは中国語の医学伝統を重んじる一方、理解しやすい通俗的な用語を作り出して伝統医学の用語に局限されないように工夫していたと言えるであろう。

上記のように、ホブソンは『全体新論』を執筆する際に、骨に関する名称を既存の語から用いることを基本としたが、中国の伝統医学にないものについては自ら語を作った。二字語については既存の語から多く採用したが、三字語以上の語は既存の二字語を土台にして創出したものもある。また、西洋医学用語から直訳する訳法を用いた。ただし、「上臂骨」のような典拠不明の用語は既存の語であるのか、ホブソンによる造語なのか、更なる資料を調べる必要がある。

二　『全体新論訳解』二種における医学用語の受容様相

前述は主に『全体新論』の医学用語について考察したが、次は二種の『訳解』における『全体新論』の医学用語の受容状況を考察する。

石黒『訳解』は漢文訓読体であり、高木『訳解』は漢文訓読調の翻訳であるため、文体の違いにより語彙の翻訳も異なる。前掲の抽出した語彙を両書の翻訳と比較すると、各書の違いが見られる。

石黒『訳解』において、医学用語の漢字表記はほとんど『全体新論』と一致し、そのまま訳されている。例外として、「鼻孔間骨」について、初めは「鼻孔ノ間骨」のように句の形で訳されているが、その後は「鼻孔間骨」のように訳されている。和刻本『全体新論』における「鼻孔間骨」を確認した結果、「鼻･孔間･骨」と「鼻･孔･間･骨」といったように相違する合符が現れている。この合符の違いは二種の訳語を示していると

考えられる。また、前掲の九〇語のうち、六〇語に振り仮名が一つのみ付され、四語に左右両側の振り仮名が付されている。

これに対し、高木『訳解』においては、その九〇語に対する翻訳が複雑な形を呈している。まず訳された医学用語の表記から見よう。二字語の「脆骨」は「脆骨」と「脆キ骨」との二種に訳されている。それ以外の二字医学用語はそのまま訳されている。三字語については、「上柱骨」を「上ノ柱骨」に、「尾骶骨」を「尾骶ノ骨」と訳している。四字語において、「鼻孔間骨」ははじめに「鼻孔ノ間ノ骨」とあり、その後に現れるものはそのまま「鼻孔間骨」と訳されている。「鼻孔底骨」が「鼻孔ノ底骨」のように訳されたのは四語ある。要するに、高木『訳解』における三字語以上の訳語は「ノ」で二つ以上の語を繋ぐ形にするものが多い。一方、高木『訳解』の医学用語は振り仮名が多様であるという特色がある。次のような例を見よう(注七)。

（1）振り仮名が一対一（五〇例）

①音読み（二五例）：交骨（コウコツ）、踝骨（ソウコツ）、坐骨（ザコツ）

②訓読み（二二例）：脊骨（セボネ）、股骨（モモノ〇）、肘骨（ヒヂホネ）

③音訓組み合わせ（三例）：犁頭骨（リトウノ〇）(注八)、上牙床骨（ウヘノハノダイノホネ）

（2）振り仮名が二つ以上現れるもの（二一例）：頸骨（クビノ〇）（ケフコツ）、上臂骨（ウハヒヂノ〇）（ウヘノヒヂノ〇）、脇骨（スヂホネ）（ワキボネ）

（3）左右振り仮名およびそのどちらか現れるもの（八例）：額骨（ガク〇・ヒタヘ）→（ガクコツ）／（ヒタエ）、枕骨（チン〇・マクラ〇）→（マクラボネ）／（チンコツ）

以上の振り仮名から見ると、高木『訳解』にも一部の振り仮名について「ノ」で繋ぐ医学用語がある。これらの医学用語を除き、全般的に見ると、高木『訳解』の医学用語は術語としての要素を備える。これらの用語の振り仮名を見ると、（1）振り仮名が一対一の「音読み」と、「訓読み」の一部は形だけではなく、音と義ともに術語の要素を備える。一方、「ノ」で繋ぐ用語は一つの漢字表記語という形があっても、振り仮名で反映する音と義から判断すれば、厳密に一つの術語としては認められないだろう。

石黒『訳解』と高木『訳解』とを比較してみると、石黒『訳解』は漢文訓読体であるため、訳語はできる限り漢文の原本と一致する形をとる。

句ではなく、一つの語として訳すのは医学用語の翻訳に相応しいと考えられるが、漢文に詳しくない読者にとっては理解しにくいものであったのであろう。一方、高木『訳解』は漢文訓読調の翻訳と言っても、漢文訓読の訓法から完全に離れたとは言えない。学術用語の翻訳から見ると、形は原本と同じであるが、多様な振り仮名によって、医学専門書としての難解さを緩和し、解剖学の初心者向けの翻訳書を想定してこれらの作業を行ったと言えるだろう。

三　『全体新論』の医学用語の日本での受容

（一）『医語類聚』の受容様相

『全体新論』は日本に伝来し、医学書として広く学習された。したがって、ホブソンの造語が日本でどのように受け入れられたのかについて分析する。

明治初期の日本ではオランダ医学が退潮期を迎え、主流は英米医学になった。英米医学の発展に従い、医学生を養成するための教科書や医学用語集が必要となった。このことを背景に、専門的に医学語彙を集めた英和医語辞典である『医語類聚』が明治五年（一八七二）に名山閣から出版された。『医語類聚』は海軍軍医である奥山虎章がダングリソン（一七九八―一八六九）の『医学事典』を典拠に編纂し、解剖学、生理学、薬物学などの術語を内容としたものである（注九）。同書は初版から五年後に増訂第二版が出版された。『医語類聚』は蘭学や漢訳洋書などの医学用語を吸収する際新しい医学用語を作りだし、その訳語は現在の医学用語に多大な影響を与えた。例えば、『日国』には『医語類聚』から約七八〇例が引用され、そのうち、約五五〇例が『医語類聚』が初出例として掲出されている。

そのような『医語類聚』の訳語はホブソンの造語から影響を与えられている。例としては『医語類聚』がホブソンの「～炎」に関する造語に基づき、数多く訳語を創出したことである。ホブソンが英語の**inflamma - tion**を「炎症」と訳し、初めて『西医略論』に「西国方言曰炎法美順、訳爲炎熱之意、故名曰炎症」のように用いられた。この「炎法美順」は**inflammation**の音訳である。ホブソンの『医学英華字釈』に「～炎」という用語は約二〇語あるが、『医語類聚』には「～炎」に関する訳語は約一六〇語にのぼる。

さらに、ホブソンの代表的な医学書である『全体新論』も『医語類聚』の訳語に影響を及ぼした。『全体新論』にある骨に関する名称が『医語類聚』のものと一致しているのは「坐骨、肩胛骨、膝蓋骨、趾骨、指骨、砧骨、馬鐙骨、顱頂骨、転肘骨、蚊蝶骨、尾骶骨、頭骨、正肘骨、額骨、枕骨」である。「坐骨、蚊蝶骨」の二語は『全体新論』から直接受け入

れられた訳語であると考えられる。「砧骨、馬鐙骨、顱頂骨、転肘骨、正肘骨」の五語はホブソンの造語であるかどうかまだ不明であるが、『医語類聚』は『全体新論』の影響を受けた可能性もある。そこで、『全体新論』より先に日本に流入した中国医学書、特に、漢訳洋書を確認する必要がある。また、骨に関する訳語はわずかであるが、これから『医語類聚』の訳語と比較するため、『全体新論』の医学用語を全般的に調査することとする。

（二）「坐骨」「胡蝶骨」について

ホブソンの造語「坐骨」は現在の医学用語ではそのまま「坐骨」である。一方、「蚨蝶骨」は『全体新論』に「蚨蝶骨」と「蝴蝶骨」の両方の表記がある。一方「胡蝶骨」に当たるものであり、現在の医学用語で言えば「蝶形骨」に相当する。『日国』には「坐骨」「胡蝶骨」の両方が掲出されている。

まず、「坐骨」の記述は次のようになっている。

坐骨　（名）　（椅子に腰をおろしたとき、椅子の面に接する骨の意から）腰部にある寛骨の下半部を占める骨。坐骨体と坐骨枝に分かれ、腸骨・恥骨と癒合（ゆごう）して寛骨をつくる。

＊医語類聚〔１８７２〕〈奥山虎章〉「Schiaticus　坐骨ノ」
＊生物学語彙〔１８８４〕〈岩川友太郎〉「Ischium　坐骨〔解〕」

「坐骨」は医語用語集の『医語類聚』に採用され、その後、『改訂医科全書第四号　解剖篇下肢骨論之部』（東京大学医学部編、一八七八年出版）といった医学解剖書に使われ、『生物学語彙』のような用語集にも収録されている。「坐骨」は医学関係の用語として広く使われ、『和英語林集成』（第三版）（一八八六年）にも収録され、一八八九年に出版された『言海』にも収録される。その後、『日本大辞書』、『帝国大辞典』、『日本新辞林』などの国語辞書にも収録されるようになった。続いて大正期の『大日本国語辞典』に掲出され、その後、中型の国語辞書『広辞苑』の初版（一九五五年）からの版本を始め、小型の『岩波国語辞典』（一九六三年）まで収録された。「坐骨」はほとんどの国語辞書に収録されている。現在の日常生活では「坐骨」が使われ、身体部位の一つとしてよく知られる言葉である。このように、「坐骨」は初め医学用語として使われたが、次第に一般語としてよく知られ、広く用いられるようになった。

次に「蚨蝶骨」の受容状況を見よう。「蚨蝶骨」「蝴蝶骨」の表記は『日国』に掲出されていないが、「胡蝶骨」は『日国』に「蝶形骨に同じ」と記述されており、用例は掲出されていない。『医語類聚』には「蚨蝶骨」

は訳語として掲出されていないが、「Schindylesis 不動関節ノ一種（鋲骨ト蚊蝶骨ノ類）」という用語の注に「蚊蝶骨」がある。『改訂医科全書第五ノ上　解剖篇頭骨論之部』（東京大学医学部編、一八七九年出版）には「蝴蝶骨」が用いられているが、ほかの資料には「蚊蝶骨」「蝴蝶骨」の表記が少ない。さらに「胡蝶骨」は「坐骨」と違い、『和英語林集成』、『言海』および明治期や大正期の国語辞書にも収録されていない。ただし、『広辞苑』の初版（一九五五年）から第六版まで「胡蝶」の項目に「胡蝶骨」が掲出されている。『大辞林』の初版（一九八八年）にはないが、第二版の「胡蝶」の項目には「胡蝶骨」が掲出される。『広辞苑』と『大辞林』には「胡蝶骨」についてはほぼ「蝶形骨に同じ」のような記述であり、『日国』と一致している。このように、「胡蝶骨」は現在ほとんど使われていない状況である。「胡蝶骨」は頭蓋骨の一部であり、医療従事者がもっぱら用いるものとして、一般の人々は日常生活で触れない用語なので、一般用語として広がらなかったと考えられる。このため、明治期に専門用語として使われたが、国語辞書に「胡蝶骨」は収録されていない。

以上、『全体新論』の造語である「坐骨」と「蚊蝶骨」に関する日本での受容状況について辞書類の掲出状況から考察した。「坐骨」「胡蝶骨」のような医学用語は直接明治初期の日本医学に受け入れられたことがわかり、『全体新論』は医学の訳語の創出に影響を与えたと言える。一方、「犁頭骨」のような用語は『医語類聚』に訳語として受け入れられていない。「犁頭骨」が対応する英語 vomer は『医語類聚』で「鋤骨」と訳されている。「鋤骨」について、「犁頭」に近い意味の言葉の「鋤」に直されたのか、『医語類聚』の自らの造語であるのか、現時点で手元にある資料は限られているため、この問題に答えることは難しい。これから、この問題についてさらに資料を収集した上で、解明をしたい。

第五節　『全体新論』から見る漢訳洋書の受容過程

これまでの現存本調査や医学用語の考察などを通して漢訳洋書の受容実態がわかるようになった。そこで、本節は『全体新論』を中心に、日本での受容過程を分析する。その受容過程を仮に分解し、次のような七段階にわける。

（1）原著の「直読」

現存本に残した痕跡から見ると、『全体新論』の原著が直接読まれたことがわかった。この段階では漢文の教養がどこまであるかに関わる。中国人並みの読解力を身につけた読者は語順などを変えず中国人同様に早

く読む。一方、漢文訓読の教養をもつ知識人は日本語の構文を考えながら読んでいた。日本に入る原著の量はかならずしも多くなかったと言えるから、読む人は限られていたと考えられる。

(2) 和刻本の刊行

漢訳洋書の役割が一旦認められ、多くの人に読まれるために、和刻本の刊行が要求される。八耳（一九九九）の調査によると、すべての漢訳洋書に和刻本が刊行されたわけではなく、和刻本と示されたのはわずか四分の一であることがわかった。漢訳洋書が和刻されない要因の一つは漢文の教養がある知識人が漢文を支障なく読めるからである。漢訳洋書をすべて和刻する必要はないのである。一方、基礎知識を紹介し、広く普及できる漢訳洋書は啓蒙書として和刻されたものが多い。

『全体新論』は中国での出版後、まもなく日本に伝わった。また、二年後の安政四年（一八五七）に京都で医業を営んでいた越智崧により、訓点を付した和刻本が刊行された。その後、ホブソン五書のうち、次の三種の西洋医学書が幕末の日本の西洋医学界に歓迎された。

『全体新論』一八五一（→日本に一八五四年ごろ）→越智蔵版一八五七年

『西医略論』一八五七→桃樹園三宅艮斎氏蔵版一八五八年

『婦嬰新説』一八五八→天香堂蔵版一八五九年

『内科新説』一八五八→桃樹園三宅艮斎氏蔵版一八五八年

これらのホブソンの医学書は一八五一年から一八五八年にかけ、順次中国で出版されてきた。『全体新論』は伝来して二年後、他の三種の医学書は原著の発行の一年後にすばやく和刻され、医学書に対する期待に応え、普及を積極的に進めたことがわかる。

(3) 和刻本の読解

現存本調査により、全国図書館や研究機関に『全体新論』の和刻本が数多く残されていることがわかった。つまり、当時『全体新論』の和刻本の出版は活発だったということである。『全体新論』には返り点や句読点や語の間に連語符が付されており、読者はこれらの訓点に従い、漢文を訓読し理解する。

これらの訓点を研究すれば、当時の人々が身に付けた訓読法は何か、前時代の訓読法とどういう違いがあるか、ある程度把握できる。

(4) 和刻本の受容様相

① 和刻本の書き込み

現存本調査を通して、多数の現存本に書き込みが確認できた。日本大

学松戸歯学部本には漢字に字音と字訓が付された小紙片二八枚が挟んである。同志社大学荒木文庫本『全体新論』には「合信氏諸骨表」と「鈍屈里孫氏比較」という内容の一枚の紙が挟んでいる。同志社大学中瀬古文庫本『全体新論』には難字に音注、意味注、訓注が付される書き込みが見られる。同志社大学神学部本『全体新論』には医学用語の解釈である書き込みが大量にある。以上のように書き込みについては様々な様相を呈している。当時の日本における『全体新論』の使用目的、使用実態および漢文の読解力、字書類の利用実態などが書き込みを通して分析できる。

② 和刻本の用語を吸収し、用語集に受け入れる。

『医語類聚』に見られるホブソンの造語にもっとも影響を与えられた例として「～炎」に関する訳語の創出が挙げられる。ホブソンの代表的な医学書として『全体新論』も『医語類聚』の訳語に影響を及ぼしていないとは考えにくい。

骨に関する名称を例にすると、『医語類聚』にある「坐骨、馬鐙骨、胡蝶骨」が『全体新論』から直接受け入れられた訳語であると考えられる。それ以外の訳語は『全体新論』の造語ではないが、『全体新論』を経て影響を受けた可能性もある。よって、『医語類聚』の訳語と対照するため、『全体新論』の医学用語を全般的に調査する必要がある。

③ 他の著書にその医学内容を引用する。

『全体新論』は植物や動物や人間などの知識を紹介する『造化妙々奇談』にも影響を与えた。『造化妙々奇談』の本文と対照してみると、『造化妙々奇談』における「人身出生の奇妙」と「妊娠の奇妙」の二篇は『全体新論』の一部を編纂して翻訳したものであることがわかった。前者は『全体新論』の「外腎経」と「陰経」、後者は「胎論」と「胎盤論」を改訳したものである。医学用語の受容を考える際に、この類の資料を参照できると考えられる。

（5） 和刻本を書き下し、和訳本を刊行する。

明治に入ると、同名二種の『訳解』が出版された。明治六年（一八七三）から明治七年（一八七四）にかけて大阪で出版された高木熊三郎によるものと明治七年（一八七四）に名古屋で出版された石黒厚によるものである。

（6） 異本 和刻本を抄訳し、医学書を刊行する。

和訳本に関して、二種の『訳解』以外に、松井惟利抄訳の『通俗全体新論』初篇が明治一一年に東京で刊行された。これは『全体新論』の本文の前半を抄訳し、養生の進めを書き加えているため、『訳解』と性格が違い、完全に和訳本ではないと言えるだろう。和刻文『全体新論』とこ

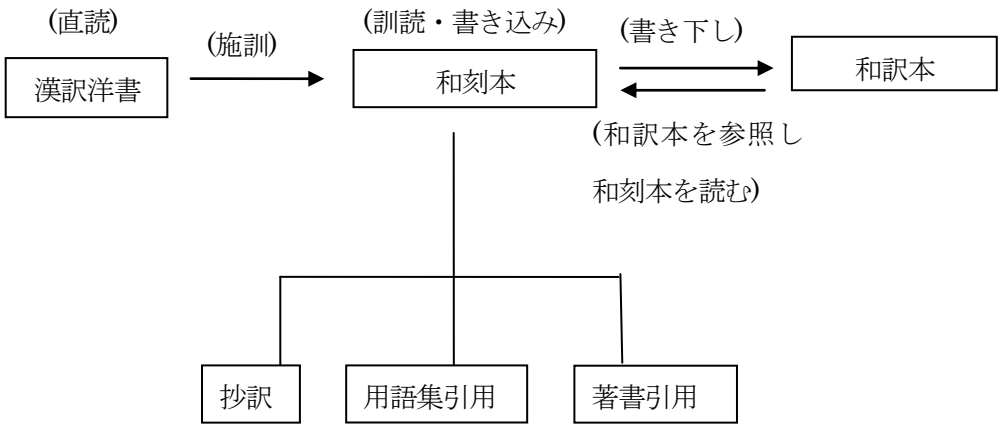
の和訳本と対照し、医学用語の相違点を分析することができる。

（7）和訳本を参考にして和刻本を読む。

現存本調査を通して、多和本『全体新論』は高木『訳解』にある七八条の字註や語彙注釈を参照し、その中の五九条を引用して補注しているのがわかった。

以上の受容過程を次の**図一**にまとめる。

漢訳洋書の受容過程を明らかにするのは現存本調査や対照調査を通して実現できると思われる。これまでの調査を通して、『全体新論』と和刻本と和訳本の現存本を調べた。（2）、（4）の①、（5）、（7）の受容過程に触れている。さらに、（4）の②、③、（6）は『全体新論』と対照しながら、医学内容や医学用語などの受け入れを確認できると考えられる。



図一

【注】

（注一）　佐藤（一九八三）を参照。

（注二）熊月之氏の著作『西学東漸与晩清社会』における「早期基督教伝教士出版中文書刊目録」（一八一一～一八四二）を参照し、出版された書物を数えたものである。また、出版された書物のうち、広州で六種（うちの一種がのちに新加坡に移動された）とマカオでの六種を除き、一二六種は中国以外の印刷所で印刷されたとわかった。

（注三）「京師同文館」については、伊原澤周氏の著書『日本と中国における西洋文化摂取論』を参照。

（注四）江南製造局翻訳館の成立について、李（二〇〇五）を参照。

（注五）橋本（一九九一）を参照した。

（注六）『医宗金鑑』清の乾隆帝の命令によって、呉謙らに纂修され、乾隆七年（一七四二）に刊行された中国の伝統医学全書である。全九〇巻。歴代諸家の説を整理したものである。発刊当時から現在に至るまで中国の臨床医学に最も重要な医学書の一つとして利用され続けている。

（注七）　「ガク〇・ヒタヘ」のように、「〇」は該当の漢字の振り仮名が存在していないことを表す。「・ヒタヘ」は左側振り仮名を表す。特に表記していないものは右側振り仮名である。

（注八）梨頭骨（リトウノ〇）について、振り仮名が附されていない「骨」を「ホネ」と推測する。理由として、高木『訳解』に現れる「～ノ骨」は「～ノホネ」と振り仮名が付される例があるが、「～ノコツ」と付される例がないからである。

（注九）『医語類聚』について深瀬（一九九六）を参照。

第七章　結論

本論文は『全体新論』とその和訳書である二種の『訳解』を対象として、明治初期における漢訳洋書の受容といった観点から『全体新論訳解』の書誌的・文献的な研究と分析を行った。さらに、両『訳解』における振り仮名と漢字音に着目し分析を行い、二種の『訳解』は近代日本語を考察する際に有益な資料であることを明らかにした。

本論文は「序論」と「結論」を入れて七章からなる。第二章と第三章は『全体新論』と『訳解』二種との関係を書誌学的・文献学的な視点から検討した。第四章と第五章は二種の『訳解』における近代日本語の表記と漢字音を中心に国語学的研究を展開した。第六章は漢訳洋書の日本受容を考察した。次は各章の内容構成と結論を総括する。

第一章では導入として『全体新論』と二種の『訳解』を研究する背景と意義を検討した。

第二章では『全体新論』と『全体新論訳解』に関する書誌的情報と二種の『訳解』に関する言語学的資料としての価値を中心に考察を行った。先行研究と書誌調査を通して、『全体新論』と二種の『訳解』の著者、内容構成と相互関係を明らかにした。そして、『全体新論』は日本で啓蒙書としても教科書としても使われ、大きな影響を及ぼしたものであることがわかった。また、二種の『訳解』には豊富な振り仮名があるため、これらの振り仮名を通して明治初期の日本語表記、字音と語彙を研究することができる。二種の『訳解』には言語学的資料価値があることを確かめた。

第三章では現存する『全体新論』と二種の『訳解』に関する実地調査を行い、使用形跡をまとめ、当時の使用字書類と読解状況などを考察した。調査結果を整理すると、次の四点にまとめることができる。

（一）現地調査を通して、現存本では使用形跡を多数確認できた。当時の使用者は漢文を読解する際に、『字彙』や『康熙字典』『増続大広益会玉篇大全』などの単字字書を用い、難字を解釈したことが主流であった。一方、医学用語の書き入れを通して、一部の使用者は中国の漢方書籍も西洋人の著述も参照したことがわかった。特に、明治初期には医学用語が固定せずいくつか併用されたことも確認できた。

（二）多和文庫本と早稲田大学本と慶応義塾大学富士川文庫本の『全体新論』に現れる書き入れは高木『訳解』を参照したものがある。これは『全体新論』の漢文を読む際に、使用者が和訳書を参照したことを示し、高木『訳解』が広く読まれたことを証明した。

（三）四種以上の現存本に見られる漢字解釈の書き入れを七三字抽出し、二種の『訳解』にどのように和訳されたかを検討した。二種の『訳

解』は漢字に対する解釈の方法に相違が見られる。石黒『訳解』では左右両側振り仮名と左側振り仮名の形が多いが、高木『訳解』では右側振り仮名に訓読みが多く付される以外に、左右両側振り仮名と漢字解釈も見られる。

（四）調査した石黒『訳解』をすべて見比べ、石黒『訳解』は再版されたことがわかった。研究対象である北大本石黒『訳解』は再版のものであることを明らかにした。

第四章では二種の『訳解』をデータベース化する手順と振り仮名の取得方法と統計方法を説明した上で、二種の『訳解』における訳述方法の差異による振り仮名の特徴差を中心に分析した。石黒『訳解』は漢文訓読文である。一方で、高木『訳解』は漢文訓読にとどまらず、語レベルの翻訳もしており、漢文訓読調の文体となる。この異同により、両書の振り仮名の付け方に相違が生じることを明らかにした。まず、音読みと訓読みの量が異なる。石黒『訳解』は音読みが多く付され、高木『訳解』は訓読みが多く付されている。品詞構成比率も異なる。訓読みの方に品詞構成比率の差が顕著であるが、音読みでも品詞構成比率に差はある。さらに、左右両側振り仮名が付されるのは両『訳解』の共通点である。石黒『訳解』には全文にわたり数が多いが、高木『訳解』は第一節と第二節に集中し、第三節以降、そのほとんどが右側振り仮名に統一されている。

第五章では二種の『訳解』における漢字音の揺れを中心に考察した。両書に漢音と呉音の揺れが一番多く、同一漢語に対する異なる漢字音の用例から見ると、高木『訳解』の方が石黒『訳解』より多いことが確認できた。呉音と漢音の揺れ以外に漢音と漢音、漢音と慣用音などの揺れも見られる。これらの漢字音の揺れは三分類にまとめられる。（一）古い音の位相の区別がなくなって併用するもの、（二）古い音に新しい別の音を与えて併用するもの、（三）新語に複数の音を併用するものの三種類に分けられる。そのほか、（一）と（二）の絡んでいたものが存在することがわかった。

第六章では『全体新論』と二種の『訳解』を中心に漢訳洋書の受容について述べた。具体的に医学用語の受容と受容過程において漢訳洋書の日本における受容の全体像を概観した。医学用語の受容について、「坐骨」のような医学用語は明治初期から日本に受け入れられたことがわかった。また、現存本調査と書誌調査を通して、『全体新論』の受容過程を検討した。

第七章では議論の総括と今後の展望を述べた。

本論文は漢文医学書『全体新論』の二種の和訳書を取り上げて、振り仮名の相違と漢字音の揺れを実証的に明らかにしたものである。要する

に、明治前期における振り仮名の多様性と漢字音の揺れのような日本語の実態を漢訳洋書の和訳書から確認できることは本論文の結論であると考える。従来の研究では和訳書に対する本格的な分析はなされておらず、その資料的価値が重視されていなかったが、本論文はその資料的価値を見出して、日本近代語の有益な資料としての位置づけがなされたものである。和訳書は研究資料として近代日本語研究の視野に入れるべきであると考案する。

また、本論文の研究方法について、一つは、現存本調査は漢訳洋書と和訳書の使用状況と使用字典類や漢文の受容を考察できる点から見ると、漢訳洋書の受容研究と近代日本語研究の有効な方法であると考える。もう一つは、二種の『訳解』に関するデータベースの構築は大量の言語データを収集できる点から見ると、近代日本語の量的分析に役立つ方法であると考える。

二種の『訳解』の資料的価値は本論文で振り仮名と漢字音の二点からわずかながら証明したが、まだ研究すべき対象が多い資料である。二種の『訳解』を言語資料とする研究には、次のような点において今後の展開が必要であると考える。

第一に、語彙研究のために、第四章のデータベースを構築した方法に従い、二種の『訳解』の語彙をすべてデータベースに収録すべきである。また、各語彙における語種、文語と俗語、方言、漢文訓読語などの語誌記述をデータベースに入れる必要がある。このデータベースを完成すれば、明治初期における語彙の使用意識を次の三点から分析できると考える。一つ目は両書の和語と漢語の使用語種の差を統計することである。漢語を大量に創生する直前の漢語・和語の分析データとして明治初期の語彙の定着を量的に分析することである。二つ目は各語彙の位相情報を収集すると、明治初期の語彙の特徴を捉えることである。例えば、和語を例にして、二種の『訳解』に見られる方言形について、高木『訳解』には「蝿」を「ハイ」と、石黒『訳解』には「百足」を「ムカゼ」と振り仮名が付される。また、高木『訳解』には「軽キ」を「カロキ」と「圓ク」を「マロク」の文語形および「唇」を「クチビロ」と付される。このような語彙を収集すれば、明治初期の和語の使用状況を分析できると考える。三つ目は医学用語の受容様相を分析できることである。第二章の言語学的価値と第六章の「～骨」の医学用語を考察する際に、両書の医学用語について、翻訳法に相違が見られる。データベースを通して、両者の医学用語を全部抽出し、医学用語の受容と定着を網羅的に考察できる。

第二に、石黒『訳解』が漢文訓読文であるのに対して、高木『訳解』は和文への翻訳を模索しようとするものである。そこで、二種の『訳解』

は訓読と翻訳の関係を考察できる資料であるといえる。二種の資料を原文の『全体新論』と対照し、対応する部分に行われた訓読や翻訳がどのように反映されたのかを検討すれば、明治初期の訓読と翻訳および両者の関係を明らかにできると考える。また、訓読や翻訳による語彙、文法、文体の不一致を分析すると、明治初期における日本語の実態を考察することが可能となろう。

参考文献

阿知波五郎（一九七九）「明治初期の医学関係英語辞書の性格」『英学史研究』一二

阿部龍夫（一九五一）『函館の医事と医人』　無風帯社

荒川清秀（一九九七）『近代日中学術用語の形成と伝播―地理学用語を中心に』　白帝社

有賀鐵太郎（一九五五）「故 魚木忠一博士略歴」『基督教研究』二八（三-四）基督教研究会

石井久美子（二〇一二）「『安愚楽鍋』における振り仮名の研究」『国文』一一八　お茶の水女子大学国語国文学会

市來津由彦（二〇〇八）「漢文訓読の現象学―文言資料読解の現場から―」『「訓読」論―東アジア漢文世界と日本語』　勉誠出版

伊原澤周（一九九九）『日本と中国における西洋文化摂取論』　汲古書院

岩淵匡（一九八九）「振り仮名の役割」『講座日本語と日本語教育九　日本語の文学・表記（下）』　明治書院

梅渓昇（一九九六）『緒方洪庵と適塾』　大阪大学出版会

王揚宗（一九九五）「江南製造局翻訳書目新考」『中国科技史料』一六（二）　中国科学技術史学会・中国科学院自然科学史研究所

大島中正（一九八九）「表記主体の表記目的から見た漢字仮名並列表記形式―いわゆる振り仮名付き表記形式をめぐって―」『同志社女子大学学術研究年報』四〇（四）　同志社女子大学

小倉肇（一九九五）『日本呉音の研究　研究篇』新典社

京極興一（一九八一）「振り仮名表記について」『信州大学教育学部紀要』四四　信州大学教育学部

京極興一（一九九三）「漱石の振り仮名表記―『こゝろ』の場合―」『近代語研究 第九集』　武蔵野書院

小竹英夫（二〇〇三）『北海道医学教育史攷』　北海道出版企画センター

佐々木勇（二〇一一）「日本漢音研究の現在」『日本語学』三〇（三）明治書院

佐藤喜代治（一九六二）「近世における漢語の語形変化」『文化』二六（三）　東北大学文学会

佐藤喜代治（一九七一）「近世における漢語の語形変化」『国語語彙の歴史的研究』　明治書院

佐藤亨（一九八三）『近世語彙の研究』　桜楓社

朱京偉（二〇〇三）『近代日中新語の創出と交流―人文科学と自然科学の専門語を中心に』　白帝社

舒志田（二〇〇一）「『全体新論』の語彙について―『解体新書』の語彙と比較しながら―」『国語学会二〇〇一年度秋季大会要旨集』

沈国威（一九九六）「近代における漢字学術用語の生成と交流―医学用語編―（1）」『文林』三〇　神戸松蔭女子学院大学
沈国威（一九九七）「近代における漢字学術用語の生成と交流―医学用語編―（2）」『文林』三一　神戸松蔭女子学院大学
沈国威（二〇〇〇ａ）『植学啓原と植物学の語彙―近代日中植物学用語の形成と交流』　関西大学出版部
沈国威（二〇〇〇ｂ）「『泰西人身説概』(1623) から『全体新論』(1851) まで―西洋医学用語の成立について―」『関西大学中国文学会紀要』二一　関西大学中国文学会
沈国威（二〇〇八）『近代日中語彙交流史―新漢語の生成と受容』　笠間書院
進藤咲子（一九八二）「ふりがなの機能と変遷」『講座日本語学六　現代表記との史的対照』　明治書院
関場武（一九七七）「毛利貞斎編『増続大広益会玉篇大全』」『芸文研究』三六　慶應義塾大学芸文学会
田島優（一九九八）『近代漢字表記語の研究』　和泉書院
陳力衛（一九九五）「日本近代語と漢訳洋書と英華辞典」『女子教育』一八　目白学園女子教育研究所所報
陳力衛（二〇〇〇）「明治初期における漢訳洋書の受容―柳原前光が購入した書物を中心に―」『東方学』九九　東方学会
陳力衛（二〇〇一）『和製漢語の形成とその展開』　汲古書院
陳力衛（二〇〇五）『博物新編』の日本における受容形態について―新概念への対応を中心に―」『日本近代語研究』四　ひつじ書房
陳力衛（二〇一三）「近代日本漢語の形成と中国語―漢訳『万国公法』から和訳『国際法』へ―」『現代日本漢語の探究』　東京堂
中泉行史ほか（二〇〇二）「文庫の窓から　「布列私解剖図譜」とその附図」『臨床眼科』五六（一二）　医学書院
中澤信幸（二〇一一）「呉音について」『日本語学』三〇（三）　明治書院
橋本南都子（一九九一）「清朝江南製造局翻訳館の設立とその歴史的役割」『東海大学紀要　外国語教育センター』一二　東海大学
飛田良文（一九六八）「明治大正期における漢音呉音の交替」『近代語研究』二　東京法令出版
飛田良文（一九七三）「近代語研究の資料」『季刊文学・語学』六六　三省堂
飛田良文（一九八六）「西洋文化の移入と新漢語」『月刊国語教育』九月号
飛田良文（二〇〇二）『明治生まれの日本語』　淡交社
深瀬泰旦（一九九六）「『医語類聚』の著者　海軍大軍医　奥山虎章」

『日本医史学雑誌』四二（一）　日本医史学会
深瀬泰旦（一九九七）「ロブリー・ダングリソンの『医学事典』―明治初年のわが国英米医学への貢献―」『日本医史学雑誌』四三（四）　日本医史学会
細川英雄（一九八九）「振り仮名―近代を中心に―」『漢字講座　第四巻　漢字と仮名』　明治書院
松井栄一（一九九三）「明治時代語探究の一つの試み」『国語研究』松村明先生喜寿記念会　明治書院
松井利彦（一九六九）「明治初期の漢音と呉音」『国語国文』三八（一一）　中央図書出版社
松井利彦（一九九〇）「明治初期の漢字音」『近代漢語辞書の成立と展開』　笠間書院
松井利彦（二〇〇二）「文体要素としての漢字音」『国語と国文学』七九（一一）　東京大学国語国文学会
松本秀士（二〇〇六）「ホブソン（合信）にみる解剖学的語彙について」『或問』一一　近代東西言語文化接触研究会
松本秀士（二〇〇七）「ポストホブソンの中国文西洋医学書」『或問』一三　近代東西言語文化接触研究会
八耳俊文（一九九九）「19世紀漢訳洋書及び和刻本所在目録」『『六合叢談』（1857-58）の学際的研究』　白帝社
八耳俊文（二〇〇九）「漢訳洋学書と19世紀日本の出版文化―ホブソン書を中心に―」『東アジアの知識交流と歴史記憶』　韓国東北亜歴史財団編
熊月之（一九九四）『西学東漸与晩清社会』　上海人民出版社
吉田寅（一九八九）「中国語キリスト教書の流入と仏教界の対応―幕末・明治初年を中心として―」『仏教史学研究』三二（一）　仏教史学会
吉田寅（一九九六）「中国キリスト教初期医療伝道史研究―ホブソン著中国語医学書の一考察―」『立正大学文学部研究紀要』一二　立正大学文学部
李家駒（二〇〇五）『商務印書館与近代知識文化的伝播』　商務印書館

調査資料

『岩波国語辞典』岩波書院　一九六三

『勝浦市史　通史編』勝浦市編纂委員会編　勝浦市　二〇〇六

『言海』大修館書店　一八七九

新『常用漢字表』（内閣告示）二〇一〇

『全訳漢辞海』（第三版）佐藤進ほか編　三省堂　二〇一一

『標註訂正康熙字典』　講談社　一九七七

『広辞苑』岩波書院　初版（一九五五）～第六版（二〇〇八）

『増續大廣益會玉篇大全』毛利貞齋著　天保五年甲午再刻校正監本

『大漢和辞典』諸橋轍次著　大修館書店　一九八四～一九八六

『大辞林』初版（一九八八）～第二版（一九九五）

『日本教育史資料』八　文部省総務局（一八九〇～一八九二）

『日本呉音の研究　索引篇・資料篇一』小倉肇著　新典社　一九九五

『日本国語大辞典』（第二版）小学館　二〇〇〇～二〇〇二

『明治期漢語辞書大系　解説／索引』大空社　一九九五～一九九七

覆製本

『医学英華字釈』ホブソン著　一八五八年　覆製本刊行未詳

『漢語字類』　庄原謙吉　一八六九　『明治期漢語辞書大系』大空社　一九九五～一九九七

『字彙』（明）梅膺祚撰『和刻本辞書字典集成』長澤規矩也編　汲古書院

『新編漢語辞林』山田美妙　一九〇四　『明治期漢語辞書大系』大空社　一九九五～一九九七

『新令字解』　荻田嘯　一八六八　『明治期漢語辞書大系』大空社　一九九五～一九九七

『必携熟字集』　村上快誠　一八七九『明治期漢語辞書大系』大空社　一九九五～一九九七

『医語類聚』　奥山虎章訳　名山閣　一八七二　『明治期専門術語集Ⅰ』一九八五

デジタル・マイクロ資料

『医語類聚』増訂版　奥山虎章訳　名山閣　一八七八　国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『改訂医科全書』「第四号　解剖篇下肢骨論之部」東京大学医学部編　一八七八年　国立国会図書館近代デジタルライブラリー

『改訂医科全書』「第五ノ上　解剖篇頭骨論之部」東京大学医学部編、

一八七九年　国立国会図書館近代デジタルライブラリー
『生物学語彙』岩川友太郎編　集英堂　一八八四　国立国会図書館近代デジタルライブラリー
『大日本国語辞典』上田万年　松井簡治著　金港堂書籍一九一五～一九一九　国立国会図書館近代デジタルライブラリー
『通俗全体新論』国立国会図書館近代デジタルライブラリー
『造化妙々奇談』　宮崎柳条編　牧野書房　一八八七　国立国会図書館近代デジタルライブラリー
『帝国大辞典』藤井乙男　草野清民編　三省堂　一八九六　国立国会図書館近代デジタルライブラリー
『日本大辞典』山田美妙編　日本大辞書発行所　一八九三　国立国会図書館近代デジタルライブラリー
『日本新辞林』棚橋一郎　林甕臣編　三省堂　一八九七　国立国会図書館近代デジタルライブラリー
『和英語林集成』初版、再版、三版　明治学院大学図書館デジタルアーカイブス
『漢語大詞典』上海辞書出版社　一九九五

中国側資料

『医宗金鑑』（清）呉謙他撰　デジタル版

使用コーパス・データベース

「CiNii Books」国立情報学研究所

http://ci.nii.ac.jp/books/

japanknowledge　『日本国語大辞典』

http://japanknowledge.com/

『全国漢籍データベース』

http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki

謝　辞

本論文は筆者が北海道大学文学研究科博士後期課程在学中に行った研究成果をまとめたものです。

本研究への道を開いて下さった上に、本研究の全般に渡るご指導と激励をを賜りました、指導教官である池田証壽先生に深く感謝しております。研究に戸惑いを感じることも少なくなかったが、池田証壽先生の根気よく暖かい指導のおかげて、幅広い視点で研究をすることができました。ご指導いただいた数多くの時間は、私にとっての生涯の宝ものとなりました。これからの研究生活においても、努力を重ねていきたいと思います。

執筆にあたり、小野芳彦先生・加藤重広先生、佐藤知己先生、李連珠先生、松江崇先生には多大なる助言をいただきました。これらの貴重なアドバイスのおかげで、本論文を完成させることができ、深甚の謝意を表します。また、学会や研究会で出会った多くの先生方にも、貴重なご指導を数多く賜ったこと、深く感謝申し上げます。そして、留学生である私の日本語の校正を手伝ってくださった先輩・学友にも感謝の意を表したいと思います。

調査に際しては、貴重な資料の閲覧にご協力下さった所蔵機関と、その準備を整えていただいた北海道大学文学部図書係に、多大なる恩恵を受けました。記して深く感謝申し上げます。

最後に、今まで暖かい励ましをいつも送り続けてくれた家族の皆に、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。